

欠

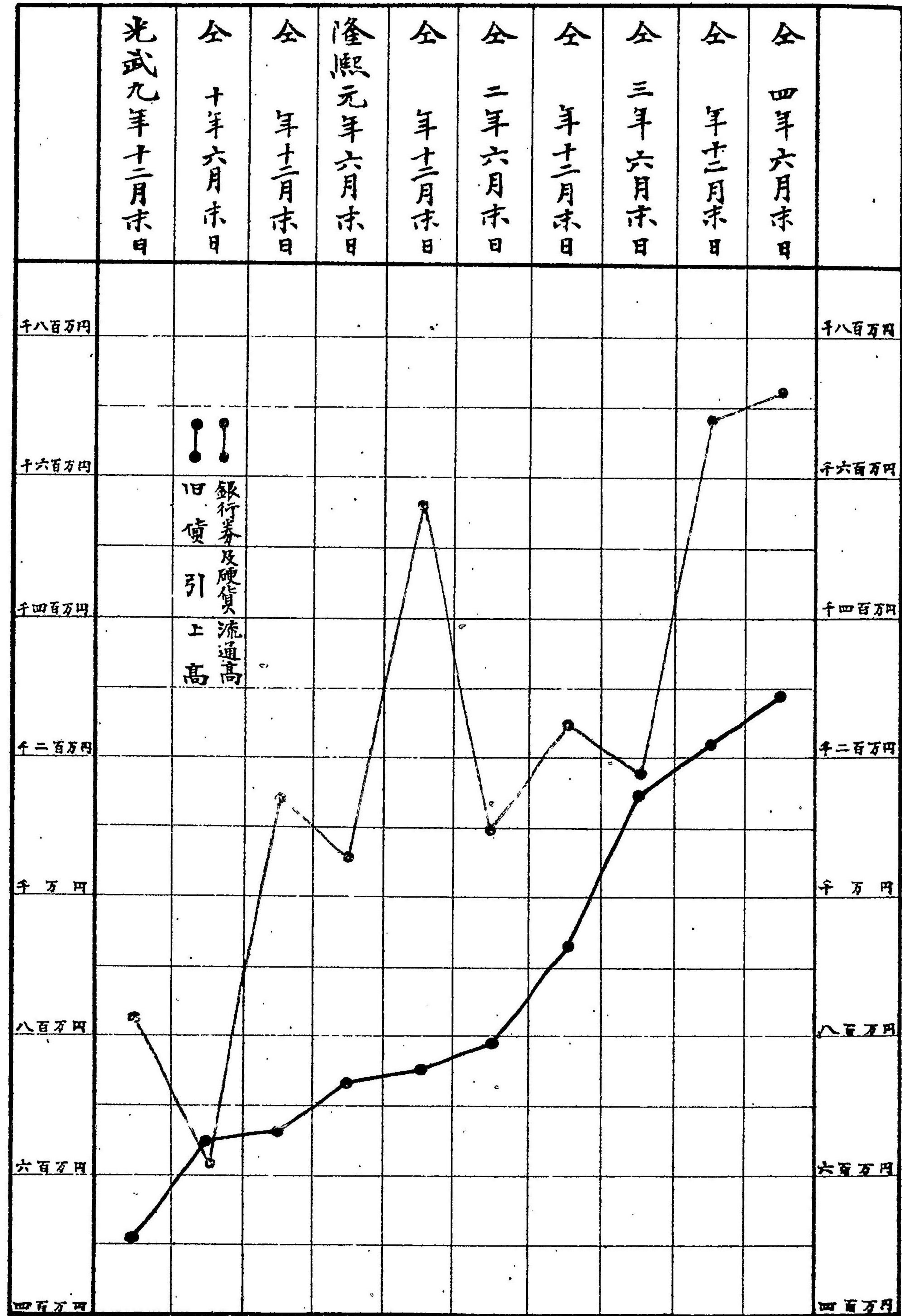
MISSING

シカ其後補助銀貨ノ鑄造完成シ之ヲ發行スルニ及ヒ五拾錢以下ノ小銀行券ハ其發行ヲ停止セリ次テ壹圓券、五圓券、拾圓券ノ形式ヲ改造シタルヲ以テ銀行券ハ一層多大ナル信用ヲ得テ圓滑ニ流通セリ其後客年十一月韓國銀行設立セラレ第一銀行ヨリ業務一切ヲ引繼クニ當リ發行銀行券モ之ヲ繼承シタリシカ尙同行銀行券未タ製造ノ運ニ至ラザリシヲ以テ第一銀行未發行券ヲ韓國銀行券トシテ發行セリ而シテ近時貨幣整理ノ進捗及財政經濟ノ膨脹ニ伴ヒ銀行券ノ市場流通高モ著シク増加セリ最近四箇年間ノ流通高左ノ如シ

年	次	市	場	流	通	額
隆熙元年	六月末					八、一六九、八〇九
同 二 年	六月末					七、七七八、九三五
同 三 年	六月末					九、〇九六、一二六
同 四 年	六月末					一二、五九七、二四六

第五節 結論

銀行券新貨市場流通高及舊貨回收高比較表

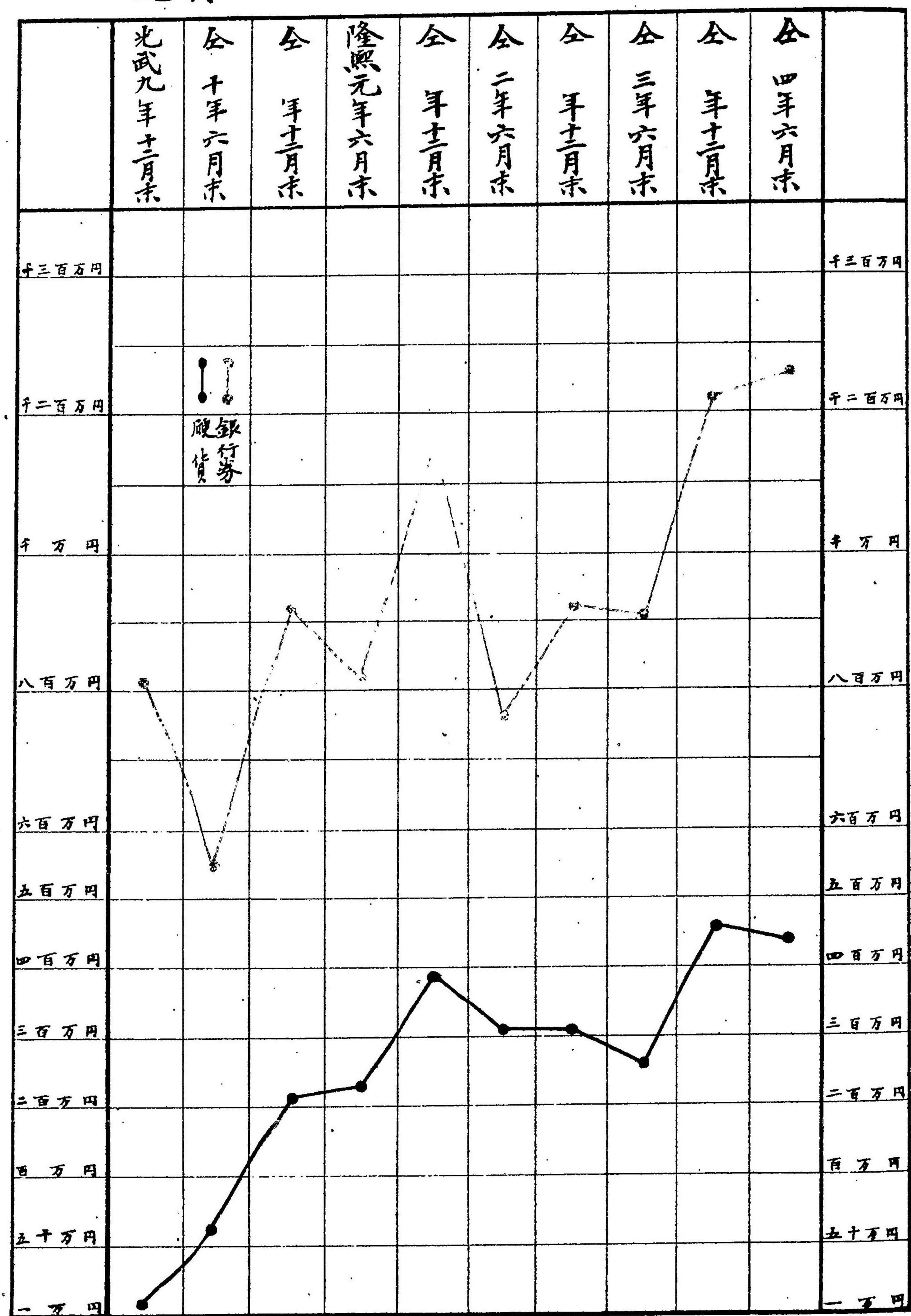


第二編 第一章 貨幣

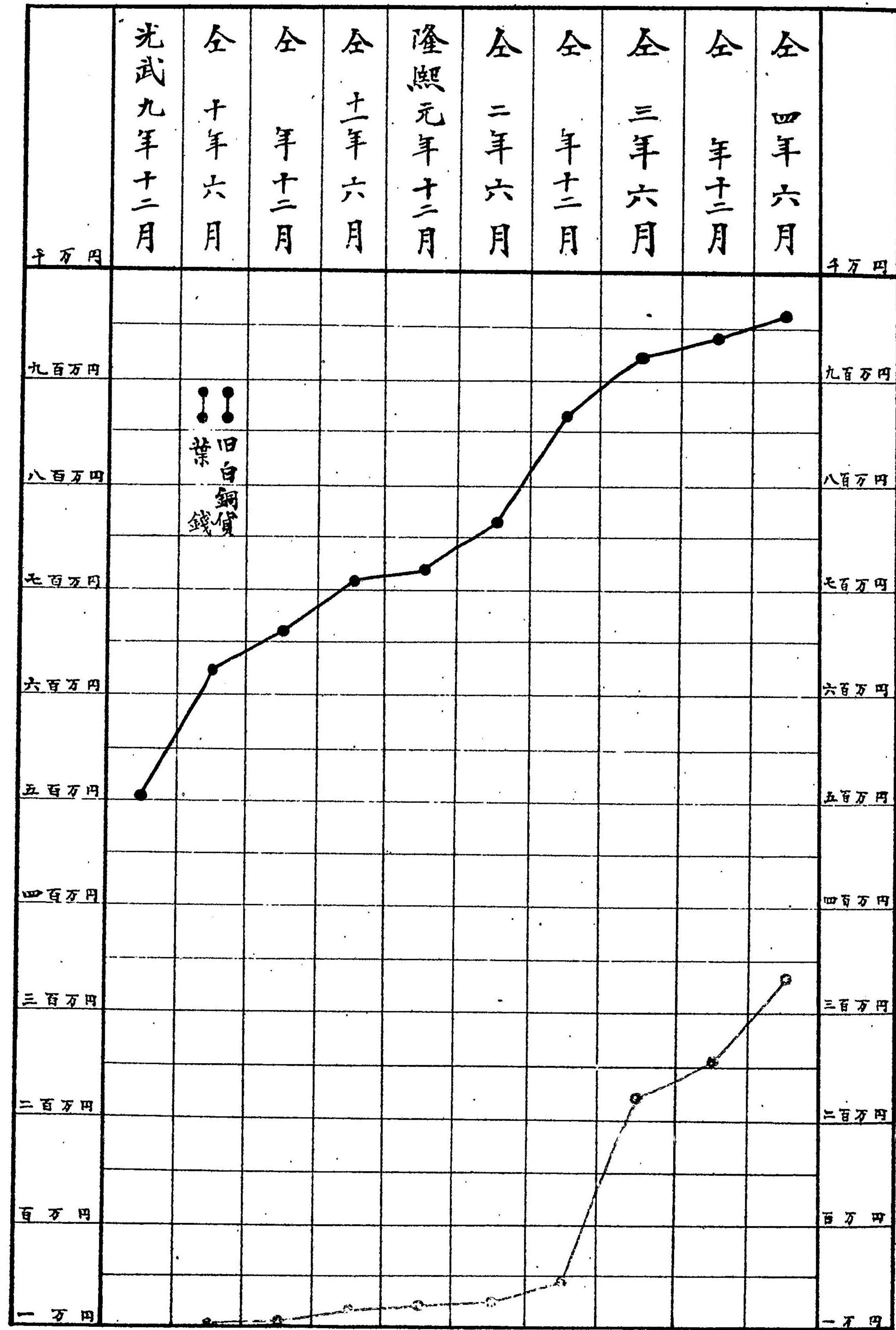
一五二

斯ノ如ク今ヤ新貨及銀行券ハ普ク流通シ舊白銅貨ハ市場ニ其跡ヲ絶テ葉
 錢ハ準補助貨トシテ小取引ヲ回滑ナラシムルノミ通貨ノ信用ハ半乎トシ
 テ拔クヘカラス物價ハ平準適正ヲ維持スルニ至リ紛糾錯雜ヲ極メタル幣
 制モ此ニ整理確立ノ實ヲ擧ケ得タリト云フモ過言ニアラス試ニ新貨及銀
 行券ノ發行額竝ニ舊貨引上高ノ變遷ヲ表示セシ

硬貨及銀行券市場流通高表



舊白銅貨及葉錢期末回收高表



第二章 金庫

一 金庫設置

從來百弊ノ根源ヲ爲シタル國庫收支ノ紛糾錯雜ヲ匡革スヘク會計法規ノ整備ヲ計リタルト共ニ金庫制度ヲ確立センカ爲メ光武八年十二月明治三十七年(金納出納役ノ制ヲ定メ次テ翌光武九年一月株式會社第一銀行ト國庫金取扱ニ關スル契約ヲ締結シ同行ヲシテ金庫出納役ノ地位ニ立タシメ金庫出納ニ關スル一切ノ事務ヲ委託シ同行京城支店ヲ以テ中央金庫トシ各地ノ支店出張所十箇所ヲ支金庫トシテ國庫歲入金ハ總テ之ヲ同行ニ預入スルコトニ定メタリ

二 通信官署國庫金事務取扱委託

然ルニ支金庫未タ少數ニシテ國庫金ノ收支ニ不便尠ナカヲサリシニ依リ政府ハ光武十年(明治三十九年)四月統監府通信管理局ト協定シ取扱手数料毎年貳拾五萬圓ヲ提供シテ韓國歲入歲出出納事務取扱ヲ委託シ同年七月ヨリ金庫未設地方ニ於ケル郵便局所ニ於テ國庫金出納事務ヲ開始セリ之

カ爲通信管理局ニ於テハ官制ヲ改正シ郵便局所ヲ増設シ現今ニ於テハ國庫金取扱ヲ爲ス郵便局所全國ニ涉リ百五十箇所ヲ數フルニ至レリ

三 農工銀行等支金庫事務取扱

此ノ如ク金庫及通信官署ニ於テ國庫金出納ニ執掌セシモ財務ノ發展ニ伴ヒ國庫金ノ收支繁劇ヲ加ヘ益支金庫増設ヲ要セシカ爲更ニ漸次各農工銀行、漢城銀行及十八銀行ヲ以テ第一銀行ノ代理店トナシ支金庫事務ヲ取扱ハシメタリ而シテ現在金庫ノ數ハ全國ヲ通シテ二十八箇所ナルカ客年韓國銀行設立セララルヤ同年十一月ヲ以テ從來第一銀行ノ取扱ヒタル國庫金出納事務ハ舉ケテ同行ニ繼承セシメタリ
今國庫金出納事務取扱所現在ヲ表示スレハ左ノ如シ

道別	中央金庫	支金庫	通信官署	計
京畿	—	—	二五	二五
忠清南道	—	—	二二	二二
忠清北道	—	—	二七	二七
全羅南道	—	—	二四	二四
全羅北道	—	—	—	—
計	—	—	九八	九八

道別	中央金庫	支金庫	通信官署	計
全羅北道	—	—	二〇	二〇
慶尙南道	—	—	三三	三三
慶尙北道	—	—	二七	二七
江原道	—	—	二四	二四
黃海道	—	—	三三	三三
平安南道	—	—	二九	二九
平安北道	—	—	三三	三三
咸鏡南道	—	—	五九	五九
咸鏡北道	—	—	二七	二七
計	—	—	二五〇	二五〇

第三章 國債

第一節 國債種類及使途

從來韓國ニ於テハ國債ナルモノナカリシカ財政顧問就職ノ翌年光武九年(明治三十八年)六月國債證券ヲ發行セシヲ以テ本邦ニ於ケル國債ノ嚆矢トナス其以後起債セラレタル各種國債ノ種類及使途等ヲ舉クレハ左ノ如シ

一 國庫證券

光武九年度(明治三十八年)ニ於テ國庫ノ償還ヲ要スルモノ及其他臨時經費ヲ合シテ約貳百萬圓ノ支出ヲ要セシカ之ニ應スルノ財源ヲキテ以テ同年六月國庫證券條例ヲ發布シ短期公債貳百萬圓ヲ第一銀行ヲシテ引受ケシメ東京ニ於テ之ヲ發行セリ然ルニ昨隆熙三年(明治四十二年)六月償還期ニ入リシ際偶日本興業銀行ヨリ借入金契約成立シタルニ依リ之カ資金ヲ繰替へ百萬圓ヲ限り抽籤ヲ以テ償還ヲ爲シ本年六月一日同シク公債金ヲ以テ繰替へ更ニ殘額百萬圓ノ償還ヲ完了シタリ

二 貨幣整理資金債

政府ハ貨幣整理ヲ爲スニ當リ多大ノ經費ヲ要スヘキヲ以テ該資金ニ充用センカ爲メ光武九年(明治三十八年)一月株式會社第一銀行ト借入契約ヲ締結シ參百萬圓ヲ借入レタリ

三 金融資金債

金融市場救済ノ目的ヲ以テ政府ハ銀行其他金融機關ヲ創設シ之ニ補助ヲ與へ京城及地方農商民ノ金融ヲ謀リ又一面ニハ地方倉庫ヲ建設スルノ計畫ヲ立テ光武九年(明治三十八年)十二月日本政府ト契約ヲ結ヒ金融資金百五十萬圓ヲ無利子ヲ以テ借入レタリ

四 第一起業資金債

本邦ノ利源ヲ開發シ農工商ノ發達ヲ期スルノ必要上各種起業ノ資途ニ充ツル爲メ光武十年(明治三十九年)三月政府ハ日本興業銀行ヨリ起業資金壹千萬圓ノ借入ヲ約シ差向五百萬圓ハ同年三月ニ受領シ殘額ハ必要ノ時ニ於テ受領スルコトトセルモ其後之ヲ見合セ第二起業資金ヲ同行ヨリ借受クルコト、セリ

五 第二起業資金債

第二起業資金ハ土地調査其他財源啓發ノ爲日本興業銀行ヨリ借入レタルモノニシテ既ニ借入契約ヲ爲シタル第一起業資金ノ殘額五百萬圓ノ借入ヲ見合セ之ヲ加ヘテ隆熙二年(明治四十一年)十二月同銀行ト交渉ノ上英佛兩國ニ於テ各壹百萬磅宛ノ興業債券ヲ發行セシメ該募集金千七百九拾六萬參千九百貳拾圓ヲ借入レタリ而シテ右ノ内五百萬圓ハ第一起業資金借入契約ニ基クテ貸上金五百萬圓ノ還付ト同時ニ之ヲ受入ルルコト、セリ

六 起業公債

統監府通信官署取扱ニ係ル韓國ニ於ケル日韓人預入ノ郵便貯金ハ漸次其額ヲ増加シ將來ニ於テ著シキ金額ニ達スルノ趨勢ナリ然ルニ右貯金ハ日本大藏省預金部預金ニ組入レラレ日本銀行ニ於テ運用利殖セラル、モ右資金ハ當國ニ放資スルヲ以テ適當トス仍テ大藏省ト交渉ノ上百萬圓ノ起業公債ヲ發行シ同省預金部ヲシテ應募セシムルコト、シ隆熙二年(明治四十一年)十一月勅令第八十一號ヲ以テ起業公債條例ヲ發布シ之ヲ募集セリ而シテ右公債金ハ各種金融機關ヲ通シテ放資ノ途ヲ開ケリ

七 日本政府借入金

日韓新協約ノ實施ニ伴ヒ施政改善ニ必要ナル經費支辨ノ爲メ隆熙二年(明治四十一年)三月政府ハ日本政府ト借入契約ヲ締結シ壹千九百六拾八萬貳千六百貳拾參圓ヲ限リ六箇年間ニ隨時借入ルルコト、セリ而シテ本年迄ニ借入レタル金額ハ壹千六百六拾八萬貳千六百貳拾參圓ナリ

八 貨幣整理資金借越

當國貨幣整理ニ關シテハ實ニ多大ナル費用ヲ要シ前記ノ整理資金參百萬圓ノミニテハ到底悉皆之ヲ支辨スルコトヲ得サルヲ以テ貨幣整理事務取扱銀行ヨリ經費借越ノ約定ヲ以テ立替ヲ爲サシム而シテ五月末日ニ於ケル現在額ハ八百五拾六萬四千八百拾八圓參拾七錢四厘ナリ

國債現在高表

隆熙四年(明治四十一年)五月末現在

區分	發行高及借入高	償還高	差引現在高	利率(年利)	發行又ハ借入年月日	据置年限	償還年月	借入先
國庫證券	2,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	七分	光武九年六月三箇年	隆熙四年六月	(明治四十三年)	日本國內募
貨幣整理資	3,000,000,000	—	3,000,000,000	六分	上六箇年	同九年六月	(明治四十八年)	第一銀行
金融資金債	1,000,000,000	—	1,000,000,000	無利子	同十二年	同六年十二月	(同四十五年)	大日本政府
第一起業資	5,000,000,000	—	5,000,000,000	六分五厘	同十年三月五箇年	同十年三月	(同四十九年)	興業銀行

第二起業資 金債	起業公債	日本政府借 入金	貨幣整理資 金借越	國庫金借越	計
二九六三九〇〇〇〇	一〇〇〇〇〇〇〇〇	一六八二六三〇〇〇	八五六四八二八七四		四五七一三六二三七四
二九六三九〇〇〇〇	一〇〇〇〇〇〇〇〇	一六八二六三〇〇〇	八五六四八二八七四		一〇〇〇〇〇〇〇〇
同	六分	無利子	六分	無利子	
隆熙二年十二月 (明治四十二年)	上五箇年 (同十七年十二月 至五十六年)	同	同	同	
同	大日本大藏 省預金部	大日本政府	韓國銀行	同	
上				上	

第二節 公債金特別會計

從來前記ノ起業資金、金融資金等ハ之ヲ資金會計トシ各別ニ整理シ來リシ
カ其收支取扱上種々手數ヲ要シ又資金ノ運用ニ不便尠カラサリシヲ以テ
之等ノ資金ヲ合同シ整理スルノ便宜ナルヲ認メ隆熙三年(明治四十二年)法
律第七號ヲ以テ公債金特別會計法ヲ設ケ之等ノ資金ニ關稅收入ヲ以テセ
ル工事資金ヲ合併シ從來ノ各會計ヲ閉鎖シ公債金特別會計トシテ之ヲ整
理セリ而シテ本年五月末日現在公債金特別會計ノ受入額及支出額ハ左記
ノ如クニシテ其收支差引現在高ハ大藏省預金部、韓國銀行及香港上海銀行
ニ預入ヲ爲セリ右支出濟金ノ重ナル費目ハ治道費、水道工事費、金融組合資

金、韓國銀行株式引受金、同貸付金、地方倉庫建築費、印刷局擴張費、海關工事費、
鹽田築造及廳舍新營設備費等ナリ

公債金特別會計資金收支額表

隆熙四年(明治四十三年)五月末現在

區別	受		支	
	金額	區別	金額	區別
起業公債募集金	1,000,000,000	公債金ヲ財源ト スル經費ノ支拂	750,269,243	
起業資金繰入	11,775,070			
工事資金繰入	3,306,874			
金融資金繰入	4,550,047			
三年度利子收入	1,371,470			
四年度利子收入	3,787,370	差引現在金	878,055,237	
計	1,030,844,100	計	1,630,844,100	

第四章 金融機關

第一節 緒 說

現今當國ニ於ケル金融機關ハ概ネ光武八年(明治三十七年)以降財政整理ノ結果創設セラレタルモノナリトス
從來當國ニ於ケル産業中農業ハ多少ノ發達ヲナセシト雖商工業ハ一トシテ見ルニ足ルモノナク文化ノ程度低ク交通極メテ不便ナリシカ爲經濟狀態ハ近世ニ至ル迄極メテ幼稚ニシテ物々交換ノ域ヲ脱セザリキ加之多年收歛ノ結果人民勤儉貯蓄ノ美風ヲ缺キ偶々家財アレハ悉ク之ヲ土中ニ埋藏シテ厚生利用ノ途ヲ知ラス且地方行政機關ハ同時ニ徵稅事務ヲ掌リ租稅其他ノ公金ハ直チニ中央政府ニ上納セラル、コトナク郡守又ハ觀察使ハ或期間之ヲ商人ニ貸與シテ商業資金ニ使用スルコトヲ許シ中央政府モ亦國庫ニ一時借入金ノ必要アルトキハ其金額ヲ商人ヨリ借入レ同時ニ外劃制度ニ依リ地方行政官ニ對シテ其徵收シタル稅金ヲ直接第三者(債權者タル商人)ニ給付スヘキ命令ヲ發セリ此ノ如キ制度ハ信用機關ノ缺乏セル

當國ニ於テハ中央ト地方トノ間ノ資金流通ノ便ヲ與ヘシモノナレ共其實害ノ及フ所大ナルコト多言ヲ要セス又當國ニ於ケル商取引ハ於音ト稱スル極メテ不完全ナル約束手形ノ受授ニ依リテ行ハレタルモノナルカ往々濫發ニ陥リ易ク且貨幣制度ノ紊亂ハ益取引關係ヲ錯雜不安ナラシメ遂ニ光武八九年(明治三十七八年)ノ交ニ至リテハ白銅貨ノ濫造、於音濫發ノ爲京城商人間ニ一大恐慌ヲ起シ商民ノ閉店又ハ遁逃スルモノ續出シ人心恟々當路者ニ對シテ救濟ヲ求ムルノ聲囂シキニ至レリ

事情此ノ如クナルヲ以テ光武八年(明治三十七年)十月財政顧問其職ニ就カル、ヤ宿弊ヲ一掃スルト共ニ財界ノ急ヲ救フノ方針ヲ採リ一方ニ於テハ歲計豫算ヲ正シクシ貨幣制度及徵稅制度ノ統一ヲ圖リ全然外劃ヲ廢止シ他方ニ於テハ京城ニ於ケル恐慌ニ對シテ健全ナル救濟ノ方法ヲ講シ又外劃廢止ノ爲ニ起ルヘキ地方金融ノ梗塞ヲ緩和シ併セテ産業ノ興起、小農民ノ發達ヲ期スルノ施設ヲ爲セリサレハ現在金融機關ハ之等ノ方針ニ依リテ設置セラレタルモノナリトス以下當國ニ於ケル金融機關ヲ概說セントス

第二節 漢城共同倉庫株式會社及手形組合

一 漢城共同倉庫株式會社

前ニ述ヘタル光武八、九年(明治三十七、八年)ノ交ニ於ケル京城商人間ノ恐慌ハ其及フ處甚クシク當時韓民倉惶相集リテ金融ノ逼迫ヲ疾呼シ商人ハ空シク貨物ヲ擁シテ資金融通ノ途ヲ失ヒ共ニ政府ノ扶助救濟ヲ瞻望セリ此ニ於テ政府ハ從來ノ例ニ倣フテ妄リニ一時ノ下賜金ヲ下附スルコトヲ爲サス光武九年(明治三十八年)九月共同倉庫章程ヲ發布シ同年十二月拾五萬圓ノ資金ヲ貸下ケ政府ノ特別監督ノ下ニ漢城共同倉庫株式會社ヲ設立セシメ貨物ノ寄託ヲ引受ケ預證券ヲ發行シ主トシテ商品擔保貸付ヲナスト共ニ財界ノ急ニ應スル爲メ商業手形ノ割引竝ニ不動産擔保貸付(後ニ至リ不動産擔保貸出ハ中止セシメタリ)ヲ兼營セシメタリ爾後政府ヨリ多大ノ補助ヲ與ヘタルト共ニ同社ハ仁川、江景、平澤ニ出張所ヲ設ケ業務歲ト共ニ發達セリ現今同社ノ使用セル倉庫ハ本店及出張所ヲ合シテ十八棟、建坪千二百坪餘ニ及ヘリ今本會社ノ營業一覽表ヲ示サハ左ノ如シ

漢城共同倉庫株式會社一覽表 隆熙四年(明治四十三年)六月末現在

公稱資本金	拂込資本金	政府貸下金	積立金及繰越金	貸出金	支店及出張所數
15,000,000	5,950,000	3,560,000	5,530,000	3,400,000	出張所 三

二 手形組合

當國ニ於テハ從來金融ノ媒介者トシテ於音ナルモノ流通セシハ前述ノ如シ然リト雖モ於音ノ信用手形トシテ不完全ナリシト且之カ濫發ノ弊トハ白銅貨ノ濫造ト相俟ツテ經濟界ニ大恐慌ヲ起シタルヲ以テ於音ノ撲滅ヲ計リ之ニ代テ完全ナル商業手形ノ流通ヲ企劃セサルヘカラストナシ光武九年(明治三十八年)九月手形組合條例及約束手形條例ヲ發布シ翌年十一月手形條例ヲ制定シ光武九年(明治三十八年)十二月京城ノ有力ナル商民ヲ網羅シテ手形組合ヲ組織セシメ組合員ノ發行スル手形ニハ組合カ支拂保證ヲ爲スコト、シ以テ手形ノ流通ヲ獎勵セリ爾後平壤、大邱、晋州、全州、光州竝ニ鎮南浦、水原ニ本支所ヲ設立シ益業務ヲ擴張シテ組合ノ保證セシ手形ハ各銀行ニ於テ最モ低歩ニ割引セラレ人民ヲシテ真正ノ手形ノ效用ヲ周知セシムルニ至レリ今左ニ手形組合事業一覽表ヲ示セハ左ノ如シ

各手形組合一覽表

隆熙四年(明治四十三年)六月末現在

手形組合名	基本金	政府貸下金	積立金及前期繰越金	借入金	保證現在高
漢城手形組合	1,313,000.00		30,957.85		2,507,275.00
平壤手形組合	5,000,000.00	31,000.00	10,584.60	90,000.00	2,533,988.00
大邱手形組合	5,000,000.00		5,863.70		7,232,000.00
全州手形組合	3,000,000.00		5,232.65		5,135,000.00
晉州手形組合	3,000,000.00		5,140.80		4,158,500.00
光州手形組合	2,000,000.00		2,063.35		4,079,500.00
計	33,313,000.00	31,000.00	60,812.55	90,000.00	34,958,383.00

第三節 普通銀行

當國ニ於ケル普通銀行ハ天一銀行、漢城銀行、韓一銀行ノ三行ニシテ皆京城ニ本店ヲ有ス

一 天一銀行

天一銀行ノ創立セラレタルハ開國五百四年(明治二十八年)ナリシモ其理事者ハ經營ノ方法ニ通曉セス常ニ政客ノ勢力ニ利用セラレ且ツ貨幣制度混

亂シテ韓貨ノ相場日々亂高下ヲ呈シ業務ノ執行次第ニ困難トナリ遂ニ光武九年(明治三十八年)京城ノ恐慌ニ際シテ閉店セントスルノ悲境ニ陥リシヲ以テ政府ハ貳拾四萬圓ノ貸下金ヲ交附シテ度支部ノ監督ノ下ニ整理ヲ了セシメ爾後資本金ノ増加ヲ爲シ業務ノ發展ト共ニ一昨年南大門ニ出張所ヲ設ケ益盛大ニ赴キツ、アリ

二 漢城銀行

光武三年(明治三十二年)第一銀行監督ノ下ニ設立セラレタルモノナレトモ同九年(明治三十八年)ノ恐慌ニ逢ヒ資金固定シ營業困難ヲ告ケシヲ以テ政府ハ拾萬圓ノ貸下ヲ爲シ今ヤ度支部監督ノ下ニ業務逐年繁忙トナリ水原及東幕ニ支店、出張所ヲ設クルニ至レリ

三 韓一銀行

光武十年(明治三十九年)八月ノ開業ニシテ元來財政顧問ノ財政々策ニ對抗セル京城韓人實業家ノ創設ニ係ルモノナレ共時運ノ進歩ト共ニ漸次政府ノ方針ニ對スル誤解ヲ去リ現今度支部ノ監督ノ下ニ天一銀行、漢城銀行ト相並ンテ京城及其附近ノ金融ノ疏通ニ便益ヲ加フル處大ナリトス而シテ

同行ハ全然韓人ノミニ依リテ組織經營セラル、ト雖モ營業ノ狀況近來大イニ見ルヘキモノアリテ東幕ニモ出張所ヲ有スルニ至レリ今之等諸銀行ノ營業ノ狀況ヲ表示スレハ左ノ如シ

普通銀行一覽表

隆熙四年(明治四十三年)六月末現在

銀行名	公稱資本金	拂込資本金	政府貸下金	積立金及前期繰越金	預リ金	貸出金
天一銀行	五〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一五〇,〇〇〇,〇〇〇	一八〇,〇九五,〇〇〇	九七五,〇〇〇,〇〇〇	六七八,七二九,〇〇〇	八五八,九五三,四六〇
漢城銀行	三〇〇,〇〇〇,〇〇〇	七五〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	六七八,七五〇,〇〇〇	四九八,一七二,〇四〇	五七二,七三三,四九〇
韓一銀行	五〇〇,〇〇〇,〇〇〇	二五〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	三八七,七〇〇,〇〇〇	六二八,八九九,九五〇	五七七,四三三,二五〇
計	一,三〇〇,〇〇〇,〇〇〇	三,一五〇,〇〇〇,〇〇〇	二,八〇,〇九五,〇〇〇	二,四〇〇,八八〇,〇〇〇	一,七九〇,七八三,四四五	二,〇〇八,一〇〇,二〇〇

第四節 農工銀行

財政整理以前ニ在リテハ前述ノ如ク觀察使、郡守等ハ皆公金ヲ融通シテ地方金融ヲ緩和セシモ其弊害甚大ナリシヲ以テ外劃ヲ廢止シタルカ政府ハ之ニ依リテ起ルヘキ地方金融ノ逼迫ヲ慮リ先ツ全國樞要ノ地ニ政府倉庫ヲ建設スルノ計畫ヲ立テ米穀擔保貸付ヲ主トシテ特別事情アル處ニテ

ハ不動産擔保貸付ヲ許スノ方針ナリシカ倉庫ノ建設ニハ時日ヲ要スルヲ以テ之カ設備ヲ俟タスシテ資金ヲ全國樞要ノ地ニ駐在セル財務官ニ交付シ貸出ヲ開始セリ然レトモ是レ一時ノ急ヲ濟ハントスルノ施設ニ外ナラサリシヲ以テ人心ノ漸ク靜平トナルニ及ヒ地方産業ノ興起竝ニ金融ノ疏通ニ對スル根本的方策ヲ確立シ光武十年(明治三十九年)三月農工銀行條例ヲ發布シ翌月ヨリ之カ設立ニ著手シ或ハ政府ニ於テ株式ヲ引受ケ又ハ無利子貸下金ヲナシ全國各觀察道所在地ニ一箇所宛ノ本店ヲ設置セシカ後ニ至リ經濟交通ノ點ヲ斟酌シテ併合ヲ行ヒ現今全國ヲ通シテ本店ハ京城、平壤、大邱、全州、光州及元山ノ六箇所ニ置カレ之カ支店、出張所ハ二十七箇所ヲ有スルニ至レリ其業務ノ要項左ノ如シ

- 一、年歩又ハ定期償還ノ方法ニ依リ不動産ヲ典當トシテ貸付ヲ爲ス
- 二、法令ヲ以テ組織セラレタル公共團體ニ對シ無擔保ニテ前項ノ貸付ヲ爲ス

三、二十人以上ノ農業者又ハ工業者カ申合セ連帶責任ニテ借用ヲ申出タルトキハ其信用確實ナル者ニ限り五箇年以内ニ於テ定期償還ノ方法

ニ依リ無典當ニテ貸付ヲ爲ス
 尤モ前數項ノ貸付ハ開墾排水灌溉及耕地土質ノ改良殖林事業等ノ農工業
 ノ爲ニ使用スルモノナルコトヲ必要トス尙ホ農工銀行ハ當國ノ現狀ニ應
 スル爲メ商業手形ノ割引竝ニ爲替預金等普通銀行業務ヲ兼營スルコトヲ
 得セシメタリ

農工銀行ノ設立ト共ニ前記政府倉庫ノ殘務ハ概ネ之ニ引繼カシメ尙ホ政
 府ハ貨物集散ノ要地ニ倉庫ヲ建設シテ之ヲ農工銀行ノ貸付ケ倉庫ノ兼營
 ヲモ許可スルコト、セリ今農工銀行ノ營業狀況ト農工銀行貸下倉庫ノ一
 覽表ヲ示セハ左ノ如シ

一 農工銀行一覽表

隆熙四年(明治四十三年)六月末日現在

銀行名	所在地	公稱 資本金	拂込 資本金	積立金	預金	貸出金	農工銀行 發行高	政府 貸下金	支店 出張所數
漢湖農工銀行	京 畿漢城府	2,000,000	1,643,350	298,500	8,764,121	5,334,285	350,000	3,491,100	7
平安農工銀行	平安南道平壤府	1,000,000	1,066,219	311,545	2,703,011	1,692,286	100,000	3,145,000	6
慶尙農工銀行	慶尙北道大邱府	2,000,000	650,000	290,000	5,380,777	8,446,691	1,900,000	2,100,000	5

全州農工銀行	全羅北道全州府	1,000,000	844,400	188,800	2,661,281	4,296,761	95,000	3,076,000	2
光州農工銀行	全羅南道光州府	1,000,000	550,000	1,700,000	1,590,061	3,725,331	1,450,000	70,000	3
咸鏡農工銀行	咸鏡南道元山	2,000,000	798,350	420,000	2,654,221	5,265,331	1,500,000	1,600,000	4
合計		11,000,000	5,552,550	3,314,750	23,866,621	48,446,971	10,300,000	13,168,000	27

二 農工銀行貸下倉庫一覽表 隆熙四年(明治四十三年)六月末日現在

所在地	棟數	建坪數	貸付銀行
平壤	三	一六四	平安農工銀行
大邱	三	二四〇	慶尙農工銀行
光州	一	八〇	光州農工銀行
榮山	三	八〇	同上
開城	一	三一	漢湖農工銀行
沙利	一	三六	平安農工銀行
全州	一	五〇	全州農工銀行
計	一三	六八〇	

第五節 地方金融組合

地方小農民間ノ金融ヲ緩和シ農業ノ發達ヲ企圖スルハ何レノ國ニ於テモ必要トスル處ナルカ殊ニ當國ノ如キ數十年來稅政ノ下ニ困憊セル細民ヲシテ生計ノ餘裕ヲ得セシメ地方生産力ノ發達ヲ計ルハ經濟發展上最モ急務トスル所ナルヲ以テ光武十一年(明治四十年)五月地方金融組合規則ヲ制定シ爾後豫算ノ許ス限リ各地ニ地方金融組合ヲ設立セシムルコト、シ政府ハ各組合ニ對シテ基本金壹萬圓ヲ無利子ニテ貸下ケ理事ヲ推薦シ二三組合ヲ通シテ農業技手一名宛ヲ配付シ其監督指導ニ當ラシム同組合ハ一郡或ハ二三郡ヲ其區域トシ域内ニアル韓人ニシテ農業ヲ營ム者ヲ以テ其組合員トシ組合員ニ對シテハ一人五拾圓ヲ限度トシテ農工業小資金ノ融通ヲ與ヘ其他生産物ノ委託販賣、必需品ノ共同購入ヲ取扱ヒ尙貨物集散ノ地ニアル組合ハ政府補助ノ下ニ倉庫ヲ建設セシメテ米穀擔保貸付ヲ獎勵セリ現今既設組合百箇所ニシテ設立計畫中ノモノ三十箇所アリ業務ノ成績歲ト共ニ大イニ見ルヘキモノアリテ當初ノ目的ハ著々トシテ現實セラレツ、アリ而シテ將來組合ノ發達ト共ニ各地農工銀行トノ聯絡ヲ密ニシ爲替並ニ預金等ヲ取扱ハシムルノ計畫ニテ目下之カ調査中ナリトス今各

地方金融組合ノ狀況ヲ表示スレハ左ノ如シ

地方金融組合一覽表

隆熙四年(明治四十三年)四月末日現在

道名	組合數	組合員數	貸付金現在高	共同購入高	委託販賣高
京 畿	八	二二四九	五三三三三〇		
江 原 道	七	二二三八	四〇九八六九〇〇	五九一〇〇	八八六一六〇
忠 清 南 道	一〇	三〇五一	六六〇四九五〇〇		
忠 清 北 道	六	一七二六	三三〇三五四〇	七五〇	一三八七三〇〇
全 羅 南 道	一〇	三〇一一	七六五五五五三六	三三四一〇	二三八一〇〇〇
全 羅 北 道	九	三三四七六	六一七五八八〇		
慶 尙 南 道	九	三二五三	四三〇四二三〇	八六三八四五	三三二二四五
慶 尙 北 道	一〇	三六五三	六九〇三三三七六	一六四三三三〇	六三三二二
咸 鏡 南 道	一〇	二五二六	五一九七三三〇〇		二三八三〇
咸 鏡 北 道	三	七六八	一五〇〇六〇〇〇		
平 安 南 道	六	一七二三	五二四九〇〇〇〇	三三三三〇	一一五〇〇五
平 安 北 道	五	一五四四	三三三三〇九五〇	三〇一〇〇	
黃 海 道	七	二二二〇	四八二二六〇〇〇	二六六七〇	

第六節 韓國銀行

當國ニ於ケル國庫金ノ出納、銀行券ノ發行其他中央銀行業務ハ從來株式會社第一銀行京城總支店ヲシテ之ヲ取扱ハシメタルモ近年財政ノ膨脹、經濟ノ發展ニ伴ヒ金融ノ中樞タル中央銀行設立ノ必要甚タ切ナルモノアルヲ以テ遂ニ隆熙三年(明治四十二年)初秋韓國銀行ヲ設立シ十一月ヨリ業務ヲ開始セシメタリ是ニ於テ當國金融機關ノ施設ハ漸ク大成セラレタリト云フヘシ

韓國銀行ハ中央銀行トシテ國庫金ノ出納、銀行券ノ發行ヲナスノ外尙左ノ營業ヲ爲ス

- 一、爲替手形其他商業手形ノ割引
- 二、平常取引スル諸會社、銀行又ハ商人ノ爲手形代金ノ取立
- 三、爲替及荷爲替
- 四、確實ナル擔保アル貸付
- 五、諸預リ金及當座貸越勘定

六、金銀貨貴金屬及諸證券ノ保護預リ

七、地金銀ノ賣買及貨幣ノ交換

尙ホ政府ノ認可ヲ受クルトキハ公共團體ニ對シ無擔保貸付ヲ爲スコトヲ得營業ノ都合ニ依リテハ國債證券地方債券其他確實ナル有價證券ヲ買入ル、コトヲ得ルモノトス
 今ヤ韓國銀行ハ京城ニ本店ヲ有シ全國各樞要ノ地ニ於ケル支店出張所ヲ合シテ十三箇所アリ益其業務ヲ擴張シ金融機關ノ中樞トシテ全國經濟界ヲ緩和スヘキ任務ヲ遂行シツ、アリ今韓國銀行業務ノ狀況ヲ表示スレハ左ノ如シ

韓國銀行一覽表

隆熙四年(明治四十三年)六月末日現在

公稱資本金	拂込資本金	積立金	政府貸下金	預金	貸付金	銀行券發行高	支店出張所
1,000,000.00 圓	115,000,000 圓	1 圓	1,744,000.00 圓	7,311,470.00 圓	1,787,313.94 圓	1,111,550,000 圓	13 處

第七節 日本側銀行

以上述へタル各種金融機關ハ悉ク當國政府又ハ人民ノ創設ニ係ルモノナルカ之等ノモノ、外尙ホ特ニ記述セサルヘカラサルハ日本側ニ屬スル各銀行ナリトス現今當國ニ於ケル日本側銀行ハ第一銀行、十八銀行、第三百三十銀行、周防銀行及密陽銀行ニシテ獨リ密陽銀行ハ貯蓄銀行ニシテ慶尙北道密陽ニ其本店ヲ設置セルモ其他ノ銀行ハ皆普通ノ商業銀行ニシテ日本ニ本店ヲ有シ韓國ニ在ルモノハ其支店又ハ出張所ナリ元來之等ノ銀行ハ其初京城及各開港地ニ在ル在留日本人ノ金融ヲ計ル爲メ設置セラレタルモノナレ共今ヤ韓國人、清國人等ニモ廣ク取引先ヲ有シ且當國各開港地ノ啓發ハ實ニ之等日本側各銀行ニ負フ所大ナリト云フ得ヘシ尙ホ日本興業銀行ハ韓國國債ノ引受、民團ニ對スル貸付、農工債券ノ應募等ノ爲メニ京城ニ支店ヲ設ケタリシモ韓國銀行ノ設立ト共ニ業務ヲ之ニ委託シ該支店ヲ撤去スルニ至レリ

日本側銀行中特種ノ沿革ヲ有スルモノハ第一銀行ナリ同行ハ開國四百八十七年(明治十一年)五月釜山ニ初メテ支店ヲ設ケ爾後元山、仁川、京城等ニ支店又ハ出張所ヲ設ケシカ日清戰爭中ハ日韓兩政府ノ爲メニ功績少ナカラズ次テ光武九年(明治三十八年)一月ヨリ韓國政府ノ委託ニ依リテ國庫金ノ出納、貨幣、整理事務ノ取扱ヲ爲シ韓國政府ハ同行ノ發行スル銀行券ノ法貨タルコトヲ認メ同年三月日本政府ハ特ニ勅令ヲ以テ第一銀行京城支店ノ銀行券發行ノ特權ヲ認メ韓國ニ於ケル中央銀行タルノ任務ヲ遂行スヘキコトヲ命セリ翌年五月京城支店ヲ韓國總支店ト改稱スルニ至リ日韓兩國ノ爲ニ財政及金融ノ上ニ貢獻スル處尠カラサリシカ隆熙三年(明治四十二年)韓國銀行ノ創設ト共ニ中央銀行業務ヲ全ク之ニ引繼キタリ今日日本側諸銀行ノ狀態ヲ表示スレハ左ノ如シ

日本側銀行一覽 (印ハ借)

隆熙四年(明治四十三年)六月末現在

銀行名	韓國ニ於ケル支店出張所數	公稱資本	資本金又ハ韓國支店元金	預金	貸出金	所有物	借入金及爲替、貸借	遊金
第一銀行	二	10,000,000	1,600,000	4,344,973	4,811,076	11,126,31	9,847,77	6,797,76
十八銀行	八	3,000,000	1,150,000	2,272,217	2,576,496	2,419,94	2,892,03	2,444,84
第三百三十銀行	五	5,000,000	700,000	1,783,610	2,678,263	4,787,71	6,969,00	8,433,80
周防銀行	一	1,500,000	—	588,912	1,335,555	3,069,91	1,262,22	2,088,00
密陽銀行	—	50,000	50,000	3,335	49,325	2,468,11	1,980,61	971

第二編 第四章 金融機關

東洋拓殖會社	計	一六、一九、〇〇〇、〇〇〇	四、〇〇〇、〇〇〇	八、二六、二八六	一〇、五七、三九九	八、六三、三五六	四、三〇、〇〇〇	一、四四、〇〇〇	六、三三、九九九
--------	---	---------------	-----------	----------	-----------	----------	----------	----------	----------

一七八

第五章 外國貿易

第一節 總說

當國ノ外國貿易ハ之ヲ既往ニ遡ルニ其發展年々顯著ナルモノアリ特ニ日清ノ戰役ニ次キ近ク日露戰爭ハ之ヲ經濟ノ方面ヨリ觀察スレハ結局多大ナル軍資ノ散布勞力ノ需要鐵道ノ敷設等ニ依リ一般ノ購買力ヲ增大ナラシメタルト同時ニ外國貨物就中日本貨物ヲ深ク内地ニ紹介スルノ動機トナリ進テ光武九年(明治三十八年)日韓協約締結後ニ在テハ諸般産業ノ企劃經營セララル、モノ接踵相起リ外國貿易ハ頗ル其面目ヲ一新シタリ今既往十年ノ貿易價額ヲ舉クレハ左ノ如シ

年次	輸出	輸入	計	輸入超過
光武四年 (明治三十四年)	九、五八、七六八	一、〇六、九三六	一〇、六五、七〇四	一、五〇、七六八
同 (同三十五年)	八、五四、二七三	一、四七、七三四	一〇、〇二、〇〇七	六、三三、七三四
同 (同三十六年)	八、四八、五〇三	一、三六、五八四	九、八五、〇八七	五、三三、五〇三
同 (同三十七年)	九、六九、三三二	一、八四、〇七二	一一、五三、四〇四	八、七四、二八〇

一七九

年	輸出	輸入	差
光武八年(明治三十七年)	七五三〇七五	二七四〇二五九	四七八〇五〇六
同(明治三十八年)	七九一六五七	三三九七一八五	四〇八八四三三
同(明治三十九年)	八九〇二三八七	三〇二九二四五	五八七三六三三
同(明治四十年)	一六九七三五四	四一三八七五四〇	五八三六二二四
隆熙元年(明治四十一年)	一四一三三三〇	四一〇一五五三	五五二三八八三
同(明治四十二年)	一六二四八八八	三六六八七七〇	五二八七六五八
光武八年(明治三十七年)	一九八七一八七六	二五〇五五二八二	二四八七二六五八
同(明治三十八年)	二二〇三九〇五八	二四四一三六六六	二二〇三九〇五八
同(明治三十九年)	二六九二二二三	二〇三九九八八二	二六九二二二三
同(明治四十年)	二六九二二二三	二〇三九九八八二	二六九二二二三
同(明治四十一年)	二六九二二二三	二〇三九九八八二	二六九二二二三
同(明治四十二年)	二六九二二二三	二〇三九九八八二	二六九二二二三

輸出貿易ハ光武七年(明治三十六年)即チ戰役前ニ在テハ主トシテ米、大豆、人蔘等農産物ノ豊凶如何ニ依リテ増減シ光武八、九年(明治三十七、八年)ハ戰役ノ爲稍々減退ヲ示シタルモ同十年(明治三十九年)ハ著シク恢復ノ緒ニ就キ而シテ隆熙元年(明治四十年)以後ハ連年農産ノ豊作ナリシト海外販路ノ擴張、農、鑛、水産等ノ發達ニ伴フ輸出貨物ノ増加、京義鐵道ノ輸送開始、港灣ノ改良、沿岸航路ノ發達、道路ノ改築等ニ依リ輸出額ニ激増シ之ヲ光武十年(明治三十九年)以前ニ比スレハ隆熙元年(明治四十年)以後ハ各年殆ト二倍以上ニ達スルノ好況ヲ呈セリ

輸入貿易ハ光武六年(明治三十五年)以前ノ三箇年ハ鑛山用品、京仁間鐵道用品及日本人其他居留外國人ノ需用品ヲ含ムモ其大部分ハ韓人向綿布等ノ

布帛竝ニ飲食料品等ニシテ千百萬餘圓ヨリ千四百餘萬圓ノ間ニアリシカ光武七年(明治三十六年)ハ巨額ノ京釜鐵道材料ノ輸入セラレタルト米ノ主産地タル南韓地方凶作ノ爲米雜穀ヲ併セテ百五拾餘萬圓ノ輸入アリタル等ニ依リ前三箇年ニ比スレハ數百萬圓ヲ増加シテ千八百萬圓臺ニ上リ次テ光武八年(明治三十七年)以降ハ日露戰役ニ繼キ韓國ノ施政改善竝ニ産業ノ状態革マリ輸入貿易ノ増進著シク今之カ原因ヲ區別説明スレハ仍テ(一)鐵道敷設、電信電話ノ架設、水道、港灣竝ニ海陸聯絡ノ設備等ニ伴フ材料及消耗品ノ輸入増加シタルコト(二)日韓官衙ノ新設、日本軍隊ノ駐屯ニ伴フ建築材料及需要品ノ増加シタルコト(三)在住日本人ノ激増ニ伴フ食料品、衣類其他輸入ノ増加シタルコト(四)海陸交通機關ノ發達ニ依リ地方韓人ヲシテ外國品ノ購買ヲ容易ナラシメ一面勞銀ノ增收等ニ依リ著シク需要ヲ増進シタルコト(五)日韓間鐵道聯絡輸送開始其他關稅制度ノ改善竝ニ清津港ヲ開放シタルコト等輸入貿易ヲ促進セシムヘキ幾多重要ノ原因相繼キシ爲連年非常ノ増加ヲ來シ戰役以前ノ輸入年額壹千萬圓臺ノモノ一躍シテ參千萬圓以上四千萬圓ニ達スルノ好況ヲ呈セリ

第二節 金銀及正貨ノ輸出入

輸出ハ專ラ當國ニ採掘セラル、金塊又ハ砂金ニシテ年額約四百萬圓乃至六百萬圓ヲ示シ輸入ハ金銀貨幣並ニ銀塊馬蹄銀並ニ日本舊圓銀ヲ含ムヲ主トシ其價額ハ銅貨ヲ併スルモ尙ホ貳參百萬圓ヲ出テス即チ年々流出超過ノ趨勢ナリトス左ニ既往十箇年ノ輸出入額ヲ掲ケテ參考ニ資ス

年次	輸出			輸入		
	金貨及銀貨	地貨	計	金貨及銀貨	地貨	計
光武四年(明治三十四年)	三六三、〇五〇	四七九、六七五	一、八七六、一〇〇	二二八、八三〇	二四八、八八六	一、七九六、三三三
同五年	四九三、三五一	二〇七、七五一	一、五四四、六二〇	二五九、〇	九〇四、七三三	一、五〇〇、〇〇〇
同六年	五〇六、四一〇	五〇七、〇三三	二、八八〇、七	九六五、五〇〇	一、九三三、三五五	二、九一九、〇五〇
同七年	五四六、三九七	一五六、二一八	二、五二五、九	二八〇、七三五	四一三、九九五	二、一三三、七三三
同八年	五〇〇、九九六	六六八、二九	三、六〇三、三	四一三、九九九	一一三、三七三	五、二六七、二四
同九年	五二〇、六八五	三〇九、一六二	二、一六二、五	九〇八、八四八	二〇六、〇三六	三、九七二、九一二
同十年	四六六、三三〇	一三九、一四三	二、〇〇七、九	一、三九二、四二	三四〇、五八〇	一、六七〇、三三三
同十一年	四六七、九一〇	九九、二九三	二、二六六、八七八	一九八、二六三	七〇八、六二〇	二、七〇〇、七九六
同十二年	四七二、三三六	二四五、四四〇	九〇九、五	二二九、二七七	二七六、〇九	三、五三三、九七三
隆熙三年(明治四十二年)	六二二、三六六	八四六、六五三	二、一五四、〇	七〇七、四九九	五〇〇、〇〇〇	四、二二二、二五
同十三年	六二二、三六六	八四六、六五三	二、一五四、〇	七〇七、四九九	五〇〇、〇〇〇	四、二二二、二五
同十四年	六二二、三六六	八四六、六五三	二、一五四、〇	七〇七、四九九	五〇〇、〇〇〇	四、二二二、二五

第三節 貿易額ノ開港別

常國各開港ノ貿易上ニ於ケル地位ヲ觀察スルニ輸出貿易ニ在テハ首位ヲ占ムルモノハ釜山港ニシテ總額ノ三割二分ニ當リ仁川、鎮南浦、群山等之ニ次キ輸入ニ在テハ仁川港首位ニシテ常ニ總額ノ三割乃至四割ニ當リ釜山ハ二割二分内外ニシテ京城、鎮南浦、元山等之ニ次ク今其比較ヲ明カニスル爲左ニ最近兩年ノ比數千分ノ按分比ヲ掲ク

港名	隆熙三年(明治四十二年)		隆熙二年(明治四十一年)	
	輸出	輸入	輸出	輸入
仁川	二〇四	三六四	一八一	四三五
釜山	三二七	二二六	三二七	二二五
鎮南浦	六五	七三	七二	七〇
京城	二一八	八八	一四〇	七五
群山	二五	一三四	二	九六
木浦	七四	二〇	六一	二六
計	三六四	三三五	一八一	四三五

合	新	城	清	馬
計	州	津	津	浦
1,000	五七	二六	一	九
1,000	三	九	二六	〇
1,000	三	二	二〇	九
1,000	五七	三	一	八
1,000	二九	九	〇	九
1,000	四	一六	五	一三

第四節 貿易額ノ通商國別

當國トノ通商各國ニ於テ最モ關係ノ密接ナルモノハ日本ニシテ常ニ總額ノ六割五分内外ヲ占メ支那英吉利之ニ次キ各一割三四分ニ當リ其他北米合衆國露領亞細亞等ハ併セテ二割内外ニ相當ス今最近隆熙二、三兩年(明治四十一、二年)ニ就キ其割合ヲ比數(千分ノ按分比)表示スレハ左ノ如シ

國名	隆熙三年(明治四十二年)		隆熙二年(明治四十一年)	
	輸出	輸入	輸出	輸入
日本	七四四	五九八	六四一	七七七
支那	一九七	二二三	一四五	二一九
英吉利	三	一七	一三	一六五
北米合衆國	四	五	四	一〇
露領亞細亞	四八	一	五	一

國名	隆熙三年(明治四十二年)		隆熙二年(明治四十一年)	
	輸出	輸入	輸出	輸入
獨逸	二	一四	〇	七
蘭領印度	—	四	—	三
白耳義	—	二	—	二
香港	—	二	—	二
佛蘭西	—	二	—	三
土耳其	—	二	—	二
英領印度	—	二	—	二
英領海峽殖民地	—	二	—	二
露西亞	—	—	—	—
比律賓諸島	—	—	—	—
其他諸國	—	—	—	—
合計	1,000	1,000	1,000	1,000

更ニ主要通商國ニ就キ輸出入品ノ内容ヲ記述スレハ左ノ如シ

- 日本へ輸出重要品 米 大麥 小麥 大豆 小豆 荳胡麻子 魚類 牛
- 脂 棉花 鐵礦 黑鉛 石炭(無煙炭) 銅 牛皮 生牛 海羅 肥料用 乾魚等

日本ヨリ輸入重要品、食鹽 果實 醬油 砂糖及精糖 清酒 麥酒 打

綿 綿織絲 シーティング 天竺布 木綿 肌衣 洋紙 半紙及美濃紙

書籍雜誌 煙草 石炭 陶器及磁器 鐵道枕木 木材及板 藁吹

メント マツナ 洋傘等

支那へ輸出重要品、米 大豆 魚類 海參 人蔘 石炭(無煙炭) 牛皮

木材類 薪材 紙 生牛等

支那ヨリ輸入重要品、食鹽 支那酒 線綿 麻布 絹布 紙卷煙草 石

炭 木材類等

北米合衆國へ輸出重要品、金鑛其他

北米合衆國ヨリ輸入重要品、小麥粉 煉乳 鹹魚 石油 蠟燭 シーナ

ング 熟鐵 軌條 鐵道機關車、客車及貨車 紙卷煙草 其他

露領亞細亞へ輸出重要品、米 生牛 其他

露領亞細亞ヨリ輸入重要品、鹹魚 石油等

英吉利ヨリ輸入重要品、シーティング 生金巾 晒金巾 雲齋布 綿繻子

綿イタリアンス 寒冷紗 畝織綿布 羅紗及セルヂス 鐵條及竿 鐵

板 鐵管 鐵道機關車、客車及貨車 紙卷煙草其他

佛蘭西ヨリ輸入重要品、バター 葡萄酒 化粧用品等

獨逸ヨリ輸入重要品、砂糖及精糖 アニリン染料 熟鐵 鋼條竿及板

鐵道機關車其他

蘭領印度ヨリ輸入重要品、砂糖及精糖 石油其他

白耳義ヨリ輸入重要品、蠟燭 臙玻璃片其他

香港ヨリ輸入重要品、砂糖及精糖 セメント其他

英領印度ヨリ輸入重要品、蠟燭 錫 其他

露西亞ヨリ輸入重要品、更紗 毛綿交織布等

而シテ以上ノ内歐米諸國ヨリ輸入スルモノハ未タ是等ノ諸國ト當國間ニ
直航ノ船便ナキヲ以テ石油等ヲ除ケハ他ハ概ネ一旦上海、長崎、橫濱、神戸、門
司等ニテ仲繼セラレ若ハ日本ニテ納稅輸入後當國ニ再輸セラル、モノニ
係ル

第三編

第一章 財產整理

前述ノ如ク當國財政ノ紊亂ハ宮中府中ノ混同ニ淵源シタルモノ多ク就中宮中財政ノ紊亂ハ實ニ其素因ヲ爲シタルモノト云フヘキナリ今本章ニ於テ敘述スル所ノモノハ宮中財政整理ノ一部ニ屬スル帝室有不動產ノ整理及帝室債務整理ノ梗概ヲリトス

第一節 帝室有不動產ノ整理

開國五百四年(明治二十八年)宮内府官制發布セララル、ヤ新ニ内藏司ナルモノヲ置キ帝室世傳莊園其他ノ財產ヲ管掌セシムルコト、ナリタリ内藏司ハ後内藏院又經理院ト改稱シ其管掌事項漸次擴張セラレ參政、管稅、文應、種牧、鑛業等ノ各般ニ涉ルコト、ナリタリ經理院管掌事項ノ擴張ハ帝室收入ノ増加ヲ意味シ帝室收入ノ増加ハ即チ國庫收入ノ減少ヲ意味ス加之一面ニ於テハ宮中ニ幾多無用ノ機關ヲ設置シテ徒ニ冗費ヲ増加シ又祀祭費、交際費等ヲ濫費シテ經費ヲ膨脹セシメタル爲倍々收入増加ノ必要ヲ生シ或

ハ薄弱ナル根據ニ依リ世襲ノ民田ヲ掠奪シ或ハ改量ト稱シテ莊園中ニ附近ノ民田ヲ混入スル等苛察暴虐唯收入ノ増加ニノミ是レ努メタルモノ、如シ然レトモ其局ニ當ル官吏ノ忠實ヲ缺キタルト經營方法其宜シキヲ得サル爲メ煩ヲ國庫ニ及ホシタル外帝室ニ於テモ亦爲ニ著シキ收入ノ増加ヲ得ルニ至ラザリシカ如シ故ニ光武九年(明治三十八年)十二月宮内府ニ帝室ニ關スル一切ノ財用及經濟事業ヲ審議講究スル爲メ帝室財政會議ノ制度ヲ立テ光武十年(明治三十九年)二月ニハ制度局職務章程ヲ制定シテ帝室財政會議ニ提出スヘキ議案編製ノ事務ヲ掌ル機關ヲ設ケ又光武十一年(明治四十年)六月ニハ宮内府令第三號ヲ以テ帝室財産ヲ整理スル爲制度局ニ臨時整理部ヲ設置シ以テ之等無謀ノ經營ヲ矯正セントセリ

又帝室ノ内需及祭亨ノ資ニ充ツル爲帝室特別ノ機關トシテ内需司、明禮宮、壽進宮、龍洞宮、於義宮、景祐宮、毓祥宮、宣禧宮ノ所謂一司七宮ナルモノアリ、内需司ハ開國ノ當初ヨリ其他ハ開國以後漸次増置セラレタルモノナルカ、經理院ト併立シテ各獨立ノ財産ヲ管理シ帝室所要ノ物品供進及祭亨ヲ司リタルモノナリ、一司七宮ノ管理シタル財産ハ田畚ヲ主トシ該田畚ハ宮庄土

ト唱へ開國五百三年(明治二十七年)以前ニアリテハ國稅ヲ免除セラレ、特典ヲ有シタリ宮庄土ノ秋收ニ關シテハ各宮ヨリ直轄シタルモノト導掌ト稱スル特種ノ機關ヲ設ケ間接ニ之ヲ徵收シタルモノトアリ又宮庄土中ニハ投託ト稱シ一個人カ其所有ニ係ル田畑ヲ勢家ノ掠奪ヲ免カレ或ハ免稅ノ目的ヲ以テ宮ニ請託シ宮庄土ノ如ク糝ヒタルモノアリ斯ノ如ク宮庄土ナルモノハ其關係甚タ錯雜ヲ極ムルノミナラス經理院ト同シク民田ノ掠奪混入其他種々ナル弊害ヲ生スルニ至リタレハ遂ニ光武十一年(明治四十年)二月宮内府内ニ各宮事務整理所ヲ置キ一司七宮庄土ノ處理及宮穀上納等ノ事務ヲ管理セシメ宮庄土ノ徵稅上ノ特種機關タル導掌ハ追テ其處分方法ヲ定ムルコト、ナシ先ツ光武十一年(明治四十年)六月ヲ以テ之ヲ廢止セリ

此ノ如ク宮中財産ニ關スル制度錯雜ヲ極メ帝室有財産ト國有財産トハ其所屬判明ナラサルヲ以テ之ヲ分離整理スルノ必要ニ迫ラレ光武十一年(明治四十年)七月臨時帝室有及國有財産調查局官制發布セラレ該局ハ委員ヲ以テ組織セラレ内閣總理大臣ノ監督ニ屬シ帝室有財産及國有財産ヲ調査

シテ其所屬ヲ判定シ其他之等財産ノ整理ニ關スル凡テノ事務ヲ掌ルヘキ組織及權限ヲ有セリ而シテ其委員ハ各部及宮内府ヨリ任命セラレタリ此機關設置ノ結果宮内府ニ於テ財政ニ關與スヘキ多クノ機關ヲ存置スルノ不必要ヲ認メ先ツ經理院各宮事務整理所及帝室制度局ハ隆熙元年(明治四十年)十一月限り之ヲ廢止シ同時ニ宮内府ニ帝室財産整理局ヲ設置シ以テ帝室有財産ノ整理ヲナスノ任務ヲ與ヘラレタリ

臨時帝室有及國有財産調査局ニ於テハ隆熙元年(明治四十年)八月以降十數回ノ委員會ヲ開キ大要左ノ事項ヲ議決セリ

- 一、宮内府所管ノ土地中明カニ民有ト認ムヘキモノ四十餘件ニ對シ還給處分ヲナスコト
- 二、宮庄土ノ導掌ハ其性質ヲ判定シ投託導掌ニハ該投託地ヲ還給シ其他ノ導掌ニハ其純收入高ノ三箇年分ヲ交付スルコト
- 三、宮内府所管及慶善宮所屬ノ一切不動産ハ宮殿太廟ノ基址及本朝陵園墓ヲ除ク外之ヲ國有ニ移屬スルコト
- 四、漁磯、淤稅其他宮内府ノ諸稅ノ徵收權ハ一切國庫ニ歸屬スルコト

而シテ前記第三及第四ノ事項ハ隆熙二年(明治四十一年)六月勅令第三十九號ヲ以テ公布セラレ此勅令ニ依リテ帝室債務ノ整理ニ關スル事務ハ宮内府ヨリ分離シ之ヲ舉ゲテ度支部大臣ニ委任セラレシカ此主旨ニ基ツキ同年七月勅令第五十五號ヲ以テ臨時財産整理局官制ハ發布セラレ度支部大臣ノ管理ノ下ニ(一)國有ニ移屬セラレタル財産ノ調査及整理(二)之カ爲ニ生スル不動産上ノ權利ニ關スル異議申立ノ審理(三)帝室債務整理及之ニ加ヘテ土地測量ニ關スル事務ヲ處理スルコト、ナリ之ニ依リテ臨時帝室有及國有財産調査局ハ同年六月、帝室財産整理局ハ同年八月孰レモ廢止セラレタリ

斯クノ如クシテ度支部内ニ設置セラレタル臨時財産整理局ニ於テハ直ニ宮内府ヨリ事務ノ引繼ヲ受ケ大要左ノ方針ニ基キ之カ調査ニ著手セリ

- 一、宮内府所管及慶善宮所屬ノ不動産ハ文簿闕如シ所在明確ナラサルモノアルヲ以テ制度變革ノ際ニ乘シ是等ノ不動産ヲ冒認シ又ハ其他ノ不正行爲ヲ豫防スル爲漢城府及各道觀察使ニ對シ其取締方ヲ通牒シ又帝室財産ハ元來原簿ノ設ケナキヲ以テ秋租成冊ニ記載シアル以外

ノ土地家屋等ニ對シテハ局員ヲ派遣シ實地調査ヲ行ヒ悉ク先ツ度支部所管ノ標札ヲ立テ以テ整理上遺漏ナカラシムルコトヲ勗ムルコト

二、田畑、蘆田及草坪ノ類ハ之ヲ地方財務機關ニ、家舍、宅地ノ類ハ之ヲ度支部ニ引繼クコト但田畑ノ大部分ハ宮庄土ニシテ其内既ニ隆熙元年(明治四十年)ヨリ其收租方ヲ度支部ニ委託シタルモノアルヲ以テ宮内府ヨリ引繼ヲ受ケタル收租成冊ヲ整理シテ之ヲ引繼キ以テ秋收上脱漏ナカラシムルコトヲ期スルコト

三、山林原野ハ農商工部ニ引繼クコト但山林原野ニ對シテハ其所在面積ヲモ知ルコト能ハサル現況ナルヲ以テ各財務監督局ニ委囑シテ其概況ヲ調査シ一面農商工部ニ對シテハ引繼以前ニ於テ山林原野ノ利用ヲ必要トスル場合ハ臨時財産整理局ニ打合ヲナスコトヲ協議シ漸次之カ引繼ヲ爲スコト

四、陵園墓ノ位土ニ關スル成冊等ハ宮内府ニ存置セサルヲ以テ地方財務機關ヲシテ陵園墓事務所ニ就キ直接受授ヲサシムルコト

五、漁磯稅ハ漁磯其ノモノカ帝室有タルニアラスシテ帝室ハ單ニ一種ノ

免許稅ヲ徵收シタルニ過キス其課稅ノ根據モ甚タ明確ナラサルヲ以テ直ニ地方財務機關ニ引繼クコト

六、泱稅ハ堤堰築造ノ費用ヲ帝室ヨリ支出シ用水ノ供給ヲ受クル者ヨリ之ヲ徵收スルモノナリ是亦地方財務機關ニ引繼クコト

七、帝室財産整理局ニ於テハ帝室所屬不動産調査ノ一便法トシテ廣ク賃貸ノ請願ヲ許シ既ニ賃貸契約ヲ結ヒタルモノ及請願ヲ受理シ未タ其手續ヲ履行セサルモノアリ之等ハ新規請願ノ受理ヲ中止シテ之ヲ整理スルコト

八、不動産上ノ權利ニ關スル請願ハ或ハ地方財務機關ニ照會シ或ハ直接局員ヲ實地ニ派遣スル等最モ鄭重ナル調査ヲ爲シ還給スヘキモノト否ラサルモノトヲ判定シテ之ヲ處分スルコト

九、不動産上ノ權利ニ關スル請願ノ一部ニ屬スル導掌ノ處分ニ關シテハ證據書類及實地ヲ調査シ臨時帝室有及國有財産調査局ノ決議ヲ以テ閣議ヲ經タル決定ニ基キ之ヲ處分スルコト

大體前記ノ方針ニ依リ爾來著々整理ノ進捗ヲ圖リ既ニ田畑、蘆田等約二萬

五千八百町歩、山林原野約一萬九千四百町歩、家舍約百九十戸、宅地約五十町歩ノ引繼ヲ了シ又投託地及混奪入地ニシテ還給スヘキモノ約六百十町歩ヲ處分シ尙ホ投託導掌以外ノ導掌ニシテ賜金ヲ交付スヘキモノニ關シテハ數回ノ審理及實地檢査ノ後件數百二十三、此金額拾壹萬六千八百九圓ト決シ之ニ就テハ特別ニ導掌資金公債ヲ發行シテ之ヲ下給シ悉ク之カ處分ヲ了セシニ依リ因襲ノ久シキ錯綜シタル帝室財産ノ整理モ今ヤ全ク其終了ヲ告クルニ至レリ

第二節 帝室債務整理

光武十一年(明治四十年)内需司、明禮宮、壽進宮於義宮、龍洞宮、毓祥宮及景祐宮ノ廢止セララルルヤ之等各宮ノ債務ハ宮内府各宮事務整理所ニ於テ整理スルコト、ナリシカ一方從來帝室ヨリ發行セラレタル啓單又準單ニ對シテ支拂ヲ要求スル者及宮殿ノ建築費、納付物品ノ代金等ノ支拂ヲ求ムル者續出シタルヲ以テ隆熙元年(明治四十年)十一月宮内府ニ設ケラレタル帝室財産整理局ニ於テ之等一切ノ債務ヲモ整理スルコト、ナリタリ然ルニ帝室ノ負擔ニ屬スヘキ債務ニハ債務ノ原因、金額及債務者ノ不明ナルモノアリ

テ債務ノ總額ヲ知ルヲ得サルト又之等債務ノ中ニハ債務ノ原因タル事實ノ發生、拾數年以前ニ屬シ現在ニ於テハ到底正確ナル證據ヲ蒐集スル能ハサルモノ多キコト判然セシ爲爰ニ特別法制定ノ必要ヲ生シ隆熙二年(明治四十一年)四月三十日法律第九號ヲ以テ帝室債務ニ關スル件ヲ公布シ本債務ニ關シテハ會計法ノ期滿免除ノ規定ヲ准用シ其出給スヘキ年度經過後滿三箇年內ニ債主ヨリ支出或ハ出給ヲ請求セサレハ政府ハ其義務ヲ免ルルコト、ナシ尙ホ該法施行前ニ生セシ本債務ニ關シテハ同年九月三十日內ニ請求スヘク其請求スヘキ期限ノ到來セサルモノハ其事由ヲ申告スルニアラサレハ其債權ハ效力ヲ失フコト、ナセリ是レ蓋シ受領書又ハ支拂書等ニ關スル證書ノ完備セサリシ時代ニ於ケル舊債務ニ關シ打切計算ヲナス上ニ於テ定ニ止ムヲ得サル處ナリトス

斯クノ如クシテ宮内府ニ於テハ銳意債務ノ整理ニ著手シタリシモ其未タ整理ノ緒ニ著カサル前即チ隆熙二年(明治四十一年)六月宮内府所管及慶善宮所屬ノ不動産ヲ國有ニ移屬スルコト、ナリタル結果帝室債務ノ整理モ併セテ之ヲ度支部ニ移スコト、ナリタリ

度支部ニ於テハ國有ニ移屬シタル宮内府所管及慶善宮所屬不動産竝帝室債務ヲ整理スル爲臨時財産整理局内ニ特ニ隆熙二年(明治四十一年)九月勅令第六十八號ヲ以テ帝室債務審査會ヲ設ケ其委員ハ宮内府、法部、度支部、臨時財産整理局勅奏任官及判事檢事ヲ合セテ七名トシ臨時財産整理局長官ヲ委員長トシ幹事及書記ヲ置キ會務ヲ處理セシメ帝室債務ノ審査決定ニ對シテハ必ス審査會ノ決議ヲ經ヘキコト、セリ

元來帝室債務ノ内容ハ物品費、工事費、下賜金、貸上金及立替金等ナルカ之ヲ大別スレハ各宮債務、準單債務、雜債務ノ三種ト爲スコトヲ得ヘシ

一 各宮債務

各宮債務トハ帝室所要ノ物品供進及祭享ヲ司リシ所ノ内需司、明禮宮、壽進宮、龍洞宮、於義宮、景祐宮、毓祥宮及順和宮ノ債務ノ總稱ナリ元來宮ハ獨立ノ財産ヲ有シ其財産ヨリ生スル收入ヲ以テ總テノ經費ヲ支辨スル制度ナルモ當局官吏ノ經營其宜シキヲ得サリシト又一面ニ於テ帝室ノ需要逐次増加セシカ爲遂ニ其收入ニ依リ供御調進ノ費用ヲ辨スルコト能ハス年々多額ノ負債ヲ生スルニ至リタルモノナリ

二 準單債務

準單債務トハ帝室ニ於テ發行セラレタル所ノ一種ノ手形債務ナリ準單發行權ヲ有セラレシ者ハ皇帝陛下ニシテ仕拂者ハ宮内府ノ財政機關タリシ經理院之ニ當レリ準單ノ形式ハ一定セサレトモ概ネ金額、發行年月日、仕拂者ヲ明記シ之ニ準字又ハ啓字ノ黑印ヲ押捺セリ稀ニハ債權者ノ氏名ヲ記入シ又ハ債務ノ原因ヲ記入セルモノアルモ之等ハ極メテ少數ナリ而シテ準單債務ノ原因ハ(一)物品ノ納付(二)金錢ノ貸上(三)下賜金ノ三種ナリトス

三 雜債務

雜債務トハ各宮債務及準單債務ヲ除キタル其他ノ債務ヲ指シタル總稱ナルカ其主タルモノハ物品納付代金ノ未拂ニ屬スルモノ、宮殿建築工事受負代金、手数料、給料ノ未拂、契約不履行ニ基ク損害賠償等ナリトス

帝室債務ノ請求件數ハ總テ六十件ニシテ金額ハ

各宮債務 金六拾萬八千七百貳拾圓貳錢參厘

準單債務 金拾四萬壹千九百六拾五圓四拾七錢

雜債務 金百六拾參萬六千六百拾圓五拾六錢九厘

合計

金貳百參拾八萬七千貳百九拾六圓六錢貳厘

ナルカ請願人ハ單ニ自己ノ有スト稱スル債權額ヲ請求スルニ止マリ其債權原因ノ發生事實及證據ヲ明示セサルノミナラス請願者本人ヲ召喚シテ推問スルモ答辨甚タ要領ヲ得サルモノ多ク加フルニ宮内府ニ在リテハ之等債務ニ關スル記録書類ノ殘存セルモノ僅少ナリシト又當國舊時ノ慣習トシテ會計ニ關スル事務ハ賤劣ナル吏輩ノ分掌セシモノナリシヲ以テ債務ニ關スル記録ハ極メテ信憑力ニ乏シキモノナリシ等ノ爲事件ノ真相ヲ探求スル上ニ於テ鮮カラサル困難ニ逢着シタルモ遂ニ其調査ヲ結了シ帝室債務審査委員會ノ審議ヲ經テ之ヲ決定シ決定書ヲ各請願人ニ交付スルニ至リタリ此決定ニ基キ仕拂ヲ爲シタル金額ハ

各宮債務

金拾八萬壹千五百六拾四圓

準單債務

金拾萬六千四百貳拾七圓四拾九錢五厘

雜債務

金九萬五千八百貳拾壹圓七拾六錢五厘

合計

金參拾八萬參千八百拾參圓貳拾六錢

ニシテ請求總額貳百參拾八萬七千貳百九拾六圓六錢貳厘ニ對シ約一割六

分ニ該當ス

是ヨリ先キ帝室債務處分ノ公明ヲ期スル爲臨時財産整理局長官ノ處分ニ對シ不服アル者ハ京城控訴院ニ出訴スルコトヲ得セシムルコト、ナシ隆熙二年(明治四十一年)三月法律第十一號ヲ以テ之ヲ公布シタリカ此法律ニ基キ京城控訴院ニ出訴シタルモノハ慶運宮重建役費請求事件外十一件金額五拾貳萬七百七拾六圓四錢八厘ナリ然ルニ其内三件ハ新證據ヲ發見セルニ依リ裁判所ノ意見ニ從ヒ和解シ金貳千七百圓ヲ仕拂ヒ其他ノ九件ハ臨時財産整理局ノ勝訴ニ歸シ茲ニ十數年來紛擾ヲ極メタル帝室債務モ全ク其整理ヲ終了スルニ至レリ

第二章 土地調査

第一節 沿革

一 土地調査ノ必要

當國ニ於テハ土地ノ面積ヲ表示スルニ通常水田ハ斗落ヲ用ヒ畑ハ日耕ヲ用ユ一斗落ハ一斗ノ種籽ヲ播下スル廣サヲ示シ一日耕ハ一日間ニ耘シ得ル廣サヲ表ス故ニ單ニ一斗落若ハ一日耕ト稱スルモ地味ノ肥瘠耕耘ノ便否如何ニ依リテ實面積ニ大小廣狹ノ差アルナリ又課税ノ單位ヲ結ト稱ス結ハ土地ノ面積ヲ基礎トシタルモノナレハ是亦一結ト稱ズルモ地位等級ノ異ナルニ從ヒ其實面積ヲ異ニスルカ故ニ當國ニ於テハ嚴格ニ土地ノ面積ヲ表示スル一定ノ稱呼ナキナリ

又當國ニ於テハ土地ノ賣買ヲ爲スニ當リ單ニ文記ト稱スル私書證書ヲ引渡シ其舊文記アルモノハ之ヲ添附スル外何等ノ手續ヲ要ヒサル慣習ナリ而シテ地方官衙ニハ從來量案ト稱スル簿冊アルモ概ネ修正ヲ爲シアラサルカ故ニ年月ノ經過スルニ從ヒ殆ト其用ヲ爲サズ境界ノ紛争、文記ノ偽造

土地冒認等ノ係争事件アルモ到底其眞僞ヲ判定スルコト能ハサル現況ナリ土地制度ノ現況前記ノ如クナルカ故ニ土地調査事業ノ當國ニ於テ極メテ緊急事タルコトハ言ヲ俟タサル所ナリ光武二年(明治三十一年)七月量地衙門ヲ創設シ同五年(明治三十四年)十月ニハ別ニ地契衙門ヲ設ケ同六年(明治三十五年)三月ニハ量地衙門ヲ地契衙門ニ併合シ同八年(明治三十七年)四月ニハ地契衙門ヲ廢シテ度支部ニ量地局ヲ置キ同九年(明治三十八年)二月ニハ量地局ヲ廢シテ度支部司稅局ニ量地課ヲ設置セリ此間何等效果ノ見ルヘキモノナカリシモ之レ皆土地調査事業ノ必要ニ驅ラレ隨時存廢セラレタルモノナリ然ルニ最後ニ度支部司稅局ニ量地課ヲ設置シタル以來ハ漸次其歩武ヲ進ムルニ至リ遂ニ土地調査事業ノ開始ヲ見ルニ至リタリ

二 測量技術者ノ養成

光武八年(明治三十七年)財政顧問就任ノ後財政ノ基礎ヲ確立スル爲メ地籍ノ整理ヲ行フハ刻下ノ急務ナルコトヲ認メ該事業ヲ完成スルハ人民ニ土地測量ノ必要ヲ知ラシメ兩班ニ其技術ヲ習得セシメ兼ネテ一般ニ技術思想ヲ注入スルニアリト爲シ光武九年(明治三十八年)六月日人技師ヲ傭聘シ

テ司稅局量地課ニ技術講習ヲ開始シ技手見習者若干名ヲ採用シ速成ノ方法ヲ以テ之ヲ養成セシニ其結果甚タ良好ナリシヲ以テ爾來引續キ之カ養成ニ努メタルト同時ニ大邱、平壤及全州ニ漸次出張所ヲ開設シ是亦技手見習者ヲ養成セシメタリ

技手見習者ハ一定ノ資格ヲ定メ該資格アル者ノ中ヨリ試験ノ上採川シ六箇月速成ノ方法ニ依リ卒業者ハ技手又ハ雇員ニ採用スルコト、ナシタリシカ養成期間極メテ短期ナルカ故ニ土地測量術中最モ初歩ノ細部測量ヲ講習シタルニ過キス斯クテハ將來起ルヘキ土地調査事業ニ汎ク應用セシムルヲ得サルヲ以テ隆熙元年(明治四十年)十二月量地課修業規程ナルモノヲ制定シ更ニ其優秀ナル者ヲ選抜シテ圖根及小三角測量術ヲ講習セシムルコト、ナシタリ而シテ光武九年(明治三十八年)以來養成シタル技術者ノ數ハ總員四百二十人ナリトス

三 測量ノ實地練習

技手見習者ノ養成漸次進捗スルニ從ヒ測量實地練習ノ必要ヲ生シ量地課及各出張所トモ其所在地附近ヲ測量スルコト、セリ即チ量地課ニ於テハ

京城龍山ノ市内ヲ隆熙二年(明治四十一年)ニ完成シ大邱出張所ニ於テハ大邱市内ヲ隆熙元年(明治四十年)ニ平壤出張所ニ於テハ平壤市内ヲ隆熙二年(明治四十一年)ニ執レモ完成シ又全州出張所ニ於テハ全州附近ヲ測量セリ而シテ此等測量ノ圖面ハ府、道廳又ハ民團役所等ニ送付シ其參考ニ供シタリ

又此間各局部ノ委囑ニ應シ測量シタルモノ甚タ多シ其重ナルモノヲ舉クレハ鎮海灣、平壤、義州、龍山等ノ軍用地、各地ノ鹽田、金海ノ蘆田、東洋拓殖株式會社引渡國有地及各部建築敷地等ナリトス又隆熙二年(明治四十一年)以來量地課及各出張所共小三角測量ヲ開始セリ之レ土地調査局ノ開始ヲ待ツテ小三角測量ニ著手スルトキハ他ノ作業執行上影響スル所尠カラサルヲ以テ豫メ之カ準備トシテ施行スルノ必要ヲ認メ技術員ノ實地練習ヲ兼テ之ヲ開始シタル所以ナリ

其他地方財務機關ニ於テ施行スル國有地ノ測量ニ從事セシムル等努メテ測量技術ノ練習ヲ積マシムル方針ヲ採リタリ

四 測量技術教科書出版

隆熙二年(明治四十一年)九月量地課ニ於テ編纂シタル土地測量術ヲ韓譯シ印刷局ヲシテ之ヲ出版セシメタリ當時民間ニ於テハ測量的技術思想非常ニ勃興シ京城ノ如キハ私立測量學校ノ日ニ月ニ増加スルヲ見ルニ至リタリ然レトモ民間ニ於テハ實用ニ適スル簡易速成ノ良教科書ナキヲ以テ本書ヲ發行シテ其需用ニ應スルハ蓋シ機宜ニ適スルノ處置タルト同時ニ倍々技術思想ヲ普及セシムル所以ナルコトヲ認メタルニ由ル而シテ本書出版後僅々三箇月ニシテ忽チ八千部ヲ賣盡シタルハ當時民間ニ於テ如何ニ測量思想ノ勃興セシカヲ推知スルニ足ルヘシ

五 測量規程制定

測量ノ方法ハ最モ慎重ノ考慮ヲ要スル問題ナルヲ以テ經費及成績ノ點ニ鑑ミ臺灣及沖繩ニ於テ施行シタル測量法中最モ良法ト認メタルモノヲ基礎トシ隆熙元年(明治四十年)十二月測量規程ヲ制定セリ但當時ニ在リテハ未タ大三角測量ヲ施行スル能ハサル事情アリタルニ依リ小三角測量ヲ基本トシテ之ヲ編成シ尺度ハ米突法ヲ採用シタルモ隆熙三年(明治四十二年)九月度量衡法ノ改正アリ又大三角測量ヲ施行スルコト、ナリタル結果而

シ當然之カ改正ヲ要スヘキモノトス

六 土地調査試行

本調査事業ニ對スル人民ノ意嚮竝地方ノ狀況ヲ考察スル目的ヲ以テ隆熙三年(明治四十二年)十一月京畿道富平郡ノ一部ニ就キ經驗的調査ヲ試行セリ但調査事務員ノ養成ニ關シテハ未タ其時機ニ達セザリシヲ以テ別ニ之爲施設スル所ナカリシモ現在技手中ヨリ二十名ヲ選擇シ特ニ調査事務ヲ講習シテ之ニ充テタリ然ルニ調査試行ノ結果ハ民情極メテ平穩ニシテ何等ノ障礙ナク本年二月外業ノ全部ヲ終了シ豫想以上ノ好成績ヲ擧ゲ得タルカ尙ホ本調査事業ニ關シ將來有益ノ經驗ヲ得タルモノ亦鮮少ナラザリ

七 舊慣調査

土地調査ノ實施ニ當リ各地ノ舊慣ヲ精査スヘキハ言ヲ俟タサル處ナリト雖豫メ全國ニ亘リ一般的舊慣ヲ調査スルハ法規ノ制定上最モ緊要ナルヲ認メ地方財務署二百二十八箇所ニ對シ調査スヘキ項目ヲ定メテ之ヲ委託シ又局員ヲ主要ノ地點ニ派遣シテ親シク之カ調査ニ從事セシメタリ而テ

其調査シタル重ナル事項左ノ如シ

- (一)行政區劃及土地ノ名稱
- (二)課稅地不課稅地ノ種類及區
- (三)境界
- (四)地位等級別面積及結數査定ノ慣例
- (五)斗落及日耕ノ面積
- (六)所有權質權抵當權永久小作權等ニ關スル慣例
- (七)賣買價格及賃貸價格
- (八)收穫高及收穫物ノ價格並ニ收支計算
- (九)土地ニ關スル文書帳簿ノ種類

第二節 事業ノ開始

一 土地調査ノ計畫及豫算

光武九年(明治三十八年)二月度支部司稅局ニ設置シタル量地課ハ爾來數回其所屬ヲ變更シ隆熙二年(明治四十一年)一月ヨリ七月迄ハ臨時財源調査局ニ屬シ同年七月ヨリ臨時財產整理局ニ屬セリ而シテ臨時財產整理局時代ニ在リテハ土地調査事業開始ノ時運ニ達シタルヲ以テ同局ニ於テ專ラ同事業開始ニ關スル準備ヲ調ヘ遂ニ本年三月勅令第二十三號ヲ以テ土地調査局官制ヲ公布シ茲ニ初メテ土地調査事業ノ開始ヲ見ルニ至レリ而シテ土地調査ニ要スル費用ハ總費額壹千四百拾貳萬九千七百七圓ヲ要スル七年八箇月ノ繼續事業ナルカ本計畫ハ調査施行段別ヲ二百七十五萬五千町

歩ト見積リ調査員及測量員ハ指導監督ノ任ニ當ル者ヲ除ク外韓人ヲ採用スル計畫ニシテ日本本土臺灣及沖繩ニ於ケル土地調査ノ實績ヲ參酌シ當國ノ現狀ニ照シ之ヲ編成シタルモノナリ其費目別金額左ノ如シ

俸	給	金四百六拾貳萬七千四百九拾貳圓
廳	費	金壹百七拾萬參千百貳拾六圓
旅	費	金四百拾四萬九千五百五拾圓
雜給	及雜費	金參百貳萬四千七百七拾六圓
講	習費	金拾壹萬七千七百拾八圓
舍	宅料	金參拾四萬貳千貳百四拾圓
廳舍	新築及修繕費	金拾六萬四千八百五圓
合	計	金壹千四百拾貳萬九千七百七圓

而シテ初年度所要額即チ本年度豫算額ハ金五拾九萬九千貳百五拾四圓ナリトス

二 土地調査ノ方法

土地調査ノ業務ハ調査事務及測量ニ大別シ測量ヲ大三角測量小三角測量

圖根測量、細部測量ノ四種トナス

調査事務ハ先ツ面洞界ヲ調査シ地主ヲシテ土地ノ所在及種目等ヲ申告セシメ次テ地押ヲナシ見取圖ヲ作り所有主及地位等級其他ノ調査ヲ爲スモノトス

大三角測量ハ全國ヲ通シテ施行シ小三角ノ基準點ヲ設定シ

小三角測量ハ大三角測量點間ヲ小部分ニ區分シテ圖根測量ノ基準點ヲ設定シ

圖根測量ハ小三角測量點間ヲ更ニ小部分ニ區分シテ細部測量ノ基準點ヲ設定ス

細部測量ハ圖根測量點ヲ基準トシ見取圖ト實地トニ依リ一筆地ノ形狀ヲ測量シ圖面ヲ調製スルモノトス

三 土地調査ノ現況

土地調査法其他本事業ニ必要ナル諸法規ハ臨時財産整理局時代ニ於テ略其準備ヲ了シアリタルカ尙ホ土地調査局ニ於テ更ニ審議討究スルコト、ナシ今尙ホ審議中ニ屬ス

土地調査局ノ職員ハ臨時財産整理局職員ノ全部ヲ任命シ其新タニ採用スヘキモノモ亦略收容シ得タルヲ以テ本年五月下旬ヨリ大三角測量ヲ同六月ヨリ小三角測量及圖根測量ヲ開始シ又續テ調査事務及細部測量ヲ開始セリ大三角測量ハ基線測量ノ一種ニ屬スル對馬、釜山間ノ連絡作業ヨリ著手シ小三角測量ハ京畿道江華郡ヨリ始メ臨時財産整理局時代ノ計畫ヲ踏襲シ又細部測量及調査事務ハ既ニ小三角測量ヲ終リタル京畿道富平郡ヨリ著手シタルモノナルカ今ヤ漸次其ノ數ヲ増加シ著々事業ノ進捗ヲ圖リツ、アリ而シテ本事業ノ進捗ニ重大ノ關係ヲ有スル韓人事務員及技術員ノ養成ニ關シテハ豫メ充分ノ計畫ヲ確立シ置クノ必要アルカ故ニ學部ト商議協定シ漢城高等學校、漢城外國語學校及大邱、平壤、全州、咸興ノ各道立實業學校ニ別科ヲ特設シ之カ養成ヲ爲スコトトシ各學校トモ既ニ生徒ヲ募集シテ授業ヲ開始スルニ至レリ

第三章 財源調査

當國ニ於ケル財政整理ハ著々實行セラレツ、アリト雖其將來ニ於ケル財政計畫ハ未タ完全ナリト云フヲ得ス今後國勢ノ發展ニ伴ヒ諸般ノ施設ヲ必要トスルニ於テ到底現在ノ歲計ヲ以テシテハ之ヲ支辨シ得サルハ明カナルヲ以テ各種ノ財源ヲ調査シ其基礎ノ鞏固ヲ企畫スルハ財政計畫上尤モ必要ナリ之ヲ以テ財政顧問時代ニ於テ既ニ財源ノ調査及之カ涵養ニ著手シ施設實行シタル事項少シトセス而シテ此事業ハ隆熙二年(明治四十一年)官制改正ト共ニ度支部ノ一局ニ於テ之ヲ司掌スルコト、ナリ益步ヲ進メテ畫策施行シタルコト多シ以下其梗概ヲ説述セントス

第一節 鹽業

一 調査

當國全沿岸至ル所鹽ヲ生産セラレ、モ其最モ盛ナルヲ全羅南道ノ沿岸及其附近ニ散在セル島嶼ナリトス然レトモ舊來實地ニ就キ調査シタルモノナク鹽業ニ關スル盛衰ノ狀況ヲ觀ルヘキノ資料ナキニ依リ隆熙元年(明治

四十年)ヨリ鹽業調査ニ著手シタルモ諸般ノ故障ニ依リ未タ全國ノ調査ヲ完了スルニ至ラスト雖既ニ調了シタルモノ、成績ヲ舉クレハ左ノ如シ

鹽業調査成績表

道名	業者數	小作人數	從業者數	鹽田反別	製鹽豫想高	鹽井數	釜屋數	備考
京 畿	一六四八	六五八	五二四八	四七三、四一七	五〇〇九、七三四	三、一〇一	七八二	一部調査未了
忠 清 南 道	一五六	三三七	一〇二六	一九七、三二四	八五九、〇三六	二八二	一五六	同上
全 羅 北 道	七六	一八	二九四	二九〇、六二七	二九五、七三九	二、三六七	七六	同上
全 羅 南 道	二八六	二五〇	一、三六五	七五七、九〇九	一〇、七三三、一七〇	三、二四七	九五四	同上
慶 尙 北 道	三三三	六七	六八一	七九、一一一	七〇四、六六九	一、八五〇	九〇	調査結了
慶 尙 南 道	九四五	二〇七	一、〇一七	四一五、一五三	二六、二四八、一一	八、六四七	四五五	同上
江 原 道	三六七	一四七	一、三五九	五四、二六四	七七八、五三七	二、三三七	二七八	同上
黃 海 道	—	—	—	—	—	—	—	調査未著手
平 安 南 道	二五八	—	—	四七、二〇〇	一〇、三六五、二九九	二、二九二	二五八	調査結了
平 安 北 道	六七	二八八	三三八	五〇、二〇〇	九、四七五、三	二、九六	六七	同上
咸 鏡 北 道	三三九	—	—	五三、九〇〇	一四〇、九二八	九六	二四六	同上
咸 鏡 南 道	三三三	三三七	一、七〇一	五六八、三三三	二、一三九、〇一一	六、〇三三	三五五	同上

隆熙三年(明治四十二年)ニ於ケル輸入額ノ前年ニ比シ減少シタルハ前年ヨリノ持越鹽アリタルコト、韓國鹽ノ豐作ナリシコト、隨テ鹽價ノ下落セシコト、北韓ニ於ケル鹽藏漁獲物ノ往復等減少ノ爲輸入ヲ減シタルニ依ルモノト認ム韓國各市場ニ於ケル鹽ノ價格ハ其季節又ハ其地方若ハ又鹽ノ種類ニ依リ差違甚シキモ大要各地ヲ總括平均シタルモノヲ舉クレハ左ノ如シ

韓國ニ於ケル各鹽ノ市場價格

區別	卸賣 百斤 價			小賣 百斤 價		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
韓國鹽	二〇五五	一八三四	一八三三	四七〇〇	一四四〇	二五三三
清國鹽	一一五五	〇八一五	一〇〇〇	一八〇〇	一二六〇	一三九九
臺灣鹽	一一〇〇	〇九三三	一〇一七	—	—	—
日本鹽	一一九〇	一一八〇	一一三五	四七〇〇	一五〇〇	二九五五
官營天日製鹽	—	—	—	—	—	—
一等鹽	〇六五〇	〇六〇〇	—	—	—	—
二等鹽	〇五五〇	〇五〇〇	—	—	—	—
同	—	—	—	—	—	—
上等鹽	—	—	—	—	—	—
渡上	—	—	—	—	—	—

二 試驗

當國鹽業ノ現状ニ鑑ミ其製鹽ヲシテ輸入清國鹽ニ對抗セシメンニハ生産

費ノ減少ヲ講究シ以テ市價ノ低廉ヲ圖ルニアリ且又韓國ノ地形地質氣候等ノ關係ヲ觀ルニ清國臺灣等ニ於ケル天日製鹽田所在地方ニ酷似セルモノアリ若シ韓國ニ天日製鹽ノ成立スルアラハ在來ノ方法ニ依ラスシテ優ニ外鹽ニ對抗シ得ヘク國利民福ノ至大ナルモノアルヘキヲ以テ光武十年(明治三十九年)天日製鹽及煎熬製鹽ノ試驗鹽田ヲ左ノ如ク設置シ隆熙元年(明治四十年)竣成セリ

天日製鹽田 仁川府朱安 面積壹町步

日本入濱風 煎熬製鹽田 東萊府龍湖 面積貳町三反七畝拾三步

右ノ試驗ハ孰レモ好成績ヲ收メ就中天日製鹽ハ當國ニ於テ確實ニ成立スヘキコトヲ確メタリ其成績ニ依レハ面積一町步ノ鹽田ニ對シ一箇年優ニ十二萬斤ノ鹽ヲ採收シ得ヘク其品質ハ日本專賣鹽ノ一等乃至二等鹽ニ相當シ採收量、品質、色澤共ニ清國、臺灣等ノ天日製鹽ニ比シ決シテ遜色ヲ認メサルノ好果ヲ收メ得タリ

斯クノ如クシテ天日製鹽試驗ノ好果ナルヘキ形勢ヲ認メントスル時ニ當リ各地競フテ同一方法ニ依リ製鹽ヲ計畫セントスルモノ相踵テ起ラント

セリ當時政府ハ天日製鹽ニ就キ尙ホ試驗中ニ屬スルノミナラス鹽務行政ノ方針確定スルニ至ル迄ハ民間ニ許可セサルヲ可ナリト認メ隆熙元年(明治四十年)十月ヲ以テ天日製鹽法ニ依ル製鹽ハ之ヲ一般民間ニ許可セサルコト、シ之ヲ度支部大臣ヨリ各道觀察使ニ訓令シ又一方閣議ノ決定ヲ以テ内閣總理大臣ヨリ統監ニ照會シ以テ日本人其他外國人ノ企業ヲ許可セサル主旨ナルコトヲ明カニ聲明セリ

三 天日製鹽田ノ築造

當國人民ハ鹽ヲ使用スルコト比較的多ク全國ニ亘リテ其消費スル量ハ約三億斤ニ及フ到ル所鹽田ニ適當ナル干潟地アルニ拘ハラズ鹽業ハ漸次衰頹ノ勢アリ是レ他ナシ清國其他ノ天日製鹽輸入ノ爲ニ壓倒セラル、ニ外ナラス若シ此儘ニ放任センカ當國ノ製鹽業ハ遠カラズ廢滅ニ歸スルニ至ルヘシ然ルニ恰モ好シ前述ノ如ク天日製鹽ハ其試驗ニ徵シ確實ニ其成立ヲ認メタルニ依リ果シテ此方法ニ依ル製鹽ヲ以テ全國ノ需要ヲ充スヲ得ルニ於テハ外國輸入鹽ヲ驅逐シ日ニ衰頹スル當國鹽業ノ衰退ヲ回復スルト同時ニ人民ニ低廉ナル鹽ヲ供給シ而モ政府ニハ非常ナル好財源タルヘ

ク財政竝ニ經濟上裨益スル所實ニ尠カラサルヘシト信ス

鹽ノ收入ヲ以テ財政上ノ一助トナスコトハ天日製鹽ノ行ハル、國ニ於テハ極メテ容易ニシテ近ク日本臺灣及清國ニ於テ其實例ヲ見ル所ナリ當國ニ於テハ之等二國ニ比シ一層容易ニ行ハレ得ヘキ理由アリ何トナレハ當國ニハ從來天日製鹽業ナルモノナキニ依リ今之ヲ官營トナスモ何等民業ニ影響スル所ナケレハナリ或ハ之カ爲メ舊來ノ製鹽業ニ從事スル者ノ職ヲ失ハンコトヲ慮ルモノナキニアラサルヘシト雖之等ハ天日鹽ノ官營ヲ俟タスシテ早晚輸入鹽ノ爲ニ廢滅ニ歸スヘキモノナルニ依リ寧ロ此際鹽官營ノ方針ヲ確立シ徐々ニ之等失職者ヲ救フノ途ヲ講スルヲ以テ機宜ニ適スルモノト認ム

右ノ理由ニヨリ天日製鹽ノ官營ニヨリ國內ノ消費量參億斤ヲ供給センニハ正ニ面積貳千五百町ノ鹽田ヲ築造スルノ必要アルモ國庫ニ於ケル資金ノ都合ニ依リ左ノ二期ニ分テ築造實施ノ方針ヲ執リタリ

第一期 鹽田築造面積壹千町步

平安南道三和府廣梁灣ニ於テ隆熙三年(明治四十二年)起工シ同五年(明

治四十四年(竣成)スルモノトス

第二期 鹽田築造面積壹千五百町步

京畿道仁川府朱安ニ於テ約五百町步平安北道龍川府外上面(南市)ニ於

テ約壹千町步ヲ築造スルモノトシ第一期工事ノ進捗及製鹽狀態ニ鑑

ミ適當ノ時機ニ於テ計畫實行スルモノトス

斯クシテ先ツ天日製鹽第一期計畫ハ隆熙三年(明治四十二年)一月確定セラ

レ直ニ之カ實行ニ著手シタリ其要項左ノ如シ

天日製鹽田築造地 平安南道三和府廣梁灣

鹽田築造面積 壹千町步

鹽田築造費豫算(固定資本) 金百拾六萬四千貳百八拾七圓

運轉資本 金六萬八千圓

經常費年額 金貳拾萬四千參百六拾四圓

收入年額 金六拾七萬貳千圓

利益年額 金四拾六萬七千六百參拾六圓(收入金ヨリ經常費ヲ差引タル差額)

利益率 年三割七分九厘餘(固定資本及運轉資本ニ對スル利率)

鹽ノ生産年額 一億二千萬斤

鹽ノ生産費 百斤ニ付拾七錢參毛

年産額壹億貳千萬斤經費年額貳拾萬四千參百六拾四圓トス

固定資本及運轉資本百貳拾參萬貳千貳百八拾七圓ニ對スル利子年六

分ヲ加算スレハ生産費百斤ニ付貳拾參錢壹厘九毛ナリ

築造期限 隆熙三年(明治四十二年)ヨリ同五年(明治四十四年)迄三箇年

繼續

右ノ決定ニ基キ隆熙三年(明治四十二年)四月廣梁灣天日製鹽田實測及設計ニ同五月ヲ以テ工事ニ著手シ現ニ著々進行中ニ屬ス又朱安ノ鹽田モ漸次之ヲ擴張シテ其製鹽ヲ盛ニシツ、アリ今現在此兩鹽田ノ工事工程ノ狀況ヲ舉クレハ左ノ如シ

場所名	區別	面積		計	工事著手年月日	工事竣功年月日	備考
		鹽田	貯水池及堤防				
廣梁灣	第一區	一六三三〇九坪	六九六九一坪	二三三〇〇〇坪	隆熙四年六月	完成見込	現在工事工程約三割
	第二區	八八〇四九六坪	二二六六〇四坪	一〇一七〇〇〇坪	未著手		
	第三區	六三四九七一坪	七七七九九坪	七三二七〇〇〇坪	同		

リ之等ニ對スル研究及改良發達ヲ企圖シ傍ヲ當國ニ於テ從來應用セラレサル果實類ヨリ酒類ヲ醸造シ將來ノ財源ヲ涵養スルノ目的ヲ以テ醸造試驗所ヲ設置スルノ急ナルヲ認メ之カ計畫ヲ立テ隆熙三年六月起工同年十月之カ竣工ヲナシタリ其設計ノ概要ヲ舉クレハ左ノ如シ

- 一、醸造試驗所ノ位置ハ京城西部阿峴所在ノ官有地三千三百餘坪ノ地ヲ選定シタリ該地域ハ京城西大門ヲ距ル約十二町麻浦ニ通スル道路ニ沿ヒ西北山ヲ負ヒ稍東南ニ向ヒ緩除ニ傾斜セル小邱ニシテ南遙ニ漢江ト麻浦ヲ望ム水質ハ清澄純良ニシテ其量ニ富ミ四時涸渴ノ虞ナシ蓋シ阿峴ノ地タルヤ從來京城附近ニ於ケル燒酒及麴子ノ製造地ニシテ該部落ハ軒ヲ列ネテ殆ト燒酒ノ製造家ナラサルハナシ
 - 二、營造物ハ原料製成場一棟、醸造場一棟、納屋四棟、事務室一棟、職工宿泊場一棟、附屬官舎二棟、計十棟此建坪合計三百九拾一坪ナリ
 - 三、設備器械ハ百五十ポンド壓十二馬力汽罐一臺、十五馬力石油發動機一臺トス
- 前者ハ蒸餾蒸餾暖房揚水ポンプ等ニ使用シ後者ハ主トシテ原料調理

ノ動力ニ使用ス

原料調理用器械トシテハ精米機、小麥粗碎器及製粉機等ヲ設備セリ
其他醸造用竝ニ分析等ニ要スル緊要ナル器具器械ノ設備ヲナセリ

三 試驗

一、藥 酒

藥酒ハ當國ノ國酒トモ稱スヘキモノニシテ水ヲ以テ稀釋シタルモノト否ヲサルモノトアリ前者ハ中流以下ニ飲用セラレ後者ハ全酒ト稱シ中流以上ノ飲料ニ屬スレトモ之ハ市中ニ販賣セラレスシテ各自ニ醸造スルモノトナレリ酒質ハ區々ニシテ日本酒ノ如ク一定ノ標準ヲ有セス製造方法ノ如キモ又極メテ區々ニシテ一般ニ幼稚ナルヲ免レズ殊ニ麴子ノ用量極メテ多量ニシテ原料ノ三分ノ一ハ殆ント無用ニ消費スルノ不利アリ箇人竝ニ國家經濟上ノ損失尠カラサルヲ以テ一面酒質ヲ一定シ一面經濟上ノ損失ト衛生上ノ危疑ヲ避クル目的ヲ以テ隆熙三年(明治四十二年)末以來之カ試驗ヲ行ヒ製品ヲ試ミニ販賣シタルニ能ク一般ノ嗜好ニ適スルコトヲ認メタリ本年上半年ノ試釀高

八百餘石ニシテ今ヤ殆ト撥下シ盡クシ口下夏季試醸中ナリ而シテ本年度豫定試醸高ハ五百石ニシテ大部ハ秋季以後ニ試醸シ試験ノ結果ハ之ヲ人民ニ周知セシメ醸造家ノ利益ヲ増進スルト同時ニ國家財源ノ涵養ヲ期スルニアリ

二、燒酒

燒酒ハ從來醸造者ノ殆ト廢物タル藥酒粕及高粱ヲ原料トシ高粱燒酒醸造法及蒸餾法ノ如キモ全ク在來法ヲ改メ其得タル燒酒ハ日韓人ノ嗜好ニ適シタリ口下尙醸造中ニ係リ尙夏季中約四十石ヲ製出シ本年通シテ五拾石造石ノ豫定ナリ

三、果實酒

一、葡萄酒

果實ハ韓國至ル處其栽培ニ適シ葡萄酒栽培者、苺栽培者ノ如キハ各地ニ現出スルノ状態ニシテ昨年ハ蘆島園藝模範場產出食用葡萄酒ヲ以テ七斗ヲ試醸シ口下醸熟中ニ係ル原料ハ食用葡萄酒ナリシヲ以テ優良ノ成績ヲ期シ難シト雖右ノ經過ニ徴スレハ、相當醸造用葡萄酒ヲ原

料トセハ慥カニ純良ノ葡萄酒ヲ醸製シ得ヘシト信セラル、ヲ以テ今春佛國產醸造用葡萄酒リースリンク、ムスカテナ、ビノー、ガメー種等二十三種千八百株ヲ試験所構内ニ栽培シタルニ其發育状態ハ頗ル佳良ナリ

二、杏實酒

杏ハ當國至ル所ニ栽培セラルレトモ單ニ生食用ニ供セラル、ノ外他ニ利用セラレサルヲ以テ昨年之ヲ原料トシ杏實酒約四斗ヲ試醸セシニ成績佳良ナリシヲ以テ本年ハ五石ヲ製造スルノ豫定ナリ

三、櫻桃酒

櫻桃モ亦韓國至ル所產スルヲ以テ杏實ト同シク試醸造セル石高約六斗ニシテ口下尙醸熟中ニ屬ス

四、苺酒

苺酒ハ本年初メテ醸造ニ著手シ口下醱酵中ニ係ルト雖其經過適順ニシテ佳良ノモノヲ得ルノ見込ナリ

第三節 煙草

當國ニ於ケル煙草ハ一般ニ人民ノ嗜好旺ナルト共ニ其生産額又著シク財政上好個ノ財源トシテ特ニ注目ヲ要スル國產タリ是ヲ以テ光武九年(明治三十八年)八月以降財政顧問部ニ於テ之カ調査ニ著手シタルヨリ今日ニ至ル迄之ヲ繼續シ各道樞要ノ地ニ出張所ヲ設置シ專ラ之カ調査及涵養ニ從事セリ此間諸種ノ障礙ヲ蒙リ其進行ヲ妨クルモノアリト雖隆熙二年(明治四十一年)末ニ至リテハ既ニ全道四分ノ三ニ達スル調査ヲ了スルヲ得因テ全道ニ對スル生産消費ノ總額ヲ推斷スルニ足ルノ進域ニ及ヒタルヲ以テ煙草政策ノ一階梯トシテ翌年三月煙草税法ノ發布ヲ見ルニ至レリ從テ之ニ伴フ今後更ラニ採ルヘキ事業方針ニ向テ調査ヲ進捗セシムルヲ以テ目的トシ一面財源涵養ノ方策トシテ煙草耕作改善指導ヲ施シ終始一貫調査及涵養ノ完成ニ努メツ、アリ左ニ調査開始以來今日ニ至ル間ニ於ケル經過及事蹟ノ大要ヲ區分略述セントス

一 調 査

光武九年(明治三十八年)調査開始當時ハ尙之ニ從事スル吏員少カリシヲ以テ唯凡ソ財源ト認ムヘキ煙草其他ノ農產物等ニ關スル一般的調査ヲ行ヒ

タルニ過キスシテ僅カニ二三地方ニ於ケル煙草耕作地ノ狀況即チ土壤地勢栽培方法等之ニ伴フ煙草集散狀況及煙草販賣並ニ消費狀況ヲ視察シ以テ調査上ニ關スル方針概目ヲ定メタルニ止マレリ然カルニ翌年六月ニ至リ吏員ヲ増加シ主要煙草產地ノ調査上便宜ナル地ヲ撰ヒ五出張所ヲ開始シ專ラ生産額其他ノ概況調査ニ著手セシメタルモ調査員ハ未タ當國人情風俗ノ詳悉スル能ハザリシモノアリテ抄々シク進行セス漸クニ出張所附近ニ於ケル生産概況ヲ達觀シ得タルニ外ナラス剩サヘ光武十一年(明治四十年)七月京城政變ノ餘波ハ各道ニ及ヒ出張所在勤員ノ過半ヲ引揚クルノ止ムナキニ至リ爲ニ調査ニ一頓挫ヲ來タセシカ九月ニ至リ更ニ吏員ヲ増加シ比較的安全ナル地方ノ調査ニ從事セシメ越エテ隆熙二年(明治四十一年)一月官制改正ニ伴ヒ各道樞要ノ地ニ出張所ヲ設ケ未調査地ノ調査ヲ續行スルコト、セシモ動モスレハ各地未タ不穩ノ狀況アリシカ爲一時調査ヲ中止スルノ止ムヲ得サルニ至リシヲ以テ其間安全ナル地方又ハ出張所々在地ニ於ケル營業者狀況ヲ調査セシメ營業上ニ於ケル利益歩合關係并ニ煙草集散ノ狀況等ヲ調査セリ尋テ九月ニ至リ各

地稍平穩ヲ傳フルニ至リシニ依リ調査員ヲ督勵シ未調産地ノ實地踏査ヲ續行セシメタリ以上ノ結果ニ依リテ調査既済郡數ハ全道ヲ通シテ二百四十五郡即チ全國ノ四分ノ三ニ達シ茲ニ煙草稅法發布ニ伴ヒ從來ノ調査方針ヲ變改シ各道産地中ノ主要集團産地ノ詳密調査ヲ遂行ナスコト、シ昨年七月ヨリ順次調査中ニ在リ

二 耕作ノ指導

當國ニ於ケル煙草ノ耕作方法タル頗ル粗放ニシテ之カ改善ヲ計ルヘキ點尠カラズ從テ財源涵養ノ一手段トシテ改善指導ノ急務ナルヲ認メ茲ニ隆熙三年(明治四十二年)一月之カ指導ノ順序ヲ定メ比較的易キ日本人耕作ノ盛ナル大邱、密陽等ノ集團産地ニ向テ實地ニ就キ各適切ナル指導ニ從事セシメタルニ其效果ハ相當品質ヲ高メ販路モ好況ヲ呈シ成績良好ナルヲ見タリ故ニ本年ニ入りテハ一層其歩ヲ進メ調査既済ノ結果ニ依ル左記著名大主産地ヲ涵養指導地ニ選定シ之カ地域内一面ニ三名乃至五名ノ模範耕作人ヲ置キ實地指導ヲ講シ是等先覺者ノ養成ニ努メ漸次附近耕作者ヲシテ之ニ倣ハシムヘキ方針ヲ採リツ、アリ

- 京畿道ノ内 龍仁、陽智、廣州、果川ノ各郡
- 忠清北道ノ内 報恩、懷仁、清州、清安、槐山ノ各郡
- 全羅北道ノ内 全州、鎮安、高山、任實ノ各郡
- 慶尙南道ノ内 密陽、居昌ノ兩郡
- 慶尙北道ノ内 大邱郡
- 黃海道ノ内 松禾、長淵ノ兩郡
- 江原道ノ内 寧越郡
- 平安南道ノ内 成川郡

三 試作

煙草財源涵養指導ヲ爲スニ當リテハ當國風土ニ適當ナル優良種ノ撰擇及耕作乾燥法等總テ好適法ヲ知悉スルノ主旨ニ依リ隆熙元年(明治四十年)成川出張所ニ於テ米國種ヲ栽培シ黃色葉煙草乾燥法ニ則リ之カ試驗ヲ行ヒタルニ其成績大ニ良好ナリシカ隆熙二年(明治四十一年)四月該出張所ハ暴徒ノ襲撃ニ遭遇シ其成績ニ就テ見ルヲ得サリシハ遺憾トスル所ナリ更ニ翌年大邱及大田ニ煙草試作地ヲ設ケ在來種、日本種、米國種ヲ栽培シ本年ニ

於テハ土耳其種ヲ加ヘ諸種ノ講究ト共ニ專ラ煙草耕作ノ模範ヲ示シ煙草耕作ノ改善指導誘掖ノ資ニ供シツ、アリ
左ニ隆熙三年(明治四十二年)試作成績ヲ摘録ス

種類比較成績表 其一

種別	播種	發芽	移植	發蕾	摘蕊	收穫		平均一株當著葉數(土葉ヲ除ク)
						月終日	移植日	
永川葉	三月十七日	四月十二日	五月六日	七月十日	八月六日	九月十日	二九日	一七三
國分葉	同	同	同	同	同	同	同	一八七
達磨葉	同	同	同	同	同	同	同	一九八
秦野葉	同	同	同	同	同	同	同	一九〇
國府葉	同	同	同	同	同	同	同	一九二
松川葉	同	同	同	同	同	同	同	一九八
エルローアコノコ	同	同	同	同	同	同	同	一六八
エルローアライカ	同	同	同	同	同	同	同	一六二
ホンヂエラス	同	同	同	同	同	同	同	一四三
ヘスタ	同	同	同	同	同	同	同	一六二

備考

永川葉ハニ番葉ヲ採收セルヲ以テ成熟遅延セリ

同上 其二

種別	全葉ノ重量	乾燥歩合	收穫反歩量	平均一貫價	一段歩當價格
永川葉	二四〇五六	一四八	五八八〇	六六	二四三六
國分葉	三二四六七	一四〇	四四〇〇	八八〇	三八七四六
達磨葉	四六三九八	一二六	五三三〇	七七九	四二八五六
秦野葉	四二四四〇	一二六	五三三〇	八二五	四四〇三三
國府葉	四四〇四〇	一二〇	五三三〇	七六〇	四〇三三九
松川葉	四四〇四〇	一二三	六〇九〇	七〇	四二六〇四
エルローアコノコ	九〇九六五	一二八	五八一〇	一一〇〇	六九八一六
エルローアライカ	六七五二五	一二九	四〇二五	一四四〇	五七八三八
ホンヂエラス	六五八四〇	一二三	四〇三〇	一四四〇	五七九七四
ヘスタ	八五九五〇	一二八	五九〇〇	一三〇〇	六六〇三三

同上 其三

種別	葉ノ大	色澤	彈力	厚葉薄ノ	引火	灰色	中骨	香	味
水川葉	六三	赤褐	乏シ	厚	良	濃	五〇〇	青臭多ク辛味最モ強シ	
國分葉	六三	暗褐	同	同	同	同	二七三	稍臭氣多ク辛味多シ	
達磨葉	七五	黃褐	同	同	同	同	三七七	同	
秦野葉	七五	同	同	稍厚	同	同	二七六	同	
國府葉	六三	暗褐	同	同	同	同	二五〇	同	
松川葉	六七	同	同	厚	同	同	二五〇	同	
エルローオロンコ	五三	褐黃	弱	同	同	同	二五五	嗅味稍強ク香氣乏シ	
エルロープライオホル	七三	濃黃	稍強	同	同	同	二六七	同	
ホンヂエラス	六〇	橙黃	同	同	同	同	二六五	同	
ヘスタ	六五	褐黃	強	同	同	同	二六八	嗅味稍強ク少シク香氣アリ	

肥料比較成績表 其一

種別	全葉ノ重量	乾燥歩合	一反歩當目	平均一當價	一反歩當價格
第一區 大豆粕施用	四四六八五	六三四	一四八	六三四〇	九九〇
第二區 荏實粕施用	四二四〇	五三六	一四〇	五三六〇	一〇〇〇

同上 其二

種別	葉ノ大	色澤	彈力	葉厚薄	引火	灰色	中骨	香	味
第一區 大豆粕施用	六三	黃褐	稍乏	稍厚	稍良	濃	二七八	稍異臭ヲ帶ヒ辛烈ナリ	
第二區 荏實粕施用	三九	同	同	稍薄	同	同	二七〇	稍異臭ヲ帶ヒ辛味稍強シ	

以上各種別毎ノ成績ニ對スル概評左ノ如シ

一、種類比較 成績各表ニ依テ見ルニ韓國種及日本種中品位收穫最モ佳良ナルハ秦野葉ニシテ之ニ次クナ國分葉トシ順次達磨國府松川葉ニ及ヒ當國種永川葉最モ劣等ナリ而シテ日本種ハ其元產地ニ於ケルカ如ク葉質薄ク且佳香ヲ有セス孰レモ臭氣強ク辛味強烈ニシテ葉質肥厚刺サヘ彈力乏シキ缺點アリ之等ノ因由ハ尙ホ試作ヲ重ネ漸次研究ヲ積ムニアラサレハ一時ニ適否ノ断定ヲ下スコト能ハサルカ如シ又米國種ハ其成績良好ニシテ該種ノ栽培ハ韓國ニ於テ將來有望ナルカ如シ

二、肥料比較 各成績ニ依テ見ルニ第二區荏實粕施用區良好ナルカ如シ

而シテ韓國内地ニ於ケル大豆粕ノ供給ハ一般ニ乏シク荏實粕ノ供給多ク且價格モ比較的低廉ナルヲ以テ其使用ニ便ナルカ如シ然レトモ肥料種類ノ效果タル僅カニ一回ノ成績ニ徴シ判定スル能ハサルヲ以テ尙ホ之カ施用方法及用量等研究ノ餘地尠シトセス

三、黄色乾燥 米國葉黄色乾燥ハ特設ノ鐵管式乾燥室ニ於テ火力ヲ用ヒ乾燥セシニ其成績比較的良好ナリ

第四編

第一章 建築工事

第一節 工事機關

古來韓國政府ニ於テ廳舍建築其他ノ土工ヲ起スノ要アルトキハ戶曹管掌ノ下ニ隨時營繕都監ヲ設ケ監董ヲシテ之カ施工督役ノ衝ニ當ラシメ平時修繕等ノ小工事ハ營繕司ニ於テ專ラ之ヲ掌理セシムルノ制ナリシカ軌近國運ノ發展ニ伴ヒ在來ノ諸官衙ハ狹隘ニ失シ加フルニ政務ノ執行上構造其宜シキヲ得スシテ之カ新營改築ハ焦眉ノ急ニ迫ルモノアリ殊ニ行政組織ノ改善ニ從ヒ各種政務機關ノ分立増設セラレ、モノアリテ是等廳舍ノ設立ヲ要スルモノアリ或ハ地方産業ノ發達ニ伴ヒ勸業的諸設備ヲ要スルモノアル等各般ノ建築工事ハ頗ル頻繁ヲ極ムルニ至レリ於是乎從前ノ組織ヲ以テシテハ到底其萬全ヲ期シ難ク工事實施ノ迅速確實及工事事務ノ統一整々ヲ圖ル上ニ於テ專門ニ之カ執行機關ヲ特設スルノ必要ヲ生シ光武十年(明治三十九年)九月財政顧問監督ノ下ニ度支部内ニ建築所ノ創設ヲ

見ルニ至レリ

是ヨリ先キ當國政府財政顧問部ハ沿岸港灣ノ改良及稅關施設ヲ整理スルノ急務ヲ認メ特ニ技術者ヲ聘用シテ光武九年(明治三十八年)十二月初メテ稅關工事部ヲ組織シ之ヲ工務局及燈臺局ニ分ケテ專ラ各般ノ港灣ニ關スル下事ヲ經營セシメ特ニ其工務局ニ於テハ總稅務司及財政顧問ノ管理ニ屬スル工事一切ヲ掌理セシメタリ即該部ハ當國建築土木工事執行機關トシテ組織的ニ成立セルモノ、濫觴ニシテ專ラ力ヲ港灣設備ニ盡セシト雖傍ラ諸建築工事ノ一般ニ涉リ遂行セルモノ尠カラズ

越エテ隆熙元年(明治四十年)十二月行政官府ノ釐革ニ伴ヒ財政顧問部及總稅務司廳ノ事務ハ度支部ノ管掌ニ移ルト同時ニ度支部大臣管理ノ下ニ臨時稅關工事部ヲ置キ專ラ舊稅關工事部工務局ニ屬セシ海關工事事務ヲ繼承セリ

然ルニ建築所ト臨時稅關工事部トハ併立シテ政府ニ屬スル工事ヲ分掌セルモ其目的事業ハ相酷似シ而カモ同シク度支部大臣ノ管理ニ屬シ兩衙ノ職員ニシテ相互兼勤セルモノ尠カラズ且ハ建築所ノ掌所工事ニシテ往々

之レヲ臨時稅關工事部ニ委託セルモノアル等實質ニ於テ離ルヘカヲサル關係ニアリシカ各其事業ノ漸進ニ從ヒ同一種官衙ノ兩立スルノ不利ヲ認メ遂ニ隆熙二年(明治四十一年)八月臨時稅關工事部ヲ廢シ之ヲ建築所ニ併合セリ

此ノ合同ニ因リテ建築所ノ所掌事業ハ劃然制定セラレ即チ政府ニ屬スル建築工事ノ唯一機關トシテ之カ設計施工ノ任ニ當ルト共ニ更ニ海關工事ヲ分掌スルコト、ナリタルナリ
加之當國ニ於テハ民間未タ完全ナル工事機關ノ存在セサルヲ以テ各官廳ノ管掌ニ屬スヘキ工事及銀行會社又ハ民團其他公共團體ノ企畫ニ係ル事業ノ設計實施及其他工務處理ノ委託ニ應シ建築土木トナ問ハス之カ遂行ノ任ニ當ルノ道ヲ開ケリ

第二節 工事實施

一 創始時代工事概況

秩序未タ定ラス職員未タ備ハラサル建築工事創始ノ時代ニ於テハ殆ト工事ノ設計及各般ノ調査ニ忙殺セラレ從テ大計畫ノ下ニ著手起工セラレタ

ルモノナク亦工事ノ數ニ於テモ見ルヘキモノナカリシカ海關工事ニ屬スル建築ニ於テ京城、群山、木浦、鎮南浦等ノ稅關廳舍及倉庫等ヲ初メトシ元山、清津等ノ稅關廳舍及官舍ヲ建設シ同時ニ各地ノ稅關官舍派出所、檢疫所等相次テ工ヲ起シタルト共ニ廳舍建築トシテハ現度支部廳舍、タル内閣廳舍、現高等法院タル平理院及京城監獄、印刷局、水原農林學校ヲ重ナルモノトシ京城及地方農工銀行ノ廳舍及倉庫十三棟ヲ建設セリ

二 隆熙二年(明治四十一年)以後工事概況

諸般ノ建築工事漸ク其必要ヲ認メラル、ニ及ヒテハ隆熙二年(明治四十一年)ヨリ二箇年度ノ繼續事業トシテ營繕費貳百六拾五萬餘圓ノ配賦ヲ受クルニ至リ之ヲ廳舍新營費及官舍新營費ニ分テ各官衙及附屬官舍ノ建築費ニ充テラル、ヤ建築工事ノ數ハ遽カニ多キヲ加ヘ其今日迄ニ施行セラレタルモノハ別表一覽表ニ見ル如ク六百九拾一件ヲ數フルニ至リ一個ノ建築所トシテハ頗ル異數ニ上リタルト共ニ工事トシテ見ルニ足ルヘキモノトシトセス

隆熙二年度(明治四十一年)ハ繼續事業ノ開始年度ニシテ豫算ノ配當ハ敷地

調査、工事設計等新計畫ノ爲ニ繁忙ヲ極メ未タ充分ナル起工ヲ見サリシト雖實施總額七拾萬圓餘ノ支出ヲ見タリ而シテ本年度ニ於テ竣工セル大韓醫院及廣通館ハ其最モ光彩ヲ放テル建築ナリトス

隆熙三年度(明治四十二年)ニ於テハ各般ノ調査略既ニ終リヲ告ケ實施期ニ入りタルヲ以テ其工區ハ國內十三道各地ニ亘リ貳百七拾有餘箇所ノ工事區域ニ及ヒ七百二拾七件ニ達シ其實施總額百九拾五萬圓ヲ算ス而シテ之等工事中山間邊陲ニ工ヲ起シタルモノ亦尠カラズ其施工上最モ困難ヲ感シタルハ韓國内地交通不便ナルニ依リ時トシテ暴徒又ハ惡疫ノ爲工事計畫ノ調査督役或ハ材料運搬上阻礙ヲ蒙リタルコト多ク又四月ノ交、起工セシモノハ一般ニ進捗上成績佳良ナリシモ七八月頃起工ニ係ルモノハ十一月頃ニ至リ寒候ニ入り工事ノ進捗上尠カラサル蹉跌ヲ來サシメタリ其他建築敷地ハ成ルヘク官有地ヲ利用セリト雖其適當ナルモノナキ所ニ於テハ不得止民地ヲ買収シテ充當セルヲ以テ其敷地選定上起工ヲ延期セシコト尠カラサリシハ遺憾トスル處ナリ

此年度ニ於テハ別表主要工事一覽表ニ見ル如キ工事ノ起工セルト共ニ地

方警察署六十六箇所ヲ竣成シ裁判所六十四箇所監獄署十二箇所ノ新築増築及修繕ヲ施工セリ其他地方倉庫九箇所屠獸場二箇所等ノ工事ニ著手シ地方徵稅機關タル財務廳舎八十一箇所ヲ建設セリ又官舎ハ農商工部學部次官官舎ヲ主トシ總計八十件ニ及ヘリ

而シテ此年度ニ於ケル諸工事中廳舎又ハ官舎ニシテ同種若ハ同目的ニ使用セラル、モノハ必ス其様式ヲ一定シ施工ノ統一ト工事ノ迅速ヲ期シタリ

本年度建築ニ關スル工費總豫算ハ貳百八拾貳萬圓ニシテ其上半期ニ於テハ官給材料費ヲ除キタル實施工事金額百五拾九萬餘圓ヲ算スルニ至リ別表主要工事一覽表ニ見ル外尙ホ各地警察署十箇所裁判所十二箇所監獄三箇所財務廳舎六、倉庫四、及木浦、鏡城ノ兩林業事務所棉花工場其他各種官舎二十五箇所ヲ起工セリ特ニ平壤鑛業所施設費ノ配賦ニ依リ同工事諸般ノ施設ニ著手セリ

又民間ヨリ施工ヲ委託セラレタル工事トシテハ東亞煙草株式會社京城工場及舍宅、南大門市場建築店舖及倉庫ノ二工事アリ

三 施工方法

前述ノ如ク所管工事ハ甚タ多クシテ之カ設計施工ニ當ルヘキ吏員ノ數比較的少數ナルヲ以テ凡テノ工事ハ當初一般競争入札ノ方法ヲ採リ受負ニ附シ來リシモ當國ニ於ケル材料缺乏ノ結果受負業者ハ總テ之等ノ材料ヲ日本ニ仰カサルヲ得スシテ勢ヒ工事ノ延滞ヲ來タシ又材料撰擇其宜シキヲ得サルモノアル等種々ノ缺點ヲ免レサルヲ以テ之等ノ弊害ヲ艾除シ工事ノ堅牢ト實施ノ迅速トヲ期スル上ニ於テ材料官給ノ必要ヲ認メ建築所附屬官衙タル煉瓦製造所ニ於テ製作シタル煉瓦、土管及瓦ヲ官給トシ大韓醫院、議政府、平理院其他各所ノ工事ニ試用シタリ其後隆熙二年(明治四十一年)十二月ニ至リ統監府營林廠ト特約シ營林廠製材ノ供給ヲ受クルコト、シ一面ニハ新義州ヨリ南ニ向フ物資ノ少ナキヲ利用シテ鐵道管理局ニ結ビ低率ナル運賃ヲ以テ鐵道沿線其他交通便利ナル地方ノ建築材料トシテ木材ヲ官給スルニ至リ尙ホ進ンテ一部ノ建築ニ對シテハ「ペンキ」及金具ノ官給ヲモ爲スコト、セシヲ以テ主要ナル建築工事ハ部分受負ノ方法ヲ講スルニ至リ著シク工事ノ成績ヲ良好ニ導クノ傾向ヲ示シツ、アリ尙ホ釜

山税關廳舎工事ノ如キハ進ンテ一部直營ノ方法ヲ以テ之カ完成ヲ期セリ而シテ今日ニ於ケル煉瓦其他ノ生産額ハ一日平均煉瓦參萬五千個、土管各種平均四百五拾本、瓦四千五百枚ニシテ木材ハ官給開始ヨリ今日ニ至ル迄總計五萬八千九拾八尺ノ供給ヲ受ケタリ而シテ之等建築材料ハ總テ工事トシテ消化セラレ前陳ノ如キ工事件數ノ實現セルモノナリ

四 建築工事一覽表

一 自創業主要工事一覽表

(工費壹萬圓以上ニシテ主タルモノヲ掲ク)

工事名	構造様式	工事費	施工年度	備考
木浦税關上家新築	木造平家	二六〇九〇	光武十九年	
京城税關保稅倉庫	煉瓦平家二棟	三八八〇〇	同	(明治三十九年)
鎮南浦税關廳舎	同	五八三九〇	同	
印刷局擴張工事	煉瓦造工場外四棟 木造六棟	二〇一〇〇	同	
京城監獄	木造平家	三九二七九	同	
水原農林學校	同	三三三三三	同	
木浦線綿工場	同	一五八〇〇	同	

議政府新築	煉瓦造二階建	八二〇〇〇	光武十一年	
平理院新築	同	六〇二八五	同	
大韓醫院	本館煉瓦造二階建 病室七棟其他附屬家	三〇八二〇	同	
群山及木浦税關廳舎	木造平家	七九八八〇	同	
釜山税關檢疫所	同	四一七三三	同	
工業傳習所本館及校舎其他諸設備	同二階建	七七八六〇	隆熙元年	
總理大臣官邸	木造一部二階建	四八三六八	同	(明治四十年)
學部廳舎	同二階建	一九八〇〇	隆熙二年	
廣通館	煉瓦造二階建	四九三三三	同	(明治四十一年)
釜山税關煉瓦倉庫基礎工事	同	二六九九	同	
同 廳舎基礎工事	同	一一〇四〇	同	直營
同 煉瓦倉庫新築	煉瓦造平家	三三五四〇	同	
大邱警察署	木造二階建	二八七三三	同	
仁川税關上家新築	同平家三棟	五八五八〇	隆熙三年	
建築所廳舎	同二階建	三九二八三	同	(明治四十二年)
内部廳舎	煉瓦造二階建	五八七六六	同	
農商工部廳舎	同	四六二九五	同	

第四編 第一章 建築工事

課	建築工事	金額	年	備考
政	木造二階建	三三九六	隆	(明治四十二年)
大邱控訴院廳舎及官舎	木造二階建	七六二四	同	
平壤控訴院	同	四二七〇	同	受托工事
釜山製米所新築	木造平家	三三一九	同	
東亞煙草會社工場	煉瓦造二階建	三三九四	同	受托工事
元山税關上家	木造平家	二七九四六	同	
大邱監獄	同	四七二九六	同	受托工事
春川分監	同	一三八七八	同	
清州分監	同	一六六九六	同	受托工事
度支部廳舎増築	煉瓦造二階建	四七五〇〇	同	
新義州税關廳舎及上家	木造平家	一六一八二	同	受托工事
釜山輸出牛檢疫所	同	一四六五〇	同	
元山財務監督局	同二階建	二二二五	同	受托工事
醸造試驗所	同平家	一七三三三	同	
東亞煙草會社工場	煉瓦造二階建四棟	四二七六	隆	(明治四十三年)
釜山税關上家	木造平家	三三三九	同	
仁川税關煉瓦倉庫	煉瓦造平家	三三八六	同	

二自創業建築工事件數表 (五百圓未満ノモノハ省略ス) 至隆熙四年六月

項目	金額	年	備考
大邱監獄事務所	二五〇四七	同	受托工事
釜山税關監視所	一九二九六	同	
土地調査局廳舎	四三六六六	同	受托工事
廣梁海鹽田廳舎及官舎	八二二六	同	
南大門市場店舖	二七五五八	同	受托工事
釜山税關廳舎	五四〇四一	同	

費目	起				工				件				計
	光武九年	同三十九年	同四十年	同四十一年	同四十二年	同四十三年	同四十四年	同四十五年	同四十六年	同四十七年	同四十八年	同四十九年	
各部諸廳舎新築并修繕	五	五	五	五	二	二	二	二	二	二	二	二	二
醫院新築増築并修繕	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
廣通館ニ關スル工事	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
印刷局ニ關スル工事	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
參政課ニ關スル工事	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
各地裁判所新築并修繕	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
各地警察署新築并修繕	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
計	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四

監獄新營並修繕其他	二	三	三	三	一六	三	二四
財務監督局並財務署新築修繕	六	三	三	二	五	六	三
學校ニ關スル工事	一〇	三	二	二	一	三	一九
勸業模範場							四
煉瓦製造ニ關スル諸設備							六
倉庫ニ關スル工事							二九
製鹽ニ關スル諸設備							六
各道觀察道廳舍							二
屠獸場ニ關スル工事							五
葉煙草乾燥室工事							五
釀造試驗所諸工事							二
林業事務所工事							二
輸出牛檢疫所諸設備							二
棉花工場諸工事							二
官舎及巡查其他諸宿舎							二
税關設備ニ關スル諸建築							一七四
雜工事							一〇九
計	二	二	二〇	三	一九	二	七

鐵業所諸工事	八	六	七〇	一〇九	三〇三	一〇一	六九
東亞煙草會社工事(受託)							三
南大門市場建築							二
合計	八	六	七〇	一〇九	三〇三	一〇一	六九

第三節 煉瓦製造事業

一 沿革

煉瓦製造事業ハ光武十年(明治三十九年)財政顧問在職中ノ經營ニ係ルモノニシテ韓國施政ノ改善ト共ニ一般事業ノ發展ニ伴ヒ諸建築及下水排渌工事等ヲ要スルニ當リ木材其他建築材料ニ乏シク偶坊間製造販賣スル煉瓦及土管瓦ハ其品質粗悪ニシテ雨漏凍破ヲ生シ密ニ建築工事ニ不適當ナルノミナラス其價格不廉且ハ製造力乏シキヲ以テ一般ノ需用ヲ充タス能ハス依テ之ヲ日本國ヨリ輸入センカ運搬費ハ實價ニ倍シ且破損多ク加之日時遷延シ時機ヲ失スル等不利尠テカラサルヲ以テ遂ニ政府ニ於テ廉價ニシテ精良ナル材料ヲ製作スル模範的事業トシテ煉瓦土管瓦ヲ製造セントシ特ニ煉瓦ニ就テハ日本大藏省技師ヲ聘シ之カ調査ヲ依託セシニ頗ル時

宜ニ適シタルモノトノ報告ヲ得タルヲ以テ同年十月三十一日度支部大臣ヨリ煉瓦製造所設立委員ヲ任命シ之カ設備工事ニ著手シタリ而シテ工場位置ニ關シテハ土質及交通ノ關係ヨリ煉瓦製造場ヲ漢江東岸麻浦ニ土管及瓦類製造場ヲ漢江西岸永登浦ニ定メ築造工事其他設備ハ隆熙元年(明治四十年)一月ヨリ著手シ同年十月全ク竣成セリ

二 組織

煉瓦製造所ハ前述ノ如ク其成立ヲ見タリシカ固ヨリ模範的經營ニシテ之カ製造方法ヲ世ニ周知セシメ低廉ニ建築用材ヲ供給スルニアルヲ以テ豫メ一定ノ資本金ヲ與ヘテ之ヲ獨立セシメ一般會計ヨリ離レテ自營セシムルコト、セリ是レ實ニ官營事業トシテ其當ヲ得タルモノナリトス此主旨ヲ以テ光武十年(明治三十九年)煉瓦製造所作業會計規程ハ發布セラレ隆熙二年(明治四十一年)ノ新官制ト共ニ建築所ノ管理ニ屬シテ建築工事ノ施設ト相俟ツテ益之カ材料供給ノ途ヲ開キタリ次ニ其固定及運轉資本額ヲ舉クレハ左ノ如シ

種別	數	量	價	格
土地		七二八〇九坪		三六八七五〇
固定資本 營造物		二六三〇四		一五、〇〇、〇〇〇
機械器具				三、〇〇〇、〇〇〇
運轉資本				二五、〇〇〇、〇〇〇
計				一四、〇〇〇、〇〇〇

三 作業

創業以來作業ノ經營ニ關シテハ主トシテ製品ノ改良ト共ニ専ラ製産費ノ低廉ヲ計レリ尙ホ本年度(明治四十三年)ヨリハ京城監獄囚徒ニシテ科スヘキ作業ヲキモノヲ使役シ一層製造費ノ低減ヲ圖リ一ハ囚徒ノ勞働習慣ヲ養フト共ニ作業ヲ習得セシムルノ方法ヲ採レリ而シテ隆熙二年度(明治四十一年)ヨリハ第一銀行ト特約シテ新築行舎ニ使用スヘキ煉瓦ヲ一手ニ引受ケ低廉ニ供給スルコト、セリ即チ將來韓國銀行タルヘキ大建築ノ煉瓦ハ凡テ本所ノ製作供給スル處タリ今創業以來ノ製産竝ニ供給ノ狀況ヲ年度別ニ示サハ左ノ如シ

一 隆熙元年度 (明治四十年)

製 產 高

種 別	製 產 數	供 給 數	殘 數
煉 瓦	一八九二九九六	一八九一六七八	一三三八
土 瓦	九七〇四五	三三二二六	七三八二九
管	三五〇四	四三	三二六

製品供給先區分

大韓醫院建築 議政府建築 平理院建築 仁川水道水源地
 工業傳習所建築 印刷局擴張工事 稅關工事部官舍 煉瓦窯築造
 其他

二 隆熙二年度 (明治四十一年)

製 產 高

種 別	製 產 數	供 給 數	殘 數
煉 瓦	一三三八	五〇八八九六四	四二一六二七
管	五四九九二六三	一一四六七	四三四三

製品供給先區分

印刷局擴張工事 仁川水道水源地 第一銀行韓國總支店建築
 廣通館建築 內閣煉瓦塀建築 度支部官舍
 工業傳習所實習室建築 大韓醫院醫學校建築 漢城衛生會
 統監府鐵道管理局 平理院廳舍附屬家建築 學部官舍
 農商工部官舍 大韓醫院官舍 其他

三 隆熙三年度 (明治四十二年)

製 產 高

種 別	製 產 數	供 給 數	殘 數
煉 瓦	四二六七	六三〇五四〇七	七八五四九
土 瓦	一三〇四四	四六七四〇四	一三九一八三
管	四三三四五	一〇四七六	七六八四七

製品供給先區分

同 三年度 (明治四十二年)

110,000,000

83,450,000

26,600,000

10,400,000

100,000,000

備考

建築所ニ於テ建築ニ係ル諸工事ニ供給スル製品價格ハ殆ト製造實費ニシテ市價ノ半ハニ達セス故ニ收支計算ハ前表ノ如シト雖政府ハ低廉ニシテ精良ナル材料ヲ使用セルヲ以テ建築上ニ於テ利スル所甚々多シ

第二章 開港場設備

第一節 港灣改良ノ目的

從來當國各開港場ニ於ケル海運連絡ノ設備ハ人工ヲ加フルコト極メテ尠ナク專ラ天然ノ地形ヲ利用シテ僅カニ物資ノ積卸ヲナシ得ルニ止マリ之ニ伴フ關稅行政亦頗ル幼稚ニシテ最モ不完全ノモノタルヲ免カレサルノ實況ナリ蓋シ港灣設備ノ良否及海陸連絡ノ便否如何ハ一國通商貿易上ノ隆頽ニ至大ノ關係アリ近時國運ノ發展スルト共ニ貿易ノ増進ハ各開港場共ニ其程度頗ル著シシ光武十年(明治三十九年)ニ至リ既往十箇年間ニ於ケル輸出入金額增加率ハ實ニ四倍強ニ達セリ如此増進顯著ナル趨勢ナルニ際シ海陸運輸連絡ノ設備ヲ顧ミルコトナク稅關ノ設備亦不完全ノ儘ニ放任スルカ如キハ國家經濟上ノ損失尠少ナラサルノミナラス交通貿易ノ進展ヲ阻害スルコト大ナリトス故ニ光武十年(明治三十九年)之カ改善ノ策トシテ各開港場ヲ通シテ稅關ノ設備ヲ完全ニシ關稅行政ヲ敏活ニ施行スル爲ニ各開港場ノ港灣工事ヲ施シテ海陸ノ聯絡ヲ計リ運輸交通ヲ便ニシテ

益通商貿易ノ發展ヲ期セントスルノ議ヲ決シ直ニ各開港場ヲ調査シ第一期稅關擴張設備工事トシテ刻下應急ノ設備計畫ヲ立テ光武十年(明治三十九年)以降五箇年繼續事業ト爲シ海關工事費金參百貳拾貳萬餘圓ノ豫算ヲ編成セリ其後隆熙二年(明治四十一年)ニ至リ甌南浦及ヒ其他ニ於テ追加工事施行ノ必要ヲ認メ更ニ繼續年限參個年ヲ延長シ隆熙七年度(明治四十六年)竣工ノ豫定ヲ以テ經費ヲ增額シ總工事費ヲ四百九拾萬餘圓ト更正セリ

第二節 稅關設備工事計畫

各開港場ニ於ケル稅關設備ハ凡テ創設ニ屬スルヲ以テ第一期ノ計畫トシテハ先ツ以テ應急設備ノ方針ヲ採リ財政ノ許ス範圍ニ於テ其計畫ヲ定メタルモノナリ而シテ之等ハ應急設備計畫ト雖孰レモ將來ノ豫定計畫ヲ定メ之ニ對シテ其急ナル部分ヨリ實施スルノ方針ヲ採リ海面ノ埋築又ハ港内ノ浚渫或ハ陸上ノ設備鐵道及道路ノ連絡等ニ至リテモ努メテ將來ノ擴張計畫ニ支障ナカラシムコトヲ期シ他日ノ發展ヲ豫想シタルモノナリトス故ニ大規模ノ築港事業ノ如キハ凡テ之ヲ他日ニ讓レリ

今各開港場稅關設備工事計畫ノ大要ヲ舉クレハ左ノ如シ

一 仁川稅關工事

仁川稅關設備ハ現在仁川稅關地先竝ニ英國領事館ノ丘角ヨリ仁川停車場附近ニ至ル海面ヲ埋築シテ其沿岸ヲ物揚場トシ數個ノ棧橋ヲ突出シ埋立地ニハ稅關諸廳舎上屋倉庫ヲ築造シ鐵道線ヲ此地區ニ導キ海陸運輸ノ便ヲ計ルヲ以テ其目的トス

稅關埋立地ハ面積約一萬八千坪ニシテ其水際延長約五百間ハ物揚場又ハ護岸石垣ヲ築造シ岸頭ニハ貨物昇降用起重機ヲ設ケ鐵脚棧橋長六十間一基木造棧橋長四十間四基トス尙ホ構内ニハ道路下水點燈ノ設備ヲ完備シ建築物ハ稅關本館貨物檢査所監視部等約三百坪ニシテ倉庫上屋ハ數棟ニ分テ總坪數約二千二百坪ニ及フ

内港淺所面積約六萬六千七百坪ハ朔望干潮面下約十尺ニ浚渫ス尙大月尾島外港ニ面スル一角ニ海港檢疫所ノ設備トシテ檢疫事務所消毒所患者收容所等ヲ設ク

以上工事費豫算額ハ九拾四萬六千貳百八拾七圓ニシテ木工事ヲ起工セシ

ハ光武十年九月(明治三十九年)日下工事中ニ屬シ隆熙五年度(明治四十四年)竣功ノ豫定ナリ

二 釜山税關工事 附釜山醫平工事

釜山税關設備ハ專ラ京釜鐵道線ノ基點釜山新停車場ノ設備ト相俟ツテ海陸ノ運輸聯絡ヲ計ルヲ以テ目的トシ釜山停車場西側地先ヲ埋築シテ其南端ヨリ延長約二百三十九間ノ突堤ヲ築造シ其外側ハ防波石垣トナシテ突堤内部水面ノ靜穩ヲ計リ又其内側ニ併行シテ鋼鐵片棧橋ヲ設ケ水深常ニ四尋ヲ保テテ三千噸乃至四千噸ノ船舶二隻ヲ同時ニ繫留セシムルニ足ラシメ突堤中部ニハ棧橋ト併行シテ上屋倉庫數棟ヲ建築シ其前面ト背面ニハ停車場構内ニ聯絡シテ鐵道敷線ヲ布設シ又棧橋ヨリ停車場及市街商業地區ニ直續スル道路ヲ設ク

埋立地面積ハ約一萬三千坪ナリ其水際延長約三百間ハ物揚場及護岸石垣トナシテ舢舨荷役ニ便ヲラシメ岸頭ニハ貨物昇降川ノ起重機數臺ヲ設備シ更ニ新ニ築造セル延長約三百八十間ノ物揚場石垣凹字形水面積約六千坪ノ安全ナル舢舨溜ヲ抱擁シテ舢舨帆船ノ岸接荷役ヲ便ニス又埋立地所

ハ道路、下水、點燈及水道ノ設備ヲ完備ス

税關廳舎ハ鐵道停車場本線ト幅員十間ノ道路ヲ距テ、相對シ莊麗ナル煉瓦造二階建トス又税關監視部廳舎ハ棧橋基部ニ建設シ木造二階建ニシテ樓上ニハ貴賓室ノ設備ヲ施ス

又水產物輸出入場トシテ現在税關構内及現在税關船溜水面積内ヲ改築シ漁港トシテ必要ナル設備ヲ此地區ニ施シ其水面積六千餘坪ヲ殘存シテ主トシテ漁船ノ泊地ニ充テ周圍ノ沿岸ハ斜面ヲ有スル石垣トナシテ水產物ノ荷揚場トシ以テ漁船ノ安全ト荷役ノ便利トヲ計リ石垣ニ接シテ冷蔵庫及製氷庫ヲ建設シテ「レ」ミントン、アンモニア壓搾器貳臺ヲ据付ケ一日九噸ノ製氷力ト六噸ノ冷藏力トヲ保タシメ以テ常ニ生魚ノ需給ニ支障ナカラシメ其他水產物ノ競賣竝ニ其ノ荷造場、蓄鹽庫、水產物鹽藏庫、干燥水產物庫等ヲ建築シ輕便鐵道ヲ布設シ道路ヲ具備シテ水產物ノ取扱ト運搬トニ便ナラシメ更ニ構内樞要ノ地區ニ税關出張所及水產物取扱事務所ヲ建築シテ水產業者ニ便利ヲ與フルノ施設ヲナス

檢疫所設備ハ釜山港口神仙臺ト稱スル海岸沿ヒノ箇所ニ檢疫事務所、消毒

内患者收容所等ヲ設ク

以上工事費豫算額ハ百四拾四萬千四百〇八圓ニシテ本工事ヲ起工セシハ光武十年(明治三十九年)七月ニシテ目下工事中ニ屬シ隆熙五年度(明治四十四年)竣功ノ豫定ナリ

釜山鑿平工事

釜山鑿平工事ハ營繕山(度支部所管)並ニ英國領事館山(鐵道管理局所管)ヲ鑿平シ併セテ草梁停車場船繫場間ノ海面ヲ埋築シ草梁釜山間ノ市街ヲ聯絡シテ釜山港ノ貿易發展ニ伴フ商業地區ノ擴張ヲ期セントス

釜山港ハ南韓唯一ノ重要港灣ニシテ海陸交通上ニ於テ樞要ノ位置ヲ占メ船舶ノ出入逐年多キヲ加ヘ陸上ハ縱貫鐵道ノ基點ト爲リ年々交通頻繁ノ度ヲ激増スト雖其港灣ニ面スル地域ハ山迫リ平地極メテ狹隘ニシテ海陸聯絡設備ノ一部分ニ供スル面積ニモ不足スル狀況ナルヲ以テ釜山居留民團ハ苟クモ商港トシテ港灣ノ設備ニ伴フ必須ナル市街ノ設備ヲ爲スヘキ餘地ナキカ如キハ貿易港トシテ頗ル遺憾トスルトコロナリトシ隆熙二年(明治四十一年)十月民團事業トシテ本工事ヲ遂行センコトヲ政府ニ請願シ

政府ハ必要ニシテ有利ノ事業ナリト認メ本事業ニ要スル資金起債ニ對シ元利金支拂ノ保證ニ立テ事業ノ經營及ヒ施行ヲ政府ニ委託スヘキコトヲ條件トシ隆熙三年(明治四十二年)一月本事業ヲ認許ス

本工事ハ營繕山及元英國領事館山ヲ開鑿シ其土砂、岩石ヲ以テ元英國領事館山ト草梁鐵道船繫場間ノ鐵道沿線海面ヲ埋築シ新ニ一大地域ヲ作ルヲ目的トシ營繕山ハ埋築地上ヨリ平均五尺ノ高サニ切り取り元英國領事館山ハ同四尺ノ高サニ切り取り鐵道船繫場前面ニ百五十間ノ防波堤ヲ築造シテ舢船溜ヲ作り防波堤ニ面スル埋築地護岸石垣ハ荷揚場トシテ幅員二間乃至四間ノ斜面張石ヲ施ス本工事ニ依リ生スル土地總面積ハ四萬三千五百四十八坪トス

本工事費豫算額ハ九拾貳萬圓ニシテ之ニ要スル資金債ハ壹百七萬圓ナリ資金債ノ償還ハ隆熙十年(明治四十九年)三月ヲ以テ終了スルノ契約ニシテ本工事ヲ起工セシハ隆熙三年(明治四十二年)五月一日ニ係リ目下工事中ニ屬シ竣功ハ隆熙六年度(明治四十五年)ノ豫定ナリ

右釜山鑿平工事ハ釜山稅關設備工事及釜山鐵道停車場設備工事ト相俟ツ

テ緊要缺クヘカラサル事業ナリトス

三 元山税關工事

元山税關設備ハ元山税關海面ノ一部ヲ「形」ニ埋築シテ上屋倉庫ノ地區トシ一面ニハ安全ナル船入場ヲ構成シ埋築地ノ沿岸ニハ物揚場石垣ヲ築造シ岸頭ニハ起重機ヲ据付ケ尙ホ本港東北ノ風浪ヲ防壁スル爲埋立地前面ニ防波堤延長約二百五十間ヲ築造シ又西方元山居留地海岸ヨリ棧橋ヲ築造シテ防波堤トノ間ニ靜穩ナル水面積五萬四千坪ヲ包擁セシメ居留地海岸ニハ海壁ヲ築造シ赤田川河口ニハ防砂堤九十間ヲ築キ漂流ノ漂流ヲ防禦ス

港口葛麻半島ノ一部ニハ檢疫所ノ設備ヲ爲ス

本工事費豫算額ハ四拾九萬千四百拾貳圓ナリ本工事ヲ起工セシハ光武十年(明治三十九年)八月ニシテ目下工事中ニ屬シ隆熙四年度(明治四十三年)竣工ノ豫定ナリ

四 甌南浦税關工事

甌南浦税關設備ハ現在税關ハ海岸ヨリ隔絶シ不便ノ地ニ在ルヲ以テ新ニ

大同江岸明狹通ヲ夾ミタル地區ヲ鑿平埋築シ諸廳舎竝ニ上屋倉庫數棟ヲ新築シ河岸ヲ整理ス尙ホ埠頭附近ニ棧橋ヲ突出シテ干潮時ト雖荷役ヲ便ニス又現在市街ト飛濊島トノ間ニ介在セル干潟地ヲ堀鑿シ海陸連絡ノ爲ニ内港ヲ施設セントス内港ノ施設ハ開船渠ヲ築造シ船溜内ノ水面ハ開門ニ依リテ殆ト一定シ其最低限度ヲ小滿潮面ニ止マラシムルヲ以テ船溜内ノ船舶ハ岸接緊留シテ荷役ニ便ナラシメ船溜ハ南方假締切堤ニ依リ外海ト分界シ東方埋立地ヲ築造シテ飛濊島ニ連ナル埋立地沿岸ノ一部延長約九十間ハ繫船岸壁トナシ流船ヲ横付ニシ他ノ沿岸ハ物揚場護岸トシ帆船竝ニ解船ノ繫留場タラシム開門ハ幅七十二尺扉ハ一箇所ニ之ヲ備フルノ計畫ナリ尙ホ將來豫定ノ擴張計畫ヲ待ツテ本工事ノ完成ヲ期セントスルモノナリ

本工事費豫算額ハ百拾四萬參千四百八拾貳圓ニシテ本工事ヲ起工セシハ光武十年(明治三十九年)八月ニ係リ目下工事中ニ屬シ竣功ハ隆熙七年度(明治四十六年)ノ豫定ナリ

五 其他ノ税關設備工事

一、清津稅關設備ハ新開港場トシテ總テ新ニ設備ヲ要ス其主タルモノハ船入場ノ築造ニシテ東西防波堤總延長約百八拾五間ヲ築造シテ風浪ヲ防禦シ内部水面積約一萬二千坪ハ靜穩ナル船入場トナシ沿岸ヲ整理シ水面ノ一部ヲ埋築シテ物揚場ヲ設置シ稅關構内ニ於テ諸廳舍及上屋倉庫ヲ新築ス而シテ本工事費豫算額ハ四拾貳萬六千五百六拾六圓ニシテ本工事ヲ起工セシハ隆熙二年(明治四十一年)四月ニ係リ目下工事中ニ屬シ隆熙四年度(明治四十三年)竣功ノ豫定ナリ

二、城津稅關設備ハ防波堤九十間ヲ改築シ物揚場石垣八十間ヲ新設シ其他廳舍及倉庫ヲ建築ス而シテ本工事費豫算額ハ四萬八千七百八拾圓ニシテ本工事ヲ起工セシハ隆熙三年(明治四十二年)七月ニ係リ隆熙四年度(明治四十三年)竣功ノ豫定ナリ

三、馬山稅關設備ハ構内地均シ道路工事ヲ施シ棧橋ヲ増築シ倉庫ヲ建設ス而シテ本工事費豫算額ハ壹萬千圓ニシテ本工事ヲ起工セシハ隆熙三年(明治四十二年)十二月ニ係リ隆熙四年度(明治四十三年)竣工ノ豫定ナリ

四、木浦稅關設備ハ現在稅關竝ニ榮山江ニ面スル海岸地區ニ於ケル一部ヲ

面積二千三百六拾一坪埋築シ海岸ニハ石造埠頭數箇所ヲ設ケ尙ホ棧橋ヲ設置シ諸廳舍及上屋倉庫數棟ヲ設ク而シテ本工事費豫算額ハ九萬參千六百八拾圓ニシテ本工事ヲ起工セシハ光武十年(明治三十九年)八月ニ屬シ隆熙三年度(明治四十二年)竣功セリ

五、群山稅關設備ハ錦江河岸ノ地區ニ新ニ稅關ヲ移シ河岸ニハ棧橋ヲ設置シ面積五百二拾二坪ヲ埋築シテ沿岸物揚場ヲ整理シ廳舍其他上屋倉庫數棟ヲ設ク而シテ本工事費豫算額ハ八萬九千六百五拾圓ニシテ本工事ヲ起工セシハ光武十年(明治三十九年)十月ニシテ隆熙三年度(明治四十二年)竣功セリ

六、新義州稅關設備ハ鴨綠江南岸ノ地區ニ於テ棧橋ヲ突出シテ干潮時ト雖荷役ヲ便ナラシメ又稅關諸廳舍及倉庫ヲ新築シ其他必要ノ位置ニ監視所ヲ新築ス而シテ本工事費豫算額ハ四萬千六百四拾壹圓ニシテ本工事ヲ起工セシハ隆熙元年(明治四十年)六月ニ係リ隆熙四年度(明治四十三年)竣功ノ豫定ナリ

七、平壤稅關設備ハ新タニ大同江岸ニ接シ廳舍ヲ新築シ突堤竝ニ荷揚場ヲ

造シ其他倉庫ヲ建設ス而シテ本工事費豫算額ハ參萬五千圓ニシテ本工事ヲ起工セシハ隆熙三年(明治四十二年)四月ニ係リ隆熙四年度(明治四十三年)竣功ノ豫定ナリ

八、京城稅關設備ハ京釜鐵道南大門停車場直續ノ地區ニ於テ稅關出張所及保稅倉庫其他官舎ヲ設置ス

本工事費豫算額ハ拾貳萬六千五百九拾四圓ニシテ本工事ヲ起工セシハ隆熙元年(明治四十年)七月ニ係リ隆熙四年度(明治四十三年)竣功ノ豫定ナリ

九、大邱稅關設備ハ倉庫ヲ新設スルニ止ム

本工事費豫算額ハ五千六百圓ニシテ本工事ヲ起工セシハ隆熙三年(明治四十二年)三月ニ初マリ隆熙四年度(明治四十三年)竣工ノ豫定ナリ

六 各稅關設備工事費豫算年度別一覽表

費目	光武十年度	隆熙元年度	同二年度	同三年度	同四年度	同五年度	同六年度	同七年度	計
	(明治三十七年)	(明治四十年)	(明治四十一年)	(明治四十二年)	(明治四十三年)	(明治四十四年)	(明治四十五年)	(明治四十六年)	
海關工事費	二五,二一五	一〇,六五五	一三,三五七	九,九八六	七,九一七	二六,八三四	三〇,〇〇〇	一七,〇〇〇	四九,〇八三

仁川稅關工事費	六,九九三	二,八二〇	二,四八四	二〇,四八五	一〇,五八五	三,三九四			九四,六二七
群山稅關工事費	五,九八二	六,三六〇	二〇,〇九八						八九,五五〇
木浦稅關工事費	二,五七〇	五,七三三	一〇,六六七						九三,六八〇
京城稅關工事費		八,一八〇	九,八四四	三,五五〇					二六,五九四
釜山稅關工事費	六〇,四〇〇	四三,九一八	五,八七三	二八,〇五五	一,五七八				一四四,一〇八
元山稅關工事費	二五,三三〇	七,三三〇	二七,六二〇	六,二二〇	五,五三三				四九,一四二
清津稅關工事費		二,八二〇	八,二二七	一〇,五六〇	二,〇五四				四三,六五六
甌南浦稅關工事費	七,五九〇	四,三四五	一,九八四	一,六四七	一,八〇〇	二,五〇〇	二,五〇〇	一,四〇〇	一一,四一八
新義州稅關工事費		三,五〇〇	一,八二一						四,六六一
城津稅關工事費			七,二〇〇	四,一九〇					四八,七八〇
大邱稅關工事費			五,六〇〇						五,六〇〇
馬山稅關工事費			一,一〇〇						一,一〇〇
平壤稅關工事費				三,五〇〇					三,五〇〇

第三章 印刷事業

第一節 沿革

從來當國ニ於ケル幣政ノ變遷ハ前述ノ如ク財政整理以前ニ在リテハ貨幣ノ鑄造ハ凡テノ人民ニ之ヲ默許セシテ以テ惡貨ノ流通甚シク之カ處置ハ當局者亦大ニ苦ミタリ依テ政府ハ茲ニ見ル處アリ造幣事業ヲ統理スル必要上典圖局ヲ創設スルコト、ナリ開國四百九十六年(明治二十年)十二月京城昭義門(所謂西小門)内ニ之ヲ設置シ先ツ赤銅五文錢及黃銅拾文錢ノ二種ヲ製造セシカ越エテ開國五百一年(明治二十五年)十月ニ至リテ仁川花村ニ移轉シ銅貨壹厘錢、白銅貨貳錢五分錢、赤銅五分錢及黃銅壹分錢ノ四種ノ製造ヲ開始セリ光武二年(明治三十一年)七月更ニ龍山軍資監倉ニ移轉ス該監倉ハ從來地方ノ納稅(米穀)ヲ查收貯藏スルカ爲ニ設ケラレタルモノニシテ一時ハ全國ノ納入米穀ハ水陸ヨリ此ニ集中セラレタルヲ以テ規模頗ル廣大ナリシカ開國五百三年(明治二十七年)ノ變革ニ際シ米納ヲ變シテ金納トナシタル以來此大倉庫ノ用モ亦一時ニ廢セラレ終ニ久シク空屋タリシカ

典圖局ハ工事ノ都合上廣キ構内ヲ必要トスル爲之ヲ利用スルコト、ナリ度支部大臣ノ直轄ノ許ニ事業ヲ開始シタリ其工場及事務室ノ建坪ハ千九坪ニ達シ銀貨半圓錢、白銅五錢、白銅貳錢五分及赤銅五分錢ノ四種ヲ製造シタリ是ヨリ先キ農商工部ニ於テハ印刷局ヲ起シ收入印紙及郵便切手等ヲ製造センカ爲技師、技手數人ヲ日本ヨリ傭聘シ原版ノ彫刻及印刷ヲ實施シタリシカ此際政府ハ進ンテ正貨ノ外ニ紙幣ヲ發行流通セシメントスル計畫ヲ立ツルニ及ヒテ光武五年(明治三十四年)四月農商工部印刷局ヲ廢シ新ニ典圖局ニ印刷課ヲ設ケ從前農商工部ニ於テ使用セシ技術者及印紙、切手等ノ原版ヲ典圖局ニ移シ進ンテ同局内ニ造紙所ヲ起シ以テ紙幣用紙ノ抄造ト其印刷トヲ併行セントシタリ然レトモ此計畫ハ容易ニ行ハレ難クシテ實際ニ完成シタルモノハ收入印紙、郵便切手、同端書、國書紙、親書紙、勳記紙等ノ數種ニ過キス爾來紙幣ニ關シテハ其用紙ノ抄造ニ腐心シ屢々試抄ヲ行ヒタルモ連リニ失敗シ中途之ヲ拋棄シタルモノノ如シ光武六年(明治三十五年)ニ及ヒテ益正貨ヲ濫造シ同時ニ紙幣ノ製造ニ努メタルモ當時ノ技術ヲ以テシテハ終ニ完全ナル紙幣ヲ製造シ得サリキ然ルニ光武八年(明治

三十七年)財政顧問ハ財政整理著手ト共ニ典圖局ヲ以テ幣政紊亂ノ禍源ナリトシテ之ヲ廢止シ新ニ印刷局ヲ起シ度支部大臣ノ直轄官廳トシ次テ翌年(明治三十八年)二月官制ヲ改メテ度支部内ノ一局トナシタリシカ同年三月一日火ヲ失シテ工場全部燒失セシニ依リ新ニ之ヲ築造シ益之カ盛大ナ期セリ隆熙二年(明治四十一年)一月諸官制改正ニ際シ再ヒ之ヲ特立ノ一官廳トナシ度支部大臣管理ノ下ニ印刷製紙事業ヲ直營セシメ以テ斯業ノ發達ヲ計レリ

第二節 擴張計畫

前述ノ如ク印刷局ハ一旦失火ノ爲ニ工場全部ヲ燒失シタルモ當時財政整理ノ業著々進捗シ之ニ伴フテ印刷ノ事業多端ニ亘リ晝夜兼行業ヲ急クヘキモノアリ例セハ各道ニ設置セラレタル農工銀行株券若ハ倉庫會社ノ株券、收入印紙或ハ各種計畫案、報告書、諸用紙等皆速成ノ必要アリ假工場ノ設備未タ完カラスシテ事業ハ即チ要急ノモノノミ加之政府ノ財政計畫上新ニ紙幣ヲ製造スルノ準備計畫ノ成ルアリテ政府ハ爰ニ印刷工場ノ新築擴張ヲ企畫セリ之ニ依リテ光武十一年(明治四十年)ノ初ニ至リ右擴張計畫ヲ

決定シ之カ總豫算額トシテ四拾參萬八千四百參拾八圓ヲ運用シ同年四月先ツ活版工場百七十坪ノ修理擴張ヲ了シ次テ貴重印刷工場ノ新築擴張工事ニ著手スルヲ得タリ當時計畫ノ要旨左ノ如シ

一 技術ノ種類及生産能力

一、印刷術ノ種類ヲ舉クレハ左ノ如シ

各種銅版、銅版ノ彫刻及印刷 各種寫眞製版及印刷

各種石版ノ製版及印刷 各種貴重紙ノ抄造

二、印刷物及製紙ノ種類ヲ舉クレハ左ノ如シ

銀行券、印紙、公債證書、株券、免狀、商標、地圖、鑑札、手形、證券、小切手、教育圖畫、肖像、風景等

皇室御親書、川紙、官誥紙、勳記紙、公債證書、株券及其他ノ貴重用紙等

三一箇年間ノ生産能力ハ左ノ豫定ニ依ル

銀行券 二百萬枚

印紙(百枚續キ) 百萬枚

公債證書、株券、免狀等 三十萬枚

其他銅版、石版、寫真版等ノ雜印刷物 百七十萬枚
公債證書、株券、免狀等 三十萬枚
官誥紙、勳記紙 八十萬枚

(銀行券用紙ハ東京印刷局ノ製品ニ依ル豫定)

二 工事經過

擴張計畫ノ内建築工事ノ設計及其施行上ノ監督検査其他工事契約、工場取締ノ事務ハ專ラ之ヲ度支部建築所ニ委託シ隆熙元年(明治四十年)七月工ヲ起シ同年中ニ土工ノ全部及官舎三十戸ノ建築ヲ竣成シ印刷工場竝ニ製紙工場増築ノ分ハ孰レモ基礎及組立ノ一部ヲ了リ越エテ同三年(明治四十二年)六月兩工場全部ノ工事ヲ竣成シタリ

製紙機械及發電所ノ設備ニ關シテハ東京印刷局ニ依頼シテ其設計ヲ立テ其他工場用各種機械ハ隆熙元年(明治四十年)中ニ注文契約ヲ了シ而シテ翌年中ニ於テ諸機械到着シ隆熙三年(明治四十二年)上半季ニ於テ其据付ヲ了シタリ

工事完成シテ新舊工場ヲ合計セハ印刷所千三百〇八坪、製紙所二百八十坪、雜建物千百八十九坪ヲ有スルニ至リ猶附帶設備トシテ工作所一棟、發電所一棟、給水所一棟、貯水池一箇所ヲ有シ工場内動力、電燈、用水ノ供給等完全ナルヲ得タリ

第三節 工場配置

本局新舊工場ノ修理及擴張共ニ其工事完了ヲ告ケタルヲ以テ隆熙三年(明治四十二年)七月ヲ以テ工場各室所ノ配置ヲ改正シ直ニ之ヲ實施シタリ

一、第一印刷所(舊來ノ工場)

普通活版ノ製版及印刷製本ノ作業之ニ屬ス之ヲ區分シテ鑄造室、植字室、校正室、活版室、整工室トナス

二、第二印刷所(新建ノ工場)

貴重品ノ製版及印刷整工ノ作業之ニ屬ス之ヲ區分シテ圖案室、整版室、電胎室、凸版室、凹版室、石版室、寫真室、製肉室、肉棒室、乾燥室、整工室トナス圖案室ハ圖案及原版ノ彫刻ヲ掌リ整版室ハ此ノ原版ニ基キテ實用版ヲ整備シ電胎室ハ電氣作用ニ依リテ版面ノ増殖ヲ掌リ凸凹版及石版室ハ皆各其名稱ノ版式ニ依ル印刷ヲ掌ル

三、製紙所

證券、株券、官誥紙等貴重用紙ノ抄造作業之ニ屬ス之ヲ區分シテ原料室、蒸
資室、調理室、抄紙室、乾燥室、整工室トナス

四、京城出張所

官報ノ印刷及各部要急印刷物ヲ速成スル爲大漢門前ニ出張所トシテ小
工場ノ設ケアリ普通活版ノ設備ニ止マレリ

第四節 事業概要

典圖局印刷課ハ光武五年(明治三十四年)四月ノ設置ニ係リ今日ニ至ル約十
年ノ經過ヲ見ル然レトモ中途祝融ニ遭ヒ其ノ前半五年ノ事業及其計畫ヲ
廢滅セシメタリ依テ光武十一年(明治四十年)以降新ニ工場ヲ修理及擴張シ
其工事ノ進捗ニ伴フテ事業亦漸次ニ増進シ本年ニ至リ初メテ當始ノ目的
タル紙幣製造ノ實施ニ到着シ將ニ後半季ヨリ之ヲ開始セントス即チ此後
半五年ハ專ラ準備時代ニ屬シタルヲ知ルヘシ然レトモ此準備時代ニ於テ
モ要急ノ印刷物ハ悉ク之ニ應シテ進捗ヲ圖リ以テ各官衙及銀行其他公共
團體等ノ急需ヲ充スヲ得タリ今最近數年間ニ印刷局カナシタル重要ナル

モノヲ舉クレハ左ノ如シ

- 一、收入印紙
- 二、手形用紙
- 三、出給命令用紙
- 四、農工銀行株券
- 五、共同倉庫會社株券
- 六、韓一銀行株券
- 七、小切手用紙類
- 八、國有地小作認許證
- 九、農工債券
- 十、韓國銀行株券
- 十一、國庫債券及第二回農工債券
- 十二、增補文獻備考
- 十三、金融事項參考書
- 十四、度支部統計年報
- 十五、度支部定期刊行物 財政整理報告、財政經過報告、財務週報、財務彙報、度支部公報、韓國經濟月報
- 十六、關稅局定期刊行物 貿易旬報、貿易月報、貿易年報
- 十七、學部編纂曆本及教科用書
- 十八、農商工部刊行物 水產誌、韓國通覽
- 十九、統監府及其所管官署刊行物 施政年報、統監府法規提要、通信公報
- 二十、官報、法規類及職員錄
- 二十一、各官衙帳簿類

第五節 技術ノ整備

技術ノ威嚴ト作業上ノ信用トハ印刷事業ノ生命ナリ印刷局ハ其擴張工事

竣成以來工場ノ配置、新器械ノ据付、暖管用水ノ設備、略完成シタルモ前記ノ如ク技術ノ威信ヲ維持センニハ尙ホ之ヲ以テ足レリトセス即チ技術者ノ增聘作業ノ改善、工場ノ監視、徒弟ノ教育等細大ニ亘リテ之ニ着手ス之ヲ活版部ニシテハ母型ノ整理、活字ノ改鑄、新體活字ノ創始或ハ當國古來ノ眞鍮版ヲ利用シテ新式ノ金屬版ヲ案出スル等ノ事アリ之ヲ貴重品印刷部ニシテハ近者特ニ専門ノ圖案彫刻家ヲ聘用シ大ニ改良ヲ施シ整版、電胎、凹版、凸版、各作業ニ至ル迄皆新ニ専門ノ技工ヲ增聘シ以テ一意專心事業ニ當ラシムルアリ本年後半季ニ於テ韓國銀行券ノ製造ニ著手シタル等之ヨリ年々貴重品印刷ノ事項ヲ加へ來ラントス抑モ當國諸般ノ政務創始ノ時ニ屬シテ事ヲ起スコト急遽ノ必要ナルコト多シ從テ印刷事業亦之ニ伴フテ急遽ノ運用ヲ必要トスルヲ免レス速成ニシテ精確兼ネテ技術上ノ威信ヲ絕對ニ確保セントス之レ蓋シ當局者苦心ノ存スル所ナリ而モ今ヤ幸ニ經營上及技術上ノ基礎略完成シ專ラ其運用ヲ待ツニ會シ公私ノ急需ニ遭フモ之ニ應接シテ違算ナカラントス

次ニ印刷局ニ於ケル資本額及收支ノ狀況ヲ示セハ左ノ如シ

一 印刷局資本一覽表

隆熙四年(明治四十二年)一月一日現在

種別	數	量	價	格	備	考
固定資本	計	土地	一五、六三二	四六	一、〇〇九、九二〇	坪數ハ建坪ノミヲ計上ス
		建物	三、六七九	三五	三、五七九、四九三	
		工作物及機械、器具	三〇八	〇	一三、三〇九、二〇〇	
運轉資本	計				四〇、〇〇〇、〇〇〇	定額拾五萬圓ノ内編入濟額
合計					六三、三〇七、〇二〇	

二 印刷局收支累年一覽表

年次	運轉資本編入額	政府支出金額	收入調定額	經費支出額	備考
光武九年(明治三十八年)			四、九二七	四〇、五二七	
同(同)十年(明治三十九年)			七、六四二	九八、八七九	
隆熙元年(明治四十年)	四〇、〇〇〇、〇〇〇	四八、〇〇〇、〇〇〇	七、五七〇	一、〇二八	本年度ヨリ特別會計施行
同(同)二年(明治四十一年)		七〇、〇〇〇、〇〇〇	九、九一〇	一、五九四	
同(同)三年(明治四十二年)		七〇、〇〇〇、〇〇〇	一三、一七五	一、九七四	
同(同)四年(明治四十三年)		七〇、〇〇〇、〇〇〇	一三、一七五	一、九七四	

第四章 航路標識

當國現時ノ航路標識事業ハ明治二十七八年日清戰役ニ際シ日本國政府ニ於テ艦船ノ通航上其設備ノ必要ヲ感シ當國全沿岸ニ於ケル樞要ナル燈臺建設位置及其設置スヘキ燈臺ノ種類等ニ關シ時ノ參謀總長ヨリ遞信大臣ニ商議シ次テ日本ヨリ遞信技師ヲ派遣シ開國五百四年(明治二十八年)六月ヨリ九月ニ至ル四ヶ月間ニ涉リ汽船明治丸ヲ以テ當國全沿岸ノ測量ヲ遂ケ其建設スヘキ位置及設計ノ概要等ヲ調査シタルヲ以テ濫觴トス而シテ其後光武五年(明治三十四年)五月中駐韓日本公使ヨリ日本人民貿易規則中韓國政府ニ於テ後來通商各港ヲ修理シ及燈臺礁標ヲ設クヘシ云々トアル趣旨ニ基キ標識設置ノ議ヲ當國政府ニ交渉シ來リタルヲ以テ總稅務司ハ海關收入中ヨリ右設備費トシテ貳拾五萬圓ヲ支出スルコト、シ經歷アル技師ノ招聘及建設位置ノ調査等ニ關シ日本外務省ニ商議シタル結果遞信省ニ於テ海軍省、航路標識管理所、日本郵船株式會社及大阪商船株式會社等ノ意見ヲ徵シ當國ニ於ケル樞要ナル鴨綠江航路、大同江航路、自大同江至漢江

航路、仁川航路、群山航路、木浦航路、西岸及南岸航路、釜山航路、元山航路、城津附近航路ノ十航路ニ燈臺三十五、燈竿二、燈船一、挂燈立標二、挂燈浮標十五、浮標三十九、總計九十四箇所ノ建設ヲ豫定シタルモ同年十一月中日本政府ヨリ技師ヲ派遣シタルヲ以テ更ニ實地ヲ踏査シ全沿岸ニ於テ七十七箇所ヲ選定シ、タリ然レトモ當時經費多端ニシテ到底全都ノ要望ニ應スル能ハザリシヲ以テ結局其内最モ必要ナル地點三十二箇所ニ建設スルコト、爲セリ而シテ燈臺建設ノコト決スルヤ之カ管理官廳ヲ置クノ必要ヲ認メ光武六年(明治三十五年)三月海關燈臺局ヲ仁川ニ置キ先ツ同年五月ヲ以テ仁川航路ニ當ル小月尾島、八尾島、北長子嶼及白岩ノ四燈臺ノ建築工事ヲ開始シ尋テ翌年四月莞島燈臺ノ建築ニ著手シ光武七年(明治三十六年)六月小月尾島外三燈臺ニ翌年四月莞島燈臺ニ點燈ヲ爲スニ至レリ是韓國ニ於ケル燈臺建設ノ嚆矢ナリトス

光武七年(明治三十六年)十一月日本ヨリ派遣シタル技師ノ辭任スルヤ總稅務司ハ更ニ英國技師ニ囑託シテ專ラ標識ノ設計等ヲ擔任セシメタリ越エテ光武八年(明治三十七年)二月日露ノ國交破裂シタル爲日本政府ハ艦船ノ

航通上鴨綠江方面ニ於ケル燈臺ノ急施ヲ感シ該江口ヨリ清國安東縣ニ至ル航路ニ燈臺竝浮標ヲ設置スルコト、シ日本大本營ニ於テ同年四月以降之カ建設ニ著手シ多數ノ浮標ヲ碇置シタリ又同年五月大和島燈臺ヲ建設シ同七月ヨリ點燈ヲ開始シタリ其他韓國西岸七發島竹島及南岸巨文島ニ燈臺ヲ建設シ又海軍ニ於テハ南岸牛島及鴻島竝東岸蔚崎及葛麻角ニ燈竿ヲ建設シ韓國政府又釜山港古館ニ導燈ヲ港内鵜ノ瀨ニ挂燈立標ヲ建設シタリ進シテ光武九年(明治三十八年)ニ至リ茲ニ囑託シタル英人ノ職ヲ解キ翌年二月中更ニ日本ヨリ技師ヲ招聘シ同年三月海關燈臺局ヲ稅關工部燈臺局ト改稱シ航路標識ニ關スル一切ノ業務ヲ管掌スルコト、爲シ一方光武十一年(明治四十年)三月マテノ間ニ於テ茲ニ大本營及海軍ノ經營シタル標識全部ノ引繼ヲ受ケ茲ニ初メテ韓國ニ於ケル標識事業ヲ統一スルコト、ナレリ斯クシテ稅關工部燈臺局ニ於テハ韓國全沿岸ヲ通シテ八十餘箇所ニ標識設置ノコトヲ計畫シ之カ工費トシテ百貳拾六萬九千餘圓ヲ計上シ次テ今日ニ至リタリ而シテ稅關工部燈臺局ノ名稱ハ隆熙二年(明治四十一年)一月ヲ以テ燈臺局ト改メ隆熙四年(明治四十三年)四月ヲ以テ航

路標識管理所ト改稱シタリ

今隆熙三年(明治四十二年)末ニ於ケル航路標識種別及海岸別竝同四年(明治四十三年)ニ増減スヘキ航路標識種別及海岸別ヲ舉クレハ左ノ如シ

一 隆熙三年(明治四十二年)末航路標識種別

名 稱	等 級					外 計
	一 等	二 等	三 等	四 等	五 等	
燈 臺						二
導 燈						一
挂 燈						七
挂 燈						四
浮 標						三
立 標						八
導 標						二
霧 笛						二〇
霧 砲						二
計						四四

ラス船籍船税ニ關スル規定亦不備缺點多キヲ以テ之カ統一上當局者ハ船
舶ニ關スル各種法規ヲ制定スル必要ヲ認メ本年三月船舶法、船舶検査法、船
舶積量測定法、及其實施上必要ナル諸法規ヲ制定シテ之ニ抵觸スル舊法令
ヲ廢止シ同時ニ船舶信號ノ方法ヲ定メ共ニ四月一日ヨリ實施シ茲ニ初メ
テ船籍ノ登録及各種船舶上ノ權利ノ確認船税ノ徵收及航海ノ安全保護等
ニ關スル法規ヲ統一スルヲ得タリ即チ新ニ實施セラレタル船舶法規ニ關
スル事務ヲ處理センカ爲ニ各稅關ニ技術官ヲ配置シ検査事務ヲ掌ラシメ
總噸數二十噸以上及積石數二百石以上ノ船舶ノ登録及船税ニ付テハ稅關
之ヲ所掌シ總噸數二十噸未滿(帆船ニアリテハ總噸數五噸未滿ヲ除ク)及積
石數二百石未滿(積石數五十石未滿ヲ除ク)ノ船舶ノ船籍及船税ニ就テハ財
務署之ヲ所掌スルコト、ナレリ而シテ韓國沿岸ヲ航行セル日本船舶及船
舶法ノ支配ヲ受ケサル日本船舶ノ事務ニ就テハ從來何等ノ法規ナク便宜
ノ取締ニ一任シアリタルモ今次當國船舶法規ノ制定セララル、ニ至リタル
ヲ以テ統監府ニ於テモ前記船舶ヲ一定ノ規則ニ依リ取締ヲ爲スノ必要ヲ
認メ府令ヲ以テ船舶規則及船舶検査規則ヲ制定シ之カ検査事務ハ當國稅

關検査官吏ニ委託シ日韓同一歩調ノ下ニ登録及検査ヲ行フコト、ナレリ

二 海員

前述ノ如ク當國ニ於テハ航海業未ダ開ケス從ツテ海員ニ關スル規則トシ
テ見ルヘキモノナシ唯開國四百九十五年(明治十九年)ヲ以テ公布セラレタ
ル雇用工人之章程アリ稅關ニテ之カ取扱ヲ爲シ來リタルモ該章程ノ適用
ハ主トシテ外國人ヲ船長トシテ雇用シタル場合ニ在リテ一般海員ニ關シ
テハ何等法規ノ存在スルモノナク又實際取締ノ機關ナカリシナリ而シテ
今次船舶法規統一セラル、ニ至リタルモ當國現今ノ狀況ニテハ特ニ海員
ニ關スル規定ヲ設クルノ時機ニ達セサルヲ以テ單ニ検査事務ノ一部トシ
テ稅關ニ於テ便宜之カ取締ヲ爲スコト、セリ然リト雖將來航海業ノ發達
ト共ニ海員ニ關スル各種ノ規定ノ必要ヲ見ルハ明カナリトス
因ニ隆熙元年(明治四十年)中海員養成ノ爲メ其規程ヲ設ケ釜山稅關ニ於テ
修技生ヲ募集シ汽船楊武號ヲ海員養成所ニ充テ專ラ韓國ノ子弟ヲ入所セ
シメ航海科及機關科卒業生十五名ヲ出シ成績良好ナリシモ一回ニシテ廢

絶スルニ至レリ

三 水路嚮導

當國ニ於テハ水路嚮導ニ關シ從來何等ノ制度ナク光武十一年(明治四十年)中日本陸軍ノ經營セル鴨綠江航路標識ヲ當國政府ニ引受ケ管理スルニ至リ同時ニ鴨綠江ニ於ケル水路嚮導事務ノ引繼ヲ受ケタルニ依リ燈臺局所屬船鴨川丸、綠川丸ノ二艘ヲ以テ好意上船舶ノ要招ニ應シ之ヲ繼續シ來リタル外群山港ニ於テ日本人ノ之ヲ私營セルアリ而シテ鴨綠江水路嚮導ノ事務ハ爾來龍岩浦燈臺局分署ヲシテ取扱ハシメ來リタルモ本年三月官制改正ノ結果稅關事務ニ移サレ爾後鎮南浦稅關ノ所掌スルトコロトナレリ

第二節 開港檢疫

開港檢疫事務ハ從來稅關ノ取扱ニ屬シ開國四百九十六年(明治二十年)七月列國使臣ノ承認ヲ經テ實施セル通商港傳染疫病侵入豫防假設規則ニ依リ之ヲ執行セリ即チ檢疫ハ傳染病アル地方ヨリ來ルカ又ハ航海中傳染病ヲ出シタル船舶ニ對シテ之ヲ執行スルコト、ナレリ而シテ有病地ノ認定ニ

關シテハ二様ノ方法アリ即チ一ハ當該國政府ノ爲シタル傳染地公認ノ事實ニ依リ決スルモノニシテ他ハ稅關長、理事官及條約國領事トナ以テ成立スル協議會ニ於テ多數意見ニ依リ決セラル、モノトス尤モ先年日本各地ニ「ペスト」病發生後ニ於テハ阪神地方ハ常ニ有病地ト認メラレ入港船舶ノ大部分ハ該規則ノ適用ヲ受クヘキモノトセラレタルニヨリ事實ニ於テハ常時檢疫ト多ク撰ムトコロナシ

檢疫事務ハ從來稅關ニ檢疫醫アリテ之ニ從事セシメタルモ隆熙二年(明治四十一年)以降ニ於テハ官制上ノ港務醫官又ハ港務醫官補ヲ置キタル稅關支署所在地ノ如キ小規模ノ開港ニ在リテハ尙ホ地方醫ニ囑託スルノ方針ヲ採リ以テ今日ニ至レリ又關釜聯絡船ニ對スル檢疫ハ福岡縣港務部ト協議ノ結果隆熙二年(明治四十一年)十二月以降該船乘組日本檢疫官ニ囑託シ進航中ノヲ執行スルコト、セリ

次ニ檢疫所設備ニ關シテハ光武六年(明治三十五年)初メテ仁川港、月尾島ニ建設セル患者收容所ノ外各港何等ノ設備ナカリシニ依リ政府ハ開港設備工事ノ一部トシテ仁川、釜山、元山、鎮南浦ノ四港ニ檢疫所ヲ建設スルコトニ

決定シ既ニ釜山及鎮南浦ニ於テハ其建築工事畧竣功ヲ告クルニ至レリ

附 關係日本人職員

政府財政顧問部創設以來當國財務ニ從事シタル日本人官吏中其重ナルモノヲ列舉スレハ左ノ如シ

日本人高等官竝同待遇者現在員調 明治四十三年八月十五日現在

就職年月	日本官名	韓國官名	氏名
明治三十九年一月	統監府書記官	釜山税關長	山岡義五郎
同三十七年十月	統監府書記官	度支部司稅局長兼臨時財源調查局長關稅局長	鈴木穆
同四十三年五月	陸軍工兵大佐	土地調查局測量部長	土屋喜之助
同四十一年五月	統監府書記官	土地調查部書記官	佐々木藤太郎
同三十九年四月	大藏省臨時建築部技師兼大藏技師	建築所技師	阪出鳴海
同年五月	統監府書記官	兼臨時財源調查局長	小林重
同年二月	統監府書記官	仁川税關長	宮木又七
同四十年一月	統監府書記官	大邱財務監督局長	川上常郎
同四十一年九月	大藏省臨時建築部事務官	兼臨時財源調查局書記官	上林敬次郎

關係日本人職員

二九三

明治四十二年四月	同 四十年一月	同 三十八年八月	同 年同月	同 四十二年六月	同 四十二年十月	同 三十九年四月	同 年八月	同 三十七年十二月	同 三十九年二月	同 年十二月	同 四十二年三月	同 四十二年十月	同 三十八年七月	同 四十年一月
統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	陸軍少尉	專賣局技師兼主事	水產講習所教授兼技師	統監府技師	臺灣總督府稅務官	陸軍砲兵少尉	統監府書記官	統監府技師	稅關鑑定官	造幣局技師	統監府書記官	統監府書記官
檢査官	航路標識管理所技師	度支書記官	土地調查局書記官	臨時財源調查局技師	臨時財源調查局技師	關稅局技師	度支部書記官	關稅局書記官	度支部書記官	稅關鑑定官	度支部技師	平壤財務監督局長	度支部技師	平壤財務監督局長
落合芳藏	矢野久三郎	島重治	藤川利三郎	佐竹義準	荒井寅治	塚本道遠	木下重松	久芳直介	有賀光豐	藤原正文	矢田下次	西川麻五郎	西尾守行	佐々木正太

同 四十年二月	同 年三月	同 三十九年十二月	同 四十年五月	同 四十年五月	同 四十年六月	同 四十年五月	同 年同月	同 年同月	同 三十八年十二月	同 三十九年九月	同 四十年二月	同 四十二年六月	同 三十九年十一月	同 三十七年十月	同 三十八年六月
統監府書記官	海軍少佐	稅務監督局事務官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	統監府書記官	陸軍臨時建築部技師	大藏省臨時建築部技師	陸軍工兵少尉	統監府技師	稅關事務官補	大藏書記官	稅務監督局事務官	鹽務局事務官	鹽務監督局事務官
臨時財源調查局書記官	航路標識管理所技師	光州財務監督局長	元山稅關長	土地調查局技師	度支部書記官	度支部書記官	元山財務監督局長	兼臨時財源調查局技師	兼臨時財源調查局技師	建築所技師	印刷局事務官	土地調查局書記官	檢査官	度支部書記官	度支部書記官
赤倉吉三郎	三浦義深	堀諫	野手耐	阿部惠三郎	河內山樂三	吉松憲一郎	櫻井小一	永井松次郎	國枝博	鹽屋智隆	和田一郎	內海英吉	陶山武二郎	平野與次	平野與次

明治三十八年六月	稅務監督局事務官	度支部事務官	不破重兼
同三十九年三月	土地調查局技師	中田三郎	
同年八月	煙草專賣局事務官補稅關事務官	小幡三郎	
同四十年九月	大藏局度支部事務官	梶島榮孝	
同四十年五月	統監府書記官兼土地調查局書記官	菅山勇	
同三十九年十二月	稅務監督局事務官兼鹽務局事務官	吉田政治	
同四十一年五月	稅關鑑定官	市川豐治	
同四十三年五月	土地調查局事務官	小野朔二郎	
同三十九年六月	財務監督局事務官	秦秀作	
同四十年二月	大藏局屬稅關事務官	寺尾規矩郎	
同三十九年十一月	度支部技師	掛札季藏	
同三十八年九月	統監府技師	勝又六郎	
同年同月	統監府技師	遠藤善十郎	
同三十九年六月	理事廳副理事官	八木親豐	
同四十年五月	稅務監督局事務官	石川鈴輔	

同四十二年八月	陸地測量師	度支部事務官	野坂直次
同三十八年十二月	統監府技師	土地調查局技師	豐田四郎
同三十九年七月	統監府技師	建築所技師	石原錠太郎
同四十二年三月	理事廳副理事官	土地調查局事務官	藤宮惟一
同年五月	航路標識管理所技師	三浦矩明	
同四十年九月	統監府書記官	全州財務監督局長	須藤素
同年同月	統監府書記官	稅關事務官兼關稅局事務官	深尾道恕
同三十九年八月	稅務監督局事務官	公州財務監督局長	矢鍋永三郎
同四十年五月	遞信技師	建築所技師	馬淵誠之
同三十九年五月	農商務技師	臨時財源調查局技師	渡邊歸一
同四十年七月	稅務官	度支部事務官	吉田格之進
同四十二年八月	稅務官	稅關港務醫官	壬生一夫
同四十二年九月	稅務官	財務監督局事務官	召田寅一良

關係日本人職員

同 三十九年六月	同 四十年二月	同 四十二年十月	同 年十月	同 年十一月	同 年同月	同 年九月	同 四十年七月	同 三十九年五月	同 年十二月	同 四十年八月	同 三十九年十一月	同 四十年九月	同 四十二年二月	明 治 三 十 八 年 十 月
稅務監督官	稅務監督官	稅務監督局事務官	稅務監督局事務官	山林事務官補	大藏省臨時建築部技師	稅務監督局事務官	稅務監督局事務官	稅務監督局事務官	稅關事務官補	稅關事務官	稅關事務官	統監府書記官	統監府書記官	關稅局運轉士
稅關事務官	財務監督局事務官	財務監督局事務官	財務監督局事務官	建築所技師	建築所技師	財務監督局事務官	土地調查局事務官	財務監督局事務官	度支部技師	稅關監視官兼稅關港務官	印刷局事務官	財務監督局事務官	建築所技師	鹽坂長喜
黑部寅一	太田德太郎	松崎俊造	米山喜源太	佐久間省三	疋田玄龜	佐々木保之	橋本金太郎	山口豐正	太田黑宣三	吉村直二郎	高木正雄	水口隆三	村幸長	

二九八

同 三十八年十二月	同 三十九年四月	同 年八月	同 年同月	同 四十年五月	同 三十九年十月	同 三十八年九月	同 四十年十月	同 四十二年三月	同 四十二年十二月	同 四十二年九月	同 四十年十月	同 四十年五月	同 三十九年五月	同 三十八年十一月
兵庫縣農事試驗所技手	陸軍歩兵中尉	陸軍歩兵中尉	稅務監督局事務官	稅務監督局事務官	稅務監督局事務官	稅務監督局事務官	稅務監督局事務官	陸地測量師	統監府技師	陸地測量師	稅務監督局事務官	稅務監督局事務官	稅務監督局事務官	煙草專賣局技手
財務署財務官	財務監督局事務官	關稅局事務官	關稅局事務官	煉瓦製造所事務官	煉瓦製造所事務官	煉瓦製造所事務官	煉瓦製造所事務官	稅關港務醫官	稅關技師	土地調查局技師	財務署財務官	財務監督局事務官	財務監督局事務官	建築所技師
高崎親和	藤本元次郎	安部直介	酒井孝德	今井潔	奧村英一	高久敏男	犬塚宣次郎	高關八百千郎	千葉萬壽	牧	小笠原寬	米內金策	岩城信太郎	富家正義

關係日本人職員

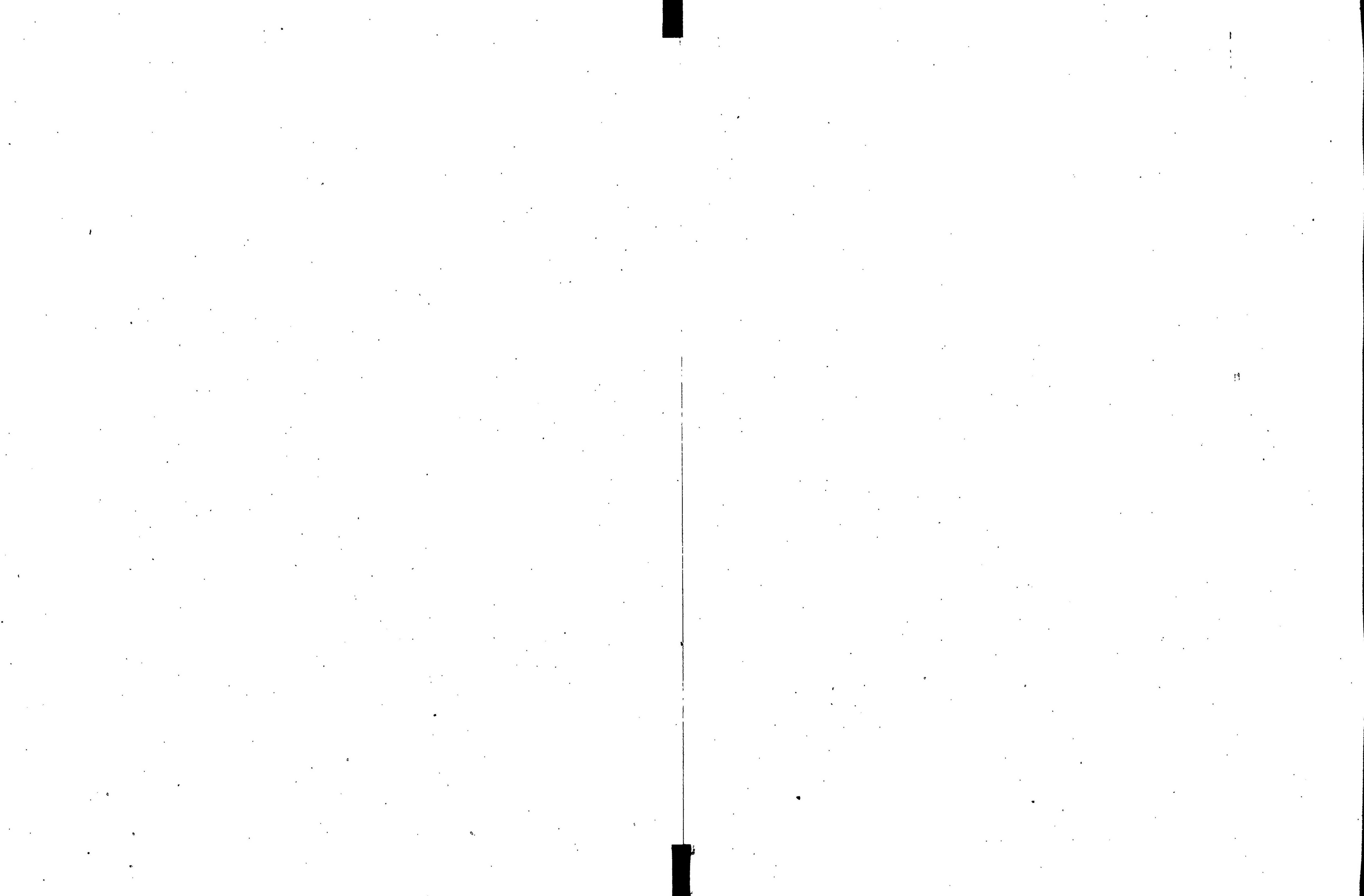
二九九

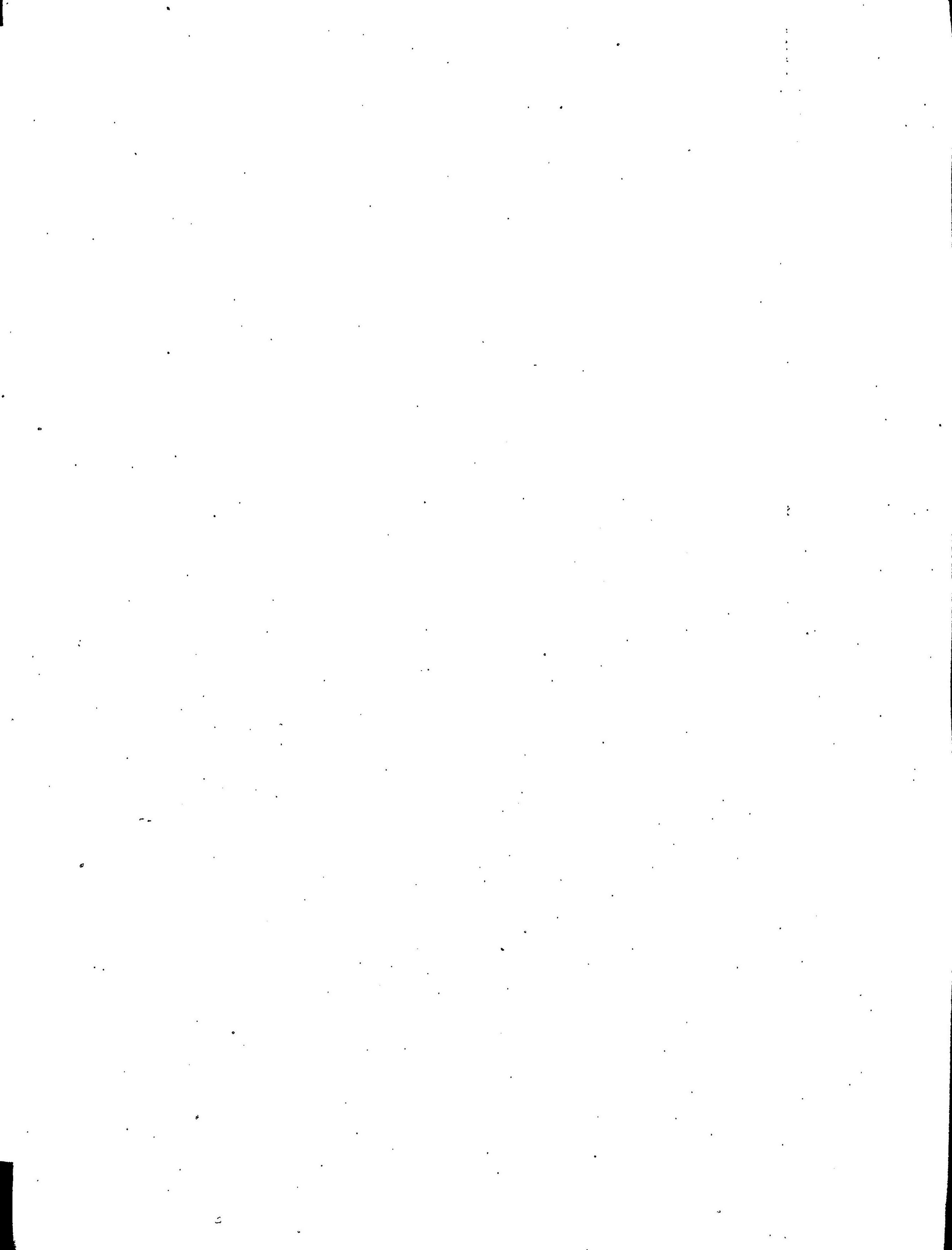
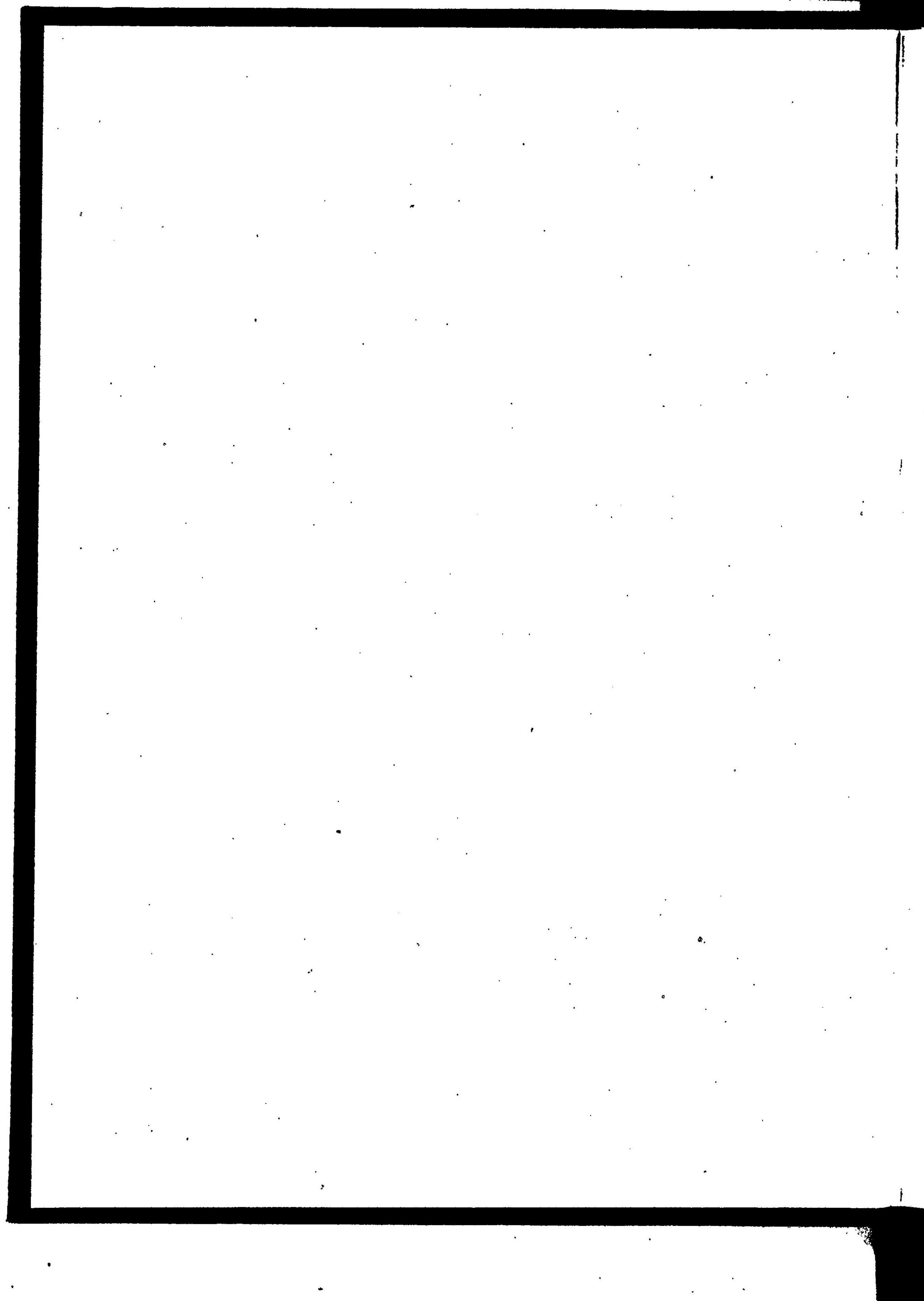
明治四十年八月	陸軍歩兵少尉	度支部技師	石井彌三郎
同四十年十一月	會計検査院屬	検査官	服部豊吉
同四十二年十月	大藏	財務署財務官	安原時太郎
同四十年八月		印刷局技師	原井浩
同三十九年八月		印刷局技師	橋本鱒市
同三十九年八月		土地調査局技師	池田活之祐
同四十年六月	税關監視官	税關監視官兼税關港務官	釜澤益太郎
同四十年十一月	稅務監督局屬	財務署財務官	北村健吉
同四十二年四月		臨時財源調査局技師	鳥居嚴次郎
同四十二年十月		建築所技師	渡邊節
同四十二年二月	關東都督府屬	財務署財務官	大和田眞治
同四十二年十一月		土地調査局技師	谷武松
同四十二年三月	稅務監督局事務官	兼稅務監督局事務官	高田官吾
同四十二年三月		建築所技師	八島明
同四十二年四月	稅務監督官補	財務署財務官	渡邊善道

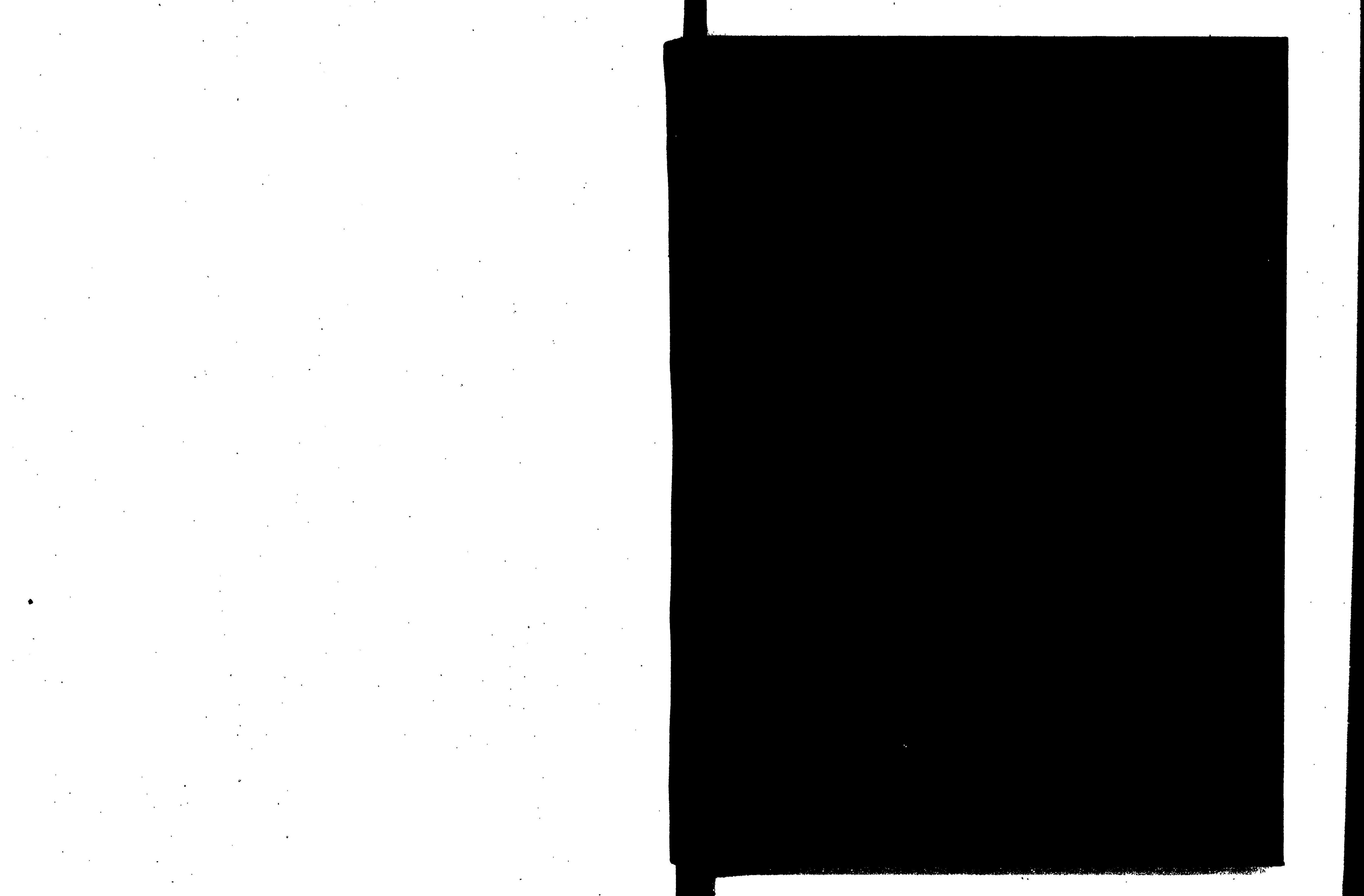
同 年五月	税關事務官補	臨時財源調査局技師	二宮常八
同 三十八年十月	陸地測量師	土地調査局技師	黒田達之
同 四十二年十二月	兼稅務監督局事務官	財務署財務官	梅津武雄
同 三十九年五月	鹽務局屬	財務署財務官	光市次郎
明治四十年七月	稅務署稅務屬	財務署財務官	佐野林太郎
同 年同月	稅務監督局稅務屬	財務署財務官	曾根侃
同 年五月	統監府技師	度支部事務官	草場信治
同 四十二年三月		印刷局技師	伊東清七郎
同 四十二年九月		印刷局技師	豐田多賀雄
同 三十一年八月		印刷局技師	松崎米藏
同 四十年六月	稅務署稅務屬	財務署財務官	太田和太郎
同 四十年九月		印刷局事務囑託(勅待)	中村藏治
同 四十二年十月		印刷局事務囑託(勅待)	齋藤知三
同 年十二月	海軍少佐	囑託光濟號艦長(奏待)	田口久盛
同 四十二年十二月	海軍機關大尉	囑託光濟號機關長(同)	作間芳夫

150-100

13







040482-000-3

331-14

韓国財政施設綱要

韓国度支部

M43.8?

BDE-0069



